第一回 銀華文学賞 発表

第一回銀華文学賞に多数のご応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで二一〇編の応募作品が寄せられ、人生経験豊かな方々の力作が揃い、たいへん充実した選考となりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、選考委員／河林満・飯田章・小浜清志・小沢美智恵・大高雅博・八覚正大・五十嵐勉による厳正な審査を経て、以下の通り受賞作が決定いたしました。ここに発表させていただきます。

なお、優秀賞は2号以降に、奨励賞の一部は補助号「文芸ウェーブ」に掲載される予定です。

また、銀華文学賞授賞式は二〇〇五年一月三〇日午後三時より日本出版クラブにて創刊記念文芸講演会とともに行ないます。ぜひご参集ください。

第二回銀華文学賞は昨年と同じ要領で八月三一日締切で募集を行ないます。奮ってご応募ください。

銀華文学賞

当選「筑後川彩雲」　西村聡淳
当選「きずな」　東天満進
当選「オネスト！」　小沢　恭

特別賞

「午前の死」　三紀村艸

優秀賞

「箔押所異聞」　高橋惟文
「ゆきのした」　木下訓成
「未遂」　山脇正邦
「つゆのいのち」　鎌田昭成
「かたつむり碁会所」　三好郁子

選評

経験と熟達の輝き

八覚正大

ちなみに筆者は五十歳を少し過ぎた、銀華文学賞の対象年齢に辛うじて？到達している者である。今回、選者になり、むしろ学ばせてもらったという印象が強くある。

さて老人力というものに気づかせてくれた作家であり芸術家がいる。老人党を結成した作家で精神科医もいた。しかし今回、このように〝まざまざ〟と、年配者たちの力量を見せられると、いったい商業誌の編集者というのは、何を見て選び雑誌に掲載するのか、はなはだ疑わしい気持ちになってくる。新自由主義、市場経済主義が社会に蔓延し、売れるモノ・イズ・ベストという考えは一面否定しようがないかに見え、IT化が進み、さまざまな職場は伝達の最効率手段として〝数値化〟を採用し、それに乗りかかりつつある。しかしそれが人間性の向上、命の輝きを増させる

奨励賞

「双葉葵」　米川忠臣
「霊園造成会社社長」　三好洋

「質問してもいいですか」　斎藤澄子
「幻の季節」　清松吾郎
「Three Days」　天空海
「ほぼろを売る」安芸遙
「我が心のギレスン」　小佐美智子
「琴」　藤生純一
「虫」　川畑和嗣
「口」　五月薫
「ガス壊疽」「胎内往生」　山岸恵一
「封印」　仲間秀典
「歌手」　安本嘆
「たちわかれ」　城山達郎
「砂山」　二宮英郷
「金閣寺亡命」　下山良行
「立山連峰」　大竹孝光
「あだし野へ」　有森信二

「水色のセメントサイロ」　北風嘉己
「三都物語」　渡邊あやひさ
「あるかないかの細い雨」　田島朝美
「映子」　黛汎海
「人魚の泡」　文野ルミ
「ヤマシャクナゲ」　箱嶌八郎
「おふくろの味」　太田悠
「ノスタルジア」　綾羽一紀
「血の手押し車」　渋谷江津子
「かくして与一にけり」　故郷を捨て　福明子
「帰郷」　木内よしひさ
「5分間」　能登まこと

ものなのであろうか？

言葉の一回性に賭ける文学とは、飽くなき自由の探求であり、人間性の無謀とも言える思考実験の枠なき場であるとするなら、出版商業ベースのコンテナはかなり屈折し矮小化した、売買の欲望に歪められたフォルムをますます誇張していくように思えてならない。

この賞はそんな世情に対する反抗であり、迎える高齢化をプラスに転じようという大胆な試みといえるだろう。

まず受賞三作について述べてみたい。

「オネスト！」は、したたかなユーモアと反戦とそして人間の連帯の意味を感じさせられる。仲間が水中に落とした恩賜の鉄砲の部品を小隊のみなで探し見つけた伊藤桂一の小説や、童話だったか――国境で向き合う警備兵の友情の話とかを、かすかに連想しつつ読んだ。あるいは野間宏の「真空地帯」などを一瞬思い出したりもした。しかし戦後六十年近く経ってしまった現在、その伝え方には〝工夫〟がいると思う。通訳に抜擢された主人公も選ぶアメリカ側もしたたかに人間くさい。だいぶきな臭くなり、一国のプライドで盲目になり始めたアメリカの暴走を見つつ、このような作品がアメリカ側のヒューマンな良識とも呼応してほしい――そんな思いも重なった。

「筑後川彩雲」は、障害の出た病への同情を持ちつつ読んでいった。しかしそれが筑後川という風土につらなる庶民の生活をゆったりと描いていることに好感がもて、ついには感銘に至った。奇を衒うことのない、おそらく現在の商業誌には見向きもされない作品かもしれない。しかし、このような表現の仕方が、人間の生きざまをしっかりと包容している事実を評価したい。

「きずな」は戦争を挟んで、刀に賭けた一族のプライドを切っ先鋭く突き詰めた作品である。作者の実体験もあろう。その点は書き切れ見事なとしかいいようはない。ただ、文学というのは、主人公も、そして作者の思いまでも裏切る意外性があってもいい、それが命の生成的な輝きというものだ。この作品は「オネスト！」に比べると、戦争をベースにしつつ人間の命のしたたかさへの視線が希薄に思えた。

「午前の死」は、文筆の鮮烈さは買う。しかしあまりにも死を重ね過ぎては、かえって興ざめな感じがした。

優秀作「箔押所異聞」は、聞き馴れない箔押所という仕事の話から、蒲田行進曲や学者の改心なども組み入れ、熟年の愛への予感を感じさせるほのぼのとしたヒューマンなエンタテインメントである。エンタテインメント部門を作ったならこの作品が受賞していただろう。

「ゆきのした」は、ある時代の青春群像とでもいうような世界を重厚に描いている。

「未遂」は権力に逆らえなかった父親の息子を亡くしてからの気づきが、時代を超えて人間の尊厳を訴えて来る。

「つゆのいのち」は臨場感のある筆致は読ませた。

「かたつむり碁会所」は、発想は面白いが、リアリティにもう一工夫。

「双葉葵」は、性愛について老成された、しかし、潤いのある筆致で描いた秀作である。かつて愛した女性と現代の女子との対比がいい。

「霊園造成会社社長」の発想は面白かったが。

その他、奨励賞の「質問してもいいですか」の筆者は、この作品の扱う、人間の欺瞞性に対する追及をかなりのものとして評価し、すくなくとも優秀作には該当するものとして推したが、話し合いの結果入らなかったのは残念である。発想、文章力など並々ならぬ書き手である。

「Three Days」は、「スリです」と「スリーデイズ」の語呂合わせどころか、幕末の時代を背景にした悲しい誤解の物語りであり、エンタテインメントとしては「箔押所異聞」の次に押した。「金閣寺亡命」の思い、「あるかないかの細い南」の想像力、「みずいろのセメントサイロ」の労働の色、「かくして与一　故郷を捨てにけり」の鶏を絞める描写、「ほぼろを売る」の文の良さ、「口」のシュールな凄さなど熟練の輝きを彷彿とさせた。

筆者は下読みの段階から参加し、主催編集長五十嵐氏が受賞者へ電話連絡をする歴史的瞬間にまで立ち会う僥倖を得た。折しも一時代を画した『新日本文学』は、先の十二月、652号を持って終刊となった。今回の選者たちはその事とはあまり関係はないものの、新たに生まれたこの賞が、日本の文学の正統をきわめて誠実・着実かつ奇抜に継承していくことを切に期待している。

それを支えるのは、言葉の表出に自らの生きた証を刻もうという、経験と熟達の輝きを失わない多くの〝あなた〟である。

力のある言葉

五十嵐　勉

初めての銀華文学賞は蓋を開けて驚いた。期待に見事に応えてくれる作品が集まったからだ。そればかりでなく、それぞれの人生や文学世界が実に多様で、豊かな彩りに満ちていた。人間とはこのように多彩な世界に、それぞれ深い思いで生きているものだということを実感させられた。強靱な言葉を発して、人生の意味を問い、人間の生きる姿を造形する営みが日本の各地で躍動していることが再認識できた。これはむしろ四五歳以上と限定することによって

得られた僥倖だったと思う。長い人生での重い体験の上に立ってこそ得られる文学基盤が確かにある。文学はむしろ老年になって初めて開花し、問いも味わいも深まるのではないかと考えを新たにしたほどだ。人生の意味を問うのは、むしろ熟年・老年のほうがより切実である分、言葉が力を持っている。「遺したい」欲求が、文章を支えている。最近の文芸商業誌を賑わせている浅薄な小説よりはるかに充実している。文学の一つの原点を見せてもらった。

当選作には「筑後川彩雲」と「きずな」を推した。

「筑後川彩雲」は筋萎縮症の宿命を負う主人公が結婚という新たな人生の入口に立つ転機を通して、伴侶との新たな運命のひろがりを覚醒する秀作である。自然描写が優れている。宿命は自然の大きなふところに抱かれ、運命をむしろ積極的に肯定しそれと融和することによって、より広い命の領域に入っていくことを、大きなスケールで結実させている。方言は地から湧く力を持ち、家具の町から木材の香りが立ち昇ってくる。人間の生活を静かに見つめる水の流れも悠久の時間を湛えている。文章の折り目正しさが格調の高さとなって、古典的な風格を備えている。時の流れのなかに真っ直ぐ立つ作品である。

「きずな」は、海軍兵学校を卒業して北海道に特攻として配属されていた主人公が敗戦と同時に祖先からの日本刀を守りながら四国の田舎へ帰る物語を一つの軸にしている。道中に敗戦直後の日本の混乱がよく描かれていて、歴史資料としても価値が高い。大切に持ち帰った日本刀を祖父の助言によって折るところに、一つの魂を折る日本の精神の姿と無念さが象徴されている。当時の心ある日本人がどのように敗戦を受け入れたか、その胸の内の在り様が鮮やかに伝わってくる。戦後の経済発展とともに鞘に収めたまま放っておいたそれを、五十四年後に息子たちといっしょに開封したとき、まだ錆びずに光を保っていたところに、一つの希望が匂いを放つ。物質文化によってガタガタになった現在の日本の文芸文化に対しても、たまたま一つの比喩になっているところに深い縁を感じる。

「オネスト！」はおもしろく書かれている。ラストは、大勢のアメリカ兵の声がそのまま響いてくるような生き生きとしたシーンとなっていて、鮮やかだが、肝心なその後のことが書かれていない。それまで上官だった者たちに、今度は立場が逆転した者として対応していくそこに、もっと様々な模様が見えてくるはずで、そこにこそ、この作品の真のおもしろさが発揮されるはずである。このままだと片手落ちのようなすわりの悪さがあるので、私としてはこの後のことをしっかり書いてもらってそれから当選作としたいと思った。

特別賞「午前の死」は、表現がまだ固まっていない結晶度の低さが疑問だったが、青春と表裏をなす孤独な心象は十分に伝わってくる。副主人公の「まりも」がいい。末尾の「あなた、わたしの死を望んでいたでしょう」という言葉に「僕」は答えていない。また最後の処理や詩に破綻があるが、それらを除いても、「まりも」の存在感が作品を抜け出してくることは否定できない。強く魅了する何かがある。

優秀賞の「箔押所異聞」も気持ちのいい秀作だったし、「ゆきのした」もあたたかみの残る好作品だった。「未遂」の光の当たらない領域をしっかり描き込む姿勢と力量は注目すべきである。「つゆのいのち」のトンネル工事の労働シーンの描写は、ぜひ多くの人に読んでもらいたいすばらしい迫力を備えている。

老年そのものをテーマにした作品も豊作で、「かたつむり碁会所」以外に、「ほぼろを売る」「血の手押し車」など良い作品が集まった。「ほぼろを売る」に流れる人間を包むやさしさには心底をあたためられた。他の奨励賞「幻の季節」も一途な思いの残る作品だったし、「砂山」の一つの青春を確かに切り取った筆勢にはさわやかな読後感を覚えた。「琴」の美しい文章は魅力だった。「金閣寺亡命」は評点は入らなかったものの、歴史事実としても残すべき価値ある記録性を備えている。

人間にとって「文章を書く」という行為は、歩いたり走ったりするのと同じに、重要な意味を持っている。こうして応募作を読ませてもらうと、「書く」ことの集積を共有し、その連環を広げていくことがいかに大事かということを痛感させられる。「書く」ことへの信頼が戻ってくる。この文学賞が連環の一つの基盤になりうることを確信した、うれしい選考だった。

少数派の無念

飯田　章

応募資格を四五歳以上と謳った画期的（？）な銀華文学賞の選考には正直いって、あまり気乗りもしなかったし、期待もしていなかった。ところが、実際に選考に当ってみて、二一〇篇もの応募があったことも驚きだが、それにもまして、最終選考の十一篇に残った作品がどれもハイレベルの粒ぞろいで、選考の困難さが予想された。はたして、選考会は長時間にわたる激論となり、当選作三篇、特別賞一篇という椀飯振舞になった。

私が強く推したのは「午前の死」「ゆきのした」「双葉葵」「つゆのいのち」の四篇である。いずれも優劣つけがたい

佳作ながら、委員の大勢を覆せなかったのははなはだ残念だが、「午前の死」が特別賞を得たのは救いである。

「午前の死」（三紀村艸）について感想を述べる。

「二十三歳の僕は、五十歳の男のように未来を見切っていた。」この書き出しを見たとき、主人公が若者のくせに嫌だな、と思った。だが、読んでいくうちに深く納得させられた。「僕」はひどい吃音症で、人間関係を恐れている。さらに十二歳の時に、助ければ助けられた少年を水死させてしまった心の傷をもつ。それは、少年の母親から吃音を侮辱されたことに因がある。唯一「僕」が心を寄せられる躁鬱症の白井まりもに突然死なれ、「僕」はいよいよ孤独を深める。そんな「僕」のこの世に生きにくい短命の軌跡が、短いセンテンスを叩き込むハードボイルドタッチで、ドライに彫り込まれる。内に溜め込んだ鬱屈が暴発する職場での暴力シーンは圧巻である。生きることに無器用ながら、孤独の中に毅然と立ち尽くす青年の姿は崇高でさえある。物語の内容と文体がみごとに融合した秀作といえるだろう。

豊かな実り

小沢美智恵

集まった作品を読み、うれしい悲鳴を上げた。さすが人生の経験を積んだ方たちの作だけあって、いずれ劣らぬ味わいを持っていたからである。

小沢恭氏の「オネスト！」は敗戦直後の混乱の中で元二等兵が米軍との通訳に抜擢される話だが、軽妙な文体で洒落た味わいを持っている。軍隊内部の序列の低劣さを描きながら、戦争自体、階級自体の愚劣さにまで敷衍しているところがいい。主人公の上海で培われた精神の自由さが、文体とマッチして、作品全体を単に戦争ものにとどまらない普遍的な段階へと押し上げた。着地も見事で、タイトルが小説全体を包括する役目を果たし、珠玉といえる短編に仕上がっている。

東天満進氏の「きずな」は、終戦と一家に伝わる刀にまつわる話で、なかなか姿のいい作品である。基地のある北海道から郷里・四国までの、混乱をきわめた復員時の帰郷の道程の描写は、すぐれていると同時に資料的価値もある。占領軍の刀狩りを恐れて切断された長剣が敗戦の日本の象徴になっており、主人公の身を守るためになされた切断という行為が肉親の情の表徴になっていて意味深い。ただタイトルはどうか。作者は肉親の情に重きをおいて「きずな」というタイトルをつけたのかもしれないが、読後は、戦後五十余年たっても冴えた光を放つ日本刀の姿ばかりが印象に残るのである。刀袋にしまい込んで埃の中に放置しておいた刀が、鞘を払ってみると少しの錆もない状態でそこにあった、その驚きが小説全体を支えているからであろう。その意味では、刀とか剣といったストレートな表題の方がしっくりしたのではないか。

西村聡淳氏の「筑後川彩雲」は、古風だが、文章に情緒があり、恋愛の成り立ちをうまく伝えて嫌みがない。進行性筋萎縮症という難病の障害があっても、ただ一緒にいたいから結婚するという功利的でない結婚観がまっすぐに伝わり、素直な感動を呼ぶ。主人公・康介の勇気をもって病気に立ち向かう姿や、彼に次第に好意を寄せていく奈緒子の純真な気持ちは、そのまま障害を持つ人への応援歌にもなり得ている。ただ、感動が長続きしない弱さがあり、それが結婚が暗い夜の終わりを告げる朝焼けを意味するというタイトルの甘さになって表れているように思えた。読者は真の厳しさがこの後にあることを知っている。その厳しさに触れる前の段階で留めたことで、この作品は一時の光芒のような美しさを得たが、同時にもう一段深い感動に至る道を振り捨てたともいえるのではないか。続編でその後の二人を書ききってほしいというのは望みすぎだろうか。

三紀村艸氏の「午前の死」は、哲学的な雰囲気のある作品だが、わたしは推さなかった。乱暴にいえば、少年時飢えた記憶が因になり、友だちの死や恋人の死を経由して、主人公が自らの意志で餓死する話といえるが、ラストで手記であることを明かす手法が適切とは思えなかったし、主人公の父親をはじめとして多くのことが曖昧なまま放置されているために不消化感が拭いきれなかったからである。結果的に作品は靄（もや）が立ちこめたようになり、ある雰囲気を醸しだすことになったが、わたしはそれを魅力とは受け止められなかった。何より、因としては、友だちを死に至らしめたことにこそ重点を置くべきだったのではないか、そんな気がしてならないのである。理由がどうあれ、人を殺してしまった事実をもっと重く受け止めてこそ、最後は自殺するしかなかった果も頷けるのではないか。

なお、選には洩れたが三好郁子氏の「かたつむり碁会所」をおもしろく読んだ。「年を取り、病気になり、それをくぐり抜けたり、まだ闘っている人」にだけ見える世界があるという発想がユニークで、作品全体にユーモアと余裕が感じられる。老境への眼差しも温かく、好感の持てる魅力があった。わたしは当選作でもいいのではないかと思ったが、強く推さなかったのは、文章に粗雑な点があったからだ。応募してくる人は、みな文章の隅々にまで神経をとがらせ、命を削って書いてくる。もちろんこの作者も例外ではないのだが、まだ詰める余地は残っているように思

われた。

文章という点では、鎌田昭成氏の「つゆのいのち」が描写力で光っていた。炭坑にもぐり粉塵を吸って息がつまる場面など、体験した者にしか書けない部類の緊迫感と迫力があり、読んでいて圧倒された。しかし、いくら文章の密度が濃くても、ここでの労働が虚弱体質のために三日間で終わってしまったというだけの話では、小説としていかにも弱い。この体験をもっと大きな構えをもった小説のなかに組み込んでこそ、一級の文章力が生きてくるのではないか。

他にも、文章や構成といった技術面ですぐれた作として、木下訓成氏の「ゆきのした」や安本嘆氏の「歌手」、綾羽一紀氏の「ノスタルジア」、山岸恵一氏の「ガス壊疽」、夏野健氏の「花火」などが印象に残った。しかし、達意の文章で書いただけでは競争の場面で残ることはできない。選考にあたってしみじみ感じたのだが、抜きん出るにはやはり他の作品にはない何かが必要なのだ。これらの作者たちは、もう技量は充分にあるのだから、奇を衒うくらいの気持ちで、もっと積極的にユニークさを追求してもいいのではないか。

異質さ

大高雅博

今回、何十遍かの小説を読み、感じるのは多くの人が小説を書きたいという強い意欲を持っているということに対する驚きだった。ただ、全体として言えば、後一歩または半歩、先に踏み出して欲しかったと思う。最初から完璧なものを望んでいるわけではないが、文章、テーマ、構成、また作者の考え方を含め、何かが足りないと思わせるものがあり、惜しいと思う作品が何作もあった。

僕は「午前の死」を推した。今回読んだなかでは、これが際立って異質だった。最後に父親が出てくるところなど、弱点を持っているが、それでも受賞作はこれしかないかと考えていた。この作者には言葉に対するある種の感覚があり、また新しい小説を模索している感じがあったからだ。しかし、その異質さが災いしたのか評価が完全に分かれてしまった。

受賞作のうち「きずな」と「オネスト！」は戦争物であるが、正反対の性格を持つものである。「きずな」に関しても大きく評価が分かれたことは明記しなければならないだろう。うまくまとめられた反戦小説「オネスト！」が受賞することによってバランスが取られたと考える。

「筑後川彩雲」は読後感がよく、男と女の微妙な感情がうまく描かれていると思う。しかし、全体的にいえば作風が古すぎるのではないかという思いは残る。

結局、受賞作三篇、特別賞一篇というのは選考会の妥協の産物といえるが、これは長時間、激論の結果、合意を見い出せずに、選考委員が譲れないところまでいき、一時は受賞作なし、あとは優秀作で、ということで決まりかけた経過もある上での決定であった。

この結果に完全に満足しているわけではないが、選考会後、受賞者に電話連絡を差し上げると、とても喜ばれたということを聞くとこれでよかったのかとは思う。

熱く深く激しい世界

河林　満

募集に対して二〇〇を超える応募作があったことは感動的だった。銀華とは、文字どおり燻し銀の人生の輝きである。若い頃からか、あるいは不惑を過ぎてからか、ともかく書きながら生きてきた創作者たちの熱く深く激しい世界を見ることができた。応募された方に心から御礼を申し上げるとともに、これからの活躍を期待するものである。

受賞作三編のうち、私は「オネスト！」を一番に挙げた。日本軍が侵略した異国で戦争が終わり、二等兵の主人公は捕虜となって、ある空白下に置かれる。その空白は、捕虜としての時間が始まる中で、自分の未来が読めないという空白であるが、彼は英語ができた。そのことが突然の奇跡を起こすのである。オネストは「名誉な」を原義とした正直な・立派なというような意味であるけれども、戦勝国の兵隊と主人公がともどもに声を上げるオネスト。このオネストの渦が今こそ全世界に巻き起こればいいとさえ私は思った。

「きずな」は、やはり戦争の影響下にあって、祖父から父、そして平和を迎えた今日の息子に伝わる刀剣の消息を巡る話である。家族の重力が国家に吸収された時代を懸命に生きた父子の姿が迫ってくる。

「筑後川彩雲」は、難病と闘う青年と、平凡だがしっかりした生活感覚を持つ女性との、これも平凡な見合いが意外な展開を遂げて幸福な結末に至る物語である。文章力、特に自然描写は秀逸であって、ややもすればご都合主義的な筋の運びも、ある自然を獲得していて、私はこの二人に拍手を送りたくなった。

優秀作として選ばれた作品の中では、「霊園造成会社社長」が面白かった。樹木葬という発想はなかなか非凡である。作者は、農耕学の専門家であるようだが、その知識と経験が十分に行き届いているのが感じられる。しかし、言わば死の哲学というか、死そのものへの考察が、浅さを感じさせられて、わずかな不満が残った。

「胎内往生」も面白かった。平賀源内の男色など意表を突く設定だが、何より寺の坊主が阿弥陀如来の中に患者を安置させて、七輪を焚いて一酸化炭素中毒で殺してしまうという設定は、なかなかのものである。ミステリー小説としても十分に楽しめる。しかし、難点は、この人殺しの方法が途中で判ってしまうことであった。

以下、印象に残った作品に触れていくと、「口」という作品は、川端康成の「片腕」を連想させてなかなか趣向に富んでいる。怪しげな魅力があった。

「箔押所異聞」は、私には知らない、本の装丁に関わる物語であるのだが、最後の結末がなかなか気が利いている。知らない世界だけに、非常に興味深く読んだ。

「Three days」は、幕末に材を取った作品で、結婚の約束をした恋人が異人の館に奉公に出向いたことで、男はその恋人が汚されたと信じ込み、嫉妬の余り女を遠ざける。女は、やがて悲観して自ら死を選ぶが、後に、異人館にいたのはたった三日だけで、何事もなかったことを知るに及んで激しく後悔するという物語だが、幕末ならではの悲劇という点で大変に面白く読めた。

「かたつむり碁会所」は、このかたつむりの意味がなかなか人生の哀歓を浮かべて巧みであった。

最後に、「つゆのいのち」は、戦後四年目の夏に九州の球磨川沿いの電源工事現場へ出稼ぎに行った十七歳の少年の話である。厳しい労働で一週間ともたずに離脱するのだが、この工事現場の洞窟の中で働く労働の描写には圧倒された。生半可な描写ではないのである。これは作者の体験なのであろうか。凄まじいばかりであって、私は初めてこういうものを読むような気持ちにさせられた。いや、初めて読んだのである。これほどまでの描写力を持つ作品は、そうざらにあるものではない。惜しむらくは、全体の構成にいささか不備があり、この圧巻の自然描写、洞窟描写が十分に作品の魅力とはなり得なかったことだけは残念だ。しかし、この作者には力がある。

以上、簡単に触れたが、五十枚という枚数の中で、応募者各自、存分にそれぞれの世界を構築したものと思われる。五十枚とはこんなにたくさんのことが書けるのかと、私は一人の書き手として、あらためて言葉の力というものを思い知った次第である。

力作ぞろい
——波紋の期待

小浜清志

一体どのような作品が眼前に現れるのかと不安でもあったが、封を開けてみれば銀華文学賞第一回の募集にふさわしい力作揃いで選考は大いに盛り上がった。たぶんこの試みは日本の文学に何らかの波紋を広げていくだろうと期待している。

私は読んだ順に、「箔押所異聞」「胎内往生」「三都物語」「午前の死」「我が心のギレスン」「双葉葵」「筑後川彩雲」「琴」「未遂」「きずな」「オネスト！」という作品に高い点を与えていた。

文章の乱れもなく、終戦と刀が錆びつかず描かれている「きずな」を第一位とし、かつての恋人を訪ねる心の揺れと現代の若者に漂う希薄な人間関係を対比させながらテンポよく進む心地よい作品である「双葉葵」を第二位としていた。あとは同列三位だった。前半のもたつきがまどろこしいものの偶然の出会いに無理がなく読者を引き込む力のある「箔押所異聞」、五体感は薄いものの力作である「琴」、刑務所という異空間に光を当てた「三都物語」、感情でつくりあげる文学の力強さと輝きを覗かせる「午前の死」、心温まる内容で感動した「筑後川彩雲」と、どれも力作だった。

ミステリーにしたことで平板になったが、素材のすばらしさに驚いた「胎内往生」、顔も知らない生みの父に会う場面は予想外で感銘を受けた「我が心のギレスン」、戦争とは極限の様々な顔を見せるものであるが、終戦とはそこから一歩はみ出し自由の空気が見えるものであると納得した「オネスト！」、歴史の底流で名もなく死んでいった悲しき人々に声を与えた「未遂」、苛酷な労役息づまる描写に筆力の重さを見た「つゆのいのち」、医者としての失敗は至るところにあるのだろうが、それを題材に捉えようとした態度に共感させられる「封印」までを最終選考作品にしようと決めていた。

しかし当日、私の予想にはなかった「オネスト！」が意外にも高得点であったのと、第二位に推していた「双葉葵」がなかなか票を伸ばし切れないのに驚いた。結果は受け入れたが、「双葉葵」についてはかえすがえす残念に思っている。

今回の応募作品全体について、タイトルがよくない。タイトルは作品の顔なのだから、もっと魅力のある、新鮮でインパクトのあるタイトルにしてほしい。これは他の選考委員からも出た注文である。次回はもっと鮮やかなタイト

ルを期待している。
選に漏れた方たちは、ぜひ今後も挑戦していただきたい。この文学賞から何か新たな流れが生まれるかもしれない。

受賞の言葉

西村聡淳
にしむら　そうじゅん

本名／西村　淳
昭和三年１９２８　福岡県久留米市生まれ　76歳
二四年旧制佐賀高等学校一年修了
二五年喜多木材入社
三二年西村製材所を創設
西村産業社長
「九州文学」同人・「玄界灘」主宰

銀華文学賞――受賞の言葉　西村聡淳

ある日の夕刻、突然「受賞者が決まりました。おめでとうございます。あなたの作品が銀華文学賞に選ばれました」と電話を受けた時、私は信じられない気持ちで戸惑っていました。きっと言葉もうわずっていたと思います。
すぐに妻に声をかけてこれを告げると、妻はみるみる涙を溢れさせて「よかったよかった……」と自分のことのように喜んでくれました。
若いときから作家に憧れていたという妻の言葉で、還暦に近くなってから書き始めた小説ですが、全国に公募された文学賞に選ばれたのは初めてのことで、喜寿をすぐ目の前にして、これに勝る喜びはありません。
七十の声を聞いてからの受賞など有り得ないと諦めていた文学賞です。これまで体が思う様に動かせない私を支えて、いつも励まし続けてくれた妻に対する神様のご褒美ではないかと感謝しております。
長い間続いてきた不況の波に翻弄されて、仕事にも行き詰まり、競売公告になるという寸前になって、自分の家だけは残ることになったり、この様な素晴らしい賞を頂いたり、これからもまだまだ良い事が続いて行くような気がしています。
来年は金婚式を迎えます。これからも今日のことを忘れず、いのちのある限り、少しでもいい小説を書き続けて行きたいと思っています。

東天満　進
ひがしてんま　すすむ

本名／伊川　甡
大正一四年１９２５　徳島県生まれ　79歳
昭和二〇年海軍兵学校卒業
昭和二六年から約三〇年間、海上自衛隊、防衛大学に勤務

銀華文学賞――受賞の言葉　東天満　進

この度は、銀華文学賞を受賞させていただき、まことに光栄の至りに存じております。
当初、「主催者から」のメッセージを拝見いたしましたところ、「強烈な体験、強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています」と述べられておりました。
あげられているいずれの項目につきましても、とうてい我が筆の及ぶところにあらず、と観念して見送ることにいたしました。
それから間もなく終戦の日を迎えて、自分も七九歳になったのだと思った時、作品の中に登場してくる「祖父」のモデルとなった我が祖父のことが突然脳裏に浮かんでまいりました。九七歳まで生きた祖父は、終戦のあの時、何歳だったのだろう。明治三年生まれだったから七八歳か。今の自分はあの時の祖父よりも一歳年かさになったんだな。
そんなことを考えているうちに、復員の旅のこと、家宝にしていた日本刀を切断してしまったことなどが次々によみがえってまいりまして、一気に書き上げることができた次第でありました。
なんだか祖父が応援してくれたかのような気がしてなりません。
今後もできるだけ長く書き続けられるように、元気でありたいと願っております。

小沢　恭
おざわ　きょう

大正一三年１９２４　上海生まれ
80歳
昭和一九年　名古屋高等商業学校（現名古屋大学経済学部）卒
職歴各種多数
現在貿易商社オザワトレーディング社長

銀華文学賞――受賞の言葉　小沢　恭

ご通知を頂いたときに、私の口からは空ろな言葉しか出てきませんでした。

受話器をおいてから「やったっ！」と叫び、頬の筋肉が弛みっぱなし。十年若ければ飛び上がっていたでしょう。

変転、かつ無為に過ごした八十年、自分なりに十分長い人生を生き永らえてきましたが、これほどの嬉しさを感じたのは五指に満たないほど。

当然、物を書くということは決して嫌いではなかったのですが、自分の作品を世に問うなどの野心めいたものを持つようになったのは、古希を超えてからかな、と思います。昔から「自惚れと瘡（かさ）っ気のないものはいない」と謂われますが、自分の小さな器量がプロの方から認められたのかなと、私は柳の葉っぱに飛びついた蛙になって喜びに浸っています。

これからは残る人生を「ただ精進」に努めていかれたらと考えています。

この上ともご鞭撻をいただければ、優る喜びはございません。

本名／赤松麟児
昭和二二年1947　大阪府大阪市生まれ　57歳
大阪府立勝山高校卒
自営業

三紀村　艸（みきむら　そう）

特別賞――受賞の言葉　三紀村艸

毎年十月の半ばになると、私の家のベランダに、近くの樹林から亀虫（からだは扁平で六角形。さわると悪臭を出す。くさがめ。へっぴりむし）が飛来してくる。今年は特に多かった。

夕方、洗濯物を取り入れようとベランダに出ると、竿に吊り下げた十数枚の衣類にびっしりと亀虫がくっついている。二、三百匹、いや五百、六百……。なんでこんなに？私は寒気をおぼえながらしばらくその場に呆然と立ちすくんだ。が、気を取り直し、ハンガーからそっと衣類をはずし端を持って思いっきり三、四回バサッバサッと振ってやった。すると数十匹の丸い黒い小さなやつがコンクリートの床にちらばり、あとは羽根をひろげて飛んで行った。ふ

ー、やれやれ。部屋に投げ込んだ衣類をたたもうとして、ふと内側をのぞくと、まだ数匹しぶとくへばりついているではないか！　くそっ、このへっぴり虫め。すぐさまベランダに出て一匹一匹遠くへつまはじいてやった。しかしその夜、風呂からあがって洗濯したてのシャツを着ようとしたとき、なんと襟元に一匹の亀虫が必死にしがみついているのであった。

……私はこの九年間に、四十九の作品をあちらこちらに応募してきた。しかし、三年目にある地方の文学賞で佳作をいただいたほかは、この六年、一度も賞に縁がなかった。そして今回の銀華文学賞に応募したときも、「たぶんアカンやろ。なんで言うたらこれは小説のかたちになってへんからな」と思いながら原稿を送った。それが、特別賞をいただいた。信じられない気持ちである。

小説の「かたち」にはなっていないが、三十数年前の、私の二十代前半の精神風景は描けたと思っている。その過去への、想いの愚直さが、特別賞をいただけた理由ではないかと考えている。

ありがとうございました。

選考会風景

筑後川彩雲

西村聡淳

一

南の空に湧きだした積乱雲が、いつのまにか空一杯に広がって、雷鳴をとどろかせながら激しい雨を叩きつけてきた。

会社の勤めを終えていったん家に帰った岡田康介は、夕立の上がるのを待って約束の割烹料亭へ向かうことにした。七月末のその日は会社の取引先である坂本木材店の社長から、彼の姪の奈緒子を紹介される約束であった。

陽が沈んだ後の西の空には、まだ僅かに明るさが残っていた。雨の通り過ぎたばかりの町並の広い通りを歩くと、かすかに渡ってくる風がひんやりと頬をかすめ、新鮮な水の匂いが感じられる。その店までは歩いて十分とかからぬ距離であった。

遠くの方で、まだ残業をやっている木工所の自動鉋（ぶんな）の音が聞こえてくる。軒先に大きく張り出したイチジクの樹の下に縁台が置かれ、碁仇（ごがたき）を前にして盤面に目を注ぎながら、うちわを片手に涼を取っている男たちの姿や、しゃがんだまま顔を寄せ合って線香花火をじっと見つめている幼い子供たちを見て歩きながら、康介はいったいどんなことを話せばいいのかと不安に駆られ始めていた。

坂本社長の側に並んで座った奈緒子は、袖なしの白いブラウスに小さな白い水玉模様の紺地のスカートで、肩先から露わになった二の腕が健康そうであった。柔らかそうな髪は後ろに束ねて黒いリボンで結び、背の中程まで垂らしている。恰幅のいい坂本社長と太った番頭の友岡は開襟シャツの姿で扇子をしきりに動かし、部屋の隅では二台の扇風機がせわしそうに首を振っていた。

奈緒子はほとんど口をきかなかった。黒い絹張りの小さな扇子を拡げて、口許に何かホクロでもあるのか、顔の下半分を隠すようにしながら目だけをじっと此方に向けていて、時々思い出したようにそれを僅かに動かしている。何か問いかけても言葉少なに答え、小さく笑うだけである。

康介は自分の仕事を話題にし、また好きな音楽や絵画について話したりして自分のことを分かってもらおうと努力をするのだが、彼女の方はあまり話に乗って来ようとはしない。これでは相手のことは分かる筈もない、と彼は不満を覚えただけに終ってしまった。

翌日になると、番頭の友岡が電話をかけて来た。一度映画にでも行って、いろいろ話し合ってみたらどうかと言うのだ。康介はあまり気が進まなかったが、次の日の夕刻に映画館の前で彼女と落ち合うことにした。

戦後十年が経って世相も落着きを取り戻し、映画は唯一の大衆娯楽として、どこの映画館も満員の状態であった。映画館に着いてバスを降りると、奈緒子はすでに入口で待っていた。今日は、スカートの裾に小さなフリルを二重にあしらった淡い花柄のワンピースである。だが、彼女のやや冷たそうに見える端正な顔を見たとたん、その目がじっと自分に注がれているのに気づいて康介は戸惑った。

二人分の切符を買うと、彼は先に立ってさっさと奥へ入って行った。まだ時間が早いせいか、客席はわりに空いていたので、中ほどまで行ったところで、中央よりやや右に寄った場所に席を見つけると、康介は左に席を空けて座った。

奈緒子はその時も同じように、自分のほうから話しかけようとはしなかった。康介のほうから話しかけても言葉少なに返事をするだけで、顔は前方を向いたままである。しかし、その横顔を時々チラリと眺めていると、ちょっと冷たそうな顔がまた清潔な感じにも見えてきて、彼は少し好感を持ち始めていた。

映画はたいして面白いものではなかった。一本だけを見終るとまだ八時を過ぎたばかりである。康介は彼女を促すとそこを出た。映画館から伯父の家までは約一キロほどの距離なので、康介は彼女を家まで送り届けることにした。

伯父の家まで行く途中に、川に面した小さな社（やしろ）があった。表通りから十メートルばかり入りこんでいるのであまり人目にはつかない。お宮の入口にあった石灯篭の側でしばらく話をしようかと誘ってみると、素直に応じたので、灯篭の石段にハンカチを敷いて彼女を座らせ、自分もその横に座った。

五、六メートル先はもう川岸で低い石垣となっており、その向こう側に対岸の家の灯りを水に映して、黒い川の水がゆっくりと動いていた。見上げると、東の空にぼんやりと十三夜の月が浮かんでいる。やわらかな月の光が地上の家や樹や橋や川を照らしていた。向こう岸には葦の葉が生い茂って石垣は見えないが、その上に建った家々が、遠く川の湾曲する辺りまでぽんやりと黒く浮き上がっていた。

「伯父さんの家にはよく来るんですか？」

「そうですね。普通めったに来ることはなかもんね……。年に二回くらいかな。でも、伯父が私にはとてもよくしてくれるんです」

今度はその伯父が会わせたい人がいるというので佐賀県の隣町から出て来たが、いつも四、五日は泊って気ままに過ごすのだという。

康介が次の言葉を探していると、とつぜん奈緒子が彼の方を向いて言った。

「あのう……。足がちょっと悪かという話を聞いたばってん、事故か何かでそうなられたんですか？」

思ったことをはっきり言う女だな、と康介はちょっと身構える気持ちになった。

「そのことをあなたに言っておかなければと思うとったんです。――あれはもう五年ほど前のことになるかな、脚の力が少しずつ弱ってくるとに気がついたとは……。大学病院で診察を受けて、やっと分かったとばってん、進行性筋萎縮症といって、両腕と両脚の筋肉が少しずつ細くなって行く病気だと言われたんです」

康介はその時の様子を詳しく説明した。検査のためにすぐに入院したが、この病気は筋の栄養をつかさどる自律神経の変性によるもので、まだ治療法が発見されていないため現在では治る見込みがないということであった。

この病気には幼児型や青年型など幾つものタイプがあり、大腿部や上腕部から細くなり始めるものの外、手脚の末梢から始まる脊髄性のもの等があることも後になって分かったが、初めて診断を受けた時には「あと五年くらいしか生きられないのだから、今のうちにうまい物を食って、したいことをしておくことですね」と言われて、目の前が真っ暗になった。しかし、対症療法として考えられるものをすべて試行錯誤しながら治療を続けた結果、進行速度はかなり遅くなった。それに、二年ばかり前に知ったN式健康法を始めてからは、病気の進行がほとんど止まったように思われる状態となっていた。

康介の継母ミツの話も出た。生母はまだ生存しているが、事情があって六歳の時に別れたままで、今の母親ミツが来たのは小学五年生の時であった。彼女は思ったことをすぐにそのまま口に出すので、周りの者も時には腹を立て、非難する者が多かった。父の佐太郎もまた彼女の言葉には逆らわないので、近所のミツの評判はあまりいいものではなかった。康介は、実母ではないという遠慮もあり、自分の主張を引っ込めることによって、穏やかな親子関係を維持していたといってもよかった。

それを聞くと奈緒子は、何か心に触れるものを感じたのか、自分のことを話し始めた。

彼女の母親は十歳の時に亡くなったという。母のすぐ下の妹が後添えとして来ていて、気持ちの上での負担はなかったが、父には腹違いの弟がいて万事に抜け目のない男だったので、人のいい父親は親から引き継ぐことになっていた雑貨店の仕事を弟に譲り、自分は裏の離れに引き篭もって本を読んだり釣りに出たりという毎日だった。

弟の嫁ユキが勢いづいてくるのは当然である。奈緒子の弟が結核を病んで入院すると、このユキ叔母の彼女に対する嫌がらせが激しくなった。奈緒子が娘らしく成人するとこの扱いは次第に露骨になり、新しく作った服をよく似合うと人が褒めると、

「何ば着ても、あんたは似合わんね」と嫌味をいい、少し変わった髪型にすると、

「人のせんごたる変な頭ばして、あんた、人から笑わるっよ」といやな顔をした。

時には、奈緒子が干したばかりの洗濯物を、ユキ叔母が物干し竿の端までさあっと片寄せては、自分の物を拡げて干すこともあったという。

互いに家族のことを話してみると、思いの外に考え方が似ていて話がよく合った。二人とも母親のいない淋しい思いをしてきた身である。自分の体験してきた辛さや苦しさを、同じように身に沁みて知っている人であれば、苦労を共にすることもできると思うのだ。

いつのまにか月がだいぶ高くなった。黒い川の流れがゆっくりと動き、向う岸の家が浮き上がって見える。家々の窓の灯りが半分近くに減っていた。

奈緒子は、自分の言うことに相槌を打ちながら親身になって話を聞いている康介に好感を持ったのか、顔を上げると言った。

「あなたとはよく話が合いそうね。何でもよく解ってくれて、ほんとにお兄さんのような感じ……。でも結婚となると、何かもっと違うものがあるような気がするとよね。あたいはほんとのことを言うと逞しい人が好きなんです。――悪く思わないでね」

そうだったのか。それが当然だろうと康介は思った。

「おれの方もやはり自信がないね。ほかの人に較べればわりと自由にものを考え、はっきりとそれを言葉にするあんたと、毎日を一緒にやって行けるとかどうか……。この話はもう、初めから無かったことにしとこうね」

康介はそう言いながら、自分の言葉に空虚なものを感じ

ていた。言葉は結局言葉だけに過ぎず、互いの思いは伝わらないのだ。
康介はそれだけを言うと黙って立ち上がった。奈緒子も続いて立つとスカートについた塵を払った。

父親の佐太郎は、建具職人として田舎には惜しい優秀な技術を持っているというので、ちょっと大きな家になるとよく仕事が回されて来た。佐太郎が完成も近い家に出かけて行って建て主と会い、デザインを打合わせて家に帰ってくると、その見積り書を作るのが康介の役目である。彼はいつも家へ帰って食事を終えると、机に座って父の話を聞きながら建具のデザインや金額を書き込んだ。
この日も事務所と応接間を兼ねている玄関脇の八畳の間に入って、父の出してきた書類を手に取ると、康介はゆっくりとこれに目を通し始めていた。奈緒子から電話があったのは、ちょうどそんな時だった。あれからまだ二日しか経ってはいない。
「奈緒子です。いま、近くの公衆電話からですけど……。坂本の伯母も一緒で側にいます。今夜は十五夜で月がきれいかけん、夕涼みに散歩に行こうか、と言うのでここまで来たところなんです」
奈緒子が一語一語ゆっくりと間を置きながら言うのを、康介は黙って聞いていた。

「岡田さんの家の前を通ってみようか、と伯母に言われて、いまそちらを回って来たとばってん……。そしたら今度は、ちょっと電話をしてみたら、と言うんです。――いま、ちょっと出られますか。忙しかとでしょう?」
自分にはその気はないが、伯母に言われたから、という言い訳のようにも聞こえた。
彼女とは、この前会った時に、もう話はついていた筈である。だが断るのもまたへんな気がした。
「そんなら、花宗川の橋の上で待っとりますから」
と言うと電話は切れた。
怪訝(けげん)な顔をしながら、受話器を持ったままの康介を見ている父親に気がつくと、
「この前会うた奈緒子さんからやったったい。ちょっと行ってくるけんね」
と言いながら康介は受話器を置いた。見合いの結果が気になっていた佐太郎はそれを聞いて安心したのか、表情を和らげながら再び書類に目を戻した。

だらだら坂の県道を爪先上がりに歩いて行くと、コンクリート造りの花宗橋に出る。その長さは三十メートル近くもあるだろうか。橋の中央部に、帆船が橋の下を通過する時には、ギヤーのハンドルを手で廻せば片方が上がるようになっている八メートルほどの鉄の橋桁があった。跳ね橋

である。橋桁が上がれば車も人も通れなくなるのだ。骨組みは鉄骨だが、上側は厚い丈夫な板を張っただけなので、人が通る度にごとごとと戸を叩くような音がした。
橋にさしかかると、左手の欄干に添った中ほどに二つの黒い影が動いた。坂本の伯母と奈緒子だった。坂本の伯母は康介の方へ歩み寄ってくると、
「いつもお世話になっております。そして今日は、お忙しいのにお呼び立ててしてどうも済みません……」
と何度も頭を下げた。坂本木材は康介の父佐太郎の、材料の仕入先でもあったのだ。
「そんなら私は先に帰っとるけんね」
そう言って大きな紙袋を奈緒子の手に渡すと、人のよさそうな伯母は、また何度も頭を下げながら去っていった。
「伯母はいつもあんなふうに何でも押しつけてしまうとよ」
奈緒子が紙袋から取り出したのはバナナと殻付きのピーナッツであった。
筑後川の支流であるこの葦の葉がそよぐ花宗川の上流には、いま地上から浮き上がったばかりの、白く冴えた円い大きな月があった。川面に映った月の影が、微風にさざ波を起こして千々に割れ、砕けて揺れながらきらめいている。康介は、このほの明るい乳色の靄に包まれた夜の中に身を置いて、現実とかけ離れた青白い月を見ていると、魂が体から抜け出して、夜空を高く昇って行くような気がした。
「いま何ば考えよったとね?」
奈緒子が康介の方をふり向くと言った。
「うん、月はどうしてこげん、人の心に沁み入ってくるとやろうかと思うてね」
「あたいも……。こんな夜にはもう家の中にじっとしておられんごとなってしまうとよ」
「月の魅力に逆らいきれず、ふらふらとさ迷い出てしまうわけたいね」
奈緒子がもいでくれたバナナを口に入れてみる。遠い南国の甘く熟れた何とも言えない香りが鼻腔にひろがった。
「伯母さんはいったい、何ば考えよらすとやろか」
康介はこうして奈緒子を誘い出した伯母の気持ちをまだ測りかねていた。
「さあ……。伯父さんが世話しよる話やけん、なるべく話がまとまるようにと思いよっとやろね。それであなたの家ば見せに連れて行ったとよ。でも、古い昔風の造りやけん、お掃除がたいへんやろうね」
なるほど。康介の家が経済的にも安定していることを見せたかったわけだ。彼は坂本の伯母の気持ちも解る気がした。しかし、家を見たところでどうなるものでもあるまい。彼女の意志はもう決まっている筈だった。
奈緒子がふっと大きな吐息をついて言った。

「あなたの身体がもし良くなればね……。そしたらあなたもきっと嬉しかよね」

「そりゃあ当たり前さ。ばってん、いつまでも病気に負けてなんかおられんからね。治せるかも知れんという方法があれば、おれは何にでも挑戦するよ。それに、一度しかない人生やからね。僅か五十年の人生を、悔いのないように生きてゆく意欲があるかどうかということたい。天から与えられた能力を充分に生かし切って、どれだけ自分のいのちを燃焼できるか、要するに力強く生きてゆくかどうかは自分に対する自信の問題じゃなかろうかね」

彼はいま、もうひとつ是非やってみたいことがあった。それは健康法の一つで七種類の生野菜をすり潰して飲む「生野菜泥状汁療法」というものだが、葉緑素とエントロピーの法則によって細胞の賦活化を図り、体液を弱アルカリ化することによって病気を治すというものだった。自律神経のアンバランスを正常にする「温冷浴」と併用すれば、ある程度の効果は期待できると彼は思った。だが、継母のミツはそんな面倒なことなどやってくれる筈もなかった。十数年前、別の病気で永い入院生活に苦しんでいた時、お前のような親不孝者はもう早よう死ね、と何度も言われたことをまだ忘れてはいない。

折を見て、この療法を行っている広島の病院へ行くことが彼の念願であった。

「この療法は、やってみんと分からんことばってんね。必ず治るとは言えんとしても、進行だけは間違いなく阻止出来ると思うよ」

いつのまにか彼は雄弁になっていた。それは彼女に対してというより、自分自身に言い聞かせている言葉でもあった。

空に昇って行くにつれて十五夜の月は少しずつ小さくなり、いよいよ冴えわたって行く。星ひとつ見えない、真昼のような明るさの中で、康介は奈緒子の視線がじっと自分に注がれているのを感じていた。

二

橋の上で会ってからまもなく、康介は奈緒子に手紙を書いた。それは何ということもない普通の手紙だったが、短い手紙のあとに「あなたのことをもっとよく知りたい。ぼくのこともまだよく分かってはいない筈だ」と書き添えることを忘れなかった。

すぐに奈緒子から返事が来た。それには「お兄さんとしてお友達になりたいと思っているけど、またいろいろお話も聞きたい」と書かれていた。

奈緒子は度胸のいいところもあった。彼女が家に帰って十日ほど経った頃「ぼくの母親にも一度会ってみたら……？」という康介の勧めに応じて、彼の家をとつぜんひとりで訪れたのだ。

地上の家も樹も人も熱気に包まれ、すべてが睡ったように静かな暑い夏の昼下がりだった。庭の植込みの濃い緑が部屋の中までしのび込み、ひっそりと暗い座敷の中で扇風機だけが微かな音を立てて、ゆっくりと首を振っていた。

康介の義母ミツが冷やした麦茶を持って入ってくると、彼は奈緒子を紹介した。ミツは、四十五という歳にしてはまだ若く、大柄な女だった。

「ほんとに暑かですね。今日は坂本さんの家においでになっとるとですか」

と二、三言葉を交したあと、彼女は一瞬のうちに相手を見抜いてしまう女の勘で奈緒子の人柄が判ったのか、すぐに奥へ引っ込んでしまった。

縁側に「みす」を立てかけた薄暗い部屋の中で応接テーブルを挟んで康介と話しながら、どこからかいつも誰かに観察されているような気がしていたのだろう。奈緒子の緊張しているのがよく分かった。黙っていると、じっとりと浮いてくる汗に思わずおざなりの言葉が口をついて出る。

「今日は暑かね……」

「ここは風通しがよか方ばってん、やっぱり暑かねえ」

彼女も同じようなことを言った。

康介は、グレーのズボンに白いワイシャツの袖口をちょっと曲げただけの、くつろいだ恰好であった。この暑い時に何故こんな長袖のワイシャツなど着てるのだろうと思っているに違いないが、細い腕を明らさまに見せたくはなかった。

康介はいくらか緊張しながら、しきりに手に持ったうちわを動かしていたが、しばらく沈黙が続いた後に、とつぜんその手を止めると言った。

「ぼくの足を見てみたかとやろう。また、どんな風にして立ち上がるとかもね」

あまりに突然だったので奈緒子は返事に困っているようだったが、彼はさっさとズボンの裾をまくり始めた。膝から下の方は大きく筋肉が盛上がっているが、大腿部の方は普通よりもひと廻り細く見える。

「普通よりもだいぶ細かやろう？　ばってん、走ることは出来んけど、二、三キロなら歩くのは何でもなかよ。階段も手摺りがあれば別にどうということもなかしね」

自分が病気であることを康介はあまり意識していなかった。重い物をかかえたり運んだりは出来ないが、それ以外のことでは日常生活に困ることはないし、やりたいことは何でもできる、といつも思っているのだ。

ズボンの裾を元にもどして、いったん座り直すと、康介は両手をテーブルの上に置いた。それから体の重心を両手にかけて、ゆっくりと立ち上がった。

「もう解ったけんやめて……。早ようここに座ってよ…

…」

奈緒子は、彼が真面目くさって、体の状態を説明しようとしているのがたまらないのだ。「体のことは、人が普通に生きて行ければそれでよかとよ。ただ、これからどんな生き方をしようと思うとるか、それが知りたかとよ」

もしも結婚した場合でも、どんなふうに自分を愛してくれるのか。また将来に対してどういった夢があるのか、奈緒子はそれが知りたかったのだろう。康介は奈緒子の気持ちに気づいていたが構わずに一人で喋り続けた。

「おれの体の中には人並みに動かせん部分があるばってん、気力だけは人に負けんと思うとるよ。会社の経理などは誰でもできることばってん、そのほかのことも、何でも人並みにはできるしね。それにもともと感激屋やから、映画など観てもいつもすぐに感動してしまうし……。音楽にしても、とてもいい曲を聴いていると、何故かいつも涙が溢れてしまうったい。多情多感というところかね。要するに古色蒼然とした明治の人情型たい。それから、今はこんなサラリーマンばってん、そのうちに税理士の試験を受けて経理事務所をやってみようと思うとる。これくらいは何とか実現できると思うよ」

康介は少し饒舌になり過ぎたと思って、急に口を閉ざすとあらためて奈緒子の顔を見つめた。

「お話を聞きよると、わたしも、あなたなら何でもできそうな気がしてくるとよね。それにあなたの、何にでもすぐに感動するというところが好きよ」

奈緒子はそう言うと、自分の不用意な言葉に気がついたのか、少し顔を赫らめた。

初めて会った時には互いに気がつかなかったが、何度か会って気心が分かってくるにつれて、奈緒子の方も何となくこのままで終りたくないという気持ちが出て来ているようにも見えた。少なくとも、からかい半分に冗談めかして言い寄ってくる男達とは違うものがあると思っていたのだろう。

それからさらに何度か手紙の行き来があったが、康介は夏も終りに近づいたこの頃になって、奈緒子のはっきりしない態度に少し苛立っていた。そこで今度の手紙には、「中途半端な状態でこのまま続けるのはいやだから、イエスかノーかをはっきりして欲しい。ぼくはあなたが好きだ」と書いたのだった。

いつものように、昼食のために家に帰ったときのことである。誰もいない応接間で鳴っている電話に出ると奈緒子だった。

「今ならあなたが家にいる時間と思うて掛けたとばってん……。少しでも早よう言いたかったけん、家の者に分からんごと、いとこの加代ちゃんの家に来て電話しよるとよ」

その家まで駆けて来たのか、奈緒子のはずんだような声が聞こえた。それからちょっと躊躇ったような空白の時間があった後、

「この前の返事ばってんね……。イエスのほうにとってもよかよ」と言った。

「そう……。ありがとう」

康介はそう言っただけで、もう言葉が出なかった。

その翌日、この町のどこにいても聞かれる、眠気を誘うような製材機の音を聞きながら、事務所の机に向かっていた午後のことである。発送係の女事務員が掛かってきた電話に出ると、すぐにこちらを向いて、

「岡田さんに電話です。女の人からよ……」

と意味ありげ気な眼をして笑いながら言った。出てみると奈緒子だった。

「いま伯母さんの家に着いたところよ」

と彼女のはずんだ声が聞こえた。

月末の締め切りに追われていた康介は咄嗟に、近くにある筑後川の浮き桟橋を思い出した。この桟橋は一千トン級の貨物船も横付け出来るという岸壁でもあって、ふだんはあまり人気のない場所である。彼は手短かにその場所を指示して、五時半までに行くからと言って電話を切ったのだった。

製材工場の終業ベルが鳴って、十分ほど経った頃に康介は会社を出た。八月も終りになると、五時を過ぎればもうそれほど暑さを感じなくなる。どこから聞こえてくるのか、降るようなひぐらしの声を耳にしながら、康介は浮き桟橋の方へ歩き出した。

人口五万の大川市は、江戸時代に舟大工の榎津久米之助が、筑後川を下ってくる筏を原材料に、榎津ものというタンスを作って木工業を発展させてきた家具の町である。町中至るところに家具の工場があり、その数は約一千社とも言われたが、どんな小さな道を歩いていても、どこか遠くから飛行機でも飛んでくるような木工機械の音が間断なく聞こえ、大通りでも必ずどこかで丸太を運ぶ荷馬車や、家具などを積み込んだ大型トラックに遭遇する町であった。

その材料を供給するために花宗川の堤防沿いに建てられた製材工場の多くは、事務所の前が広い原木置き場になっている。丸太の大きさによって数か所に仕分けられた原木の山を右に見ながら堤防に上がると、木材の産地である日田の山奥から先ほど流れ着いたばかりの、十二枚の筏が岸に繋がれていた。

筑後川の河口に近いこの町は干満の差が大きく、満潮になると荷を積んだ船がよく出入りをしたが、その荷を積み降ろしする浮き桟橋は、康介の勤めている会社から五百メートルほどしか離れていなかった。今頃は奈緒子のほうが

もう先に着いているかも知れない、と思うと康介は足どりが速くなった。

遠くに見え始めた浮き桟橋には、今日は船の姿もなくほとんど人影も見当らない。奈緒子はまだ来ていなかった。康介はその中央付近に設けられた危険防止の柵まで歩いて行くと、これに寄りかかって奈緒子を待つことにした。

彼女はすぐに現れた。もう秋を感じさせる臙脂色のワンピースで、康介のほうへ真っ直ぐに向かってくる。康介は紺の上衣を着てきてよかったと思った。

奈緒子は彼の側に並んで空を見上げた。まだ明るい夏の空がどこまでも拡がっていた。

船着き場から百メートルほど離れた前方に、民家が横に並んで建っている。岸壁には、桟橋からだいぶ離れて十トンくらいの小さな舟のマストが数本見えるだけで、他に視線を遮る物は何もなかった。二人の足はいつのまにか下流の堤防の方に向かい、肩を並べて歩き始めていた。

もう言葉を交す必要はなかった。ただ黙って互いの存在を感じながら歩いているだけでよかった。少し歩くと、堤防わきに小さな神社があった。どちらからともなく、風雨にさらされて木目の浮き出した社殿の階段に腰をおろすと、互いに身の周りのことを思いつくままに話し合った。

話すことが無くなるとまた歩いた。そして再び浮き桟橋へ戻って来ると、鉄パイプで作った危険防止の手すりにもたれて、満ちてくる潮の流れを見つめた。

太古より悠々と流れ続けてきた筑後川は、田や畑を潤して、南に広がる有明海に注いでいた。だが、遠くの山に月が出る頃になると、いったん海に沈んだ水はふたたび生まれ変わり、不知火海から押し寄せる上げ潮に乗って帰って来るのだ。有明海は海全体が隆起して、干潟の泥を含んだ潮がさざ波を煌めかせながら河口を潤し、岸辺にひたひたと打ち寄せていた。時折り風が吹いてくると海の匂いがした。

対岸の堤防は葦に蔽われていたが、ずっと川下の方には小さな茂みや農家が点在し、その先の遠くに、うす紫にかすんだ雄大な雲仙の姿が見え、赤く燃えて沈もうとする大きな太陽があった。大気は淡黄色に染まり、次第に空の青に溶けて刻々とその色を微妙に変えて行く。やがてその熱の塊りが光芒を放ちながら山の蔭に隠れてしまうと、夕焼けの雲と空の色は更に輝きを増したような気がした。

彼は奈緒子の肩に手を置いて後ろに立ったまま、黙ってこの光景の中に身を任せていたが、奈緒子の耳許に口を寄せると、

「大自然の美しさの前に立ったら、もう恍惚として言葉も出んごとなってしまうね」

と言いながら、声が少しかすれるのを感じた。

「このまま、この日没の情景を切り取って、いつまでも瞼の奥に残しておきたかよね。そして今のこのひと時を、永遠にあたいたちのものに出来るならよかばってんね」

奈緒子が彼を見上げるようにふり返ったとき、康介の手は肩を滑って、彼女を抱き寄せていた。

夕靄のただよう筑後川の堤防を、それから康介たちは時の経つのも忘れて歩き回った。しだいに夕闇も濃くなり、人の顔も見分けられぬ頃になって船着き場まで戻って来ると、再びめぐってきた十三夜の月が空にあった。このやわらかな光から隠れるように、川端に立っていた深い庇の農業倉庫の壁にもたれた康介が、奈緒子の背に腕を廻して話をしている時だった。

「あなたの腕はやっぱり細かね」

少し遠慮がちではあったが、奈緒子が小さな声で言った。

「うん、これが元どおりに太くなればね……」

康介はそう言うと、あとは黙ってしまった。口にしてはならないことを言ってしまった彼女のせつない気持ちが伝わってくる。足が治らないとすれば、この腕も現在より太くなることはないのだ。

「ほんとにはがいかでしょうね」

康介がそれに答えず黙っているのをみると、奈緒子は彼の腰に廻している手に急に力を入れて言った。

「早ようよくなってね……。あなたの言いよった広島の病院へ行って、少しでも早ようよくなって……。あたいは、あなたに何とかしてようなってもらいたかとよ」

康介はどうにかして彼女の期待に応えなければ、と強く思わずにはいられなかった。

翌日、夕闇が迫る頃になって、康介は花火大会が行われる船着き場へ向かった。打ち上げが開始される八時少し前に、奈緒子と跳ね橋の上で会う約束だった。

時間を気にしながら康介は橋のほうへ急いだ。ドーンと胸の底を揺るがす音がして、しばらくすると、暮れかけた空の頭の上で赤い大輪の花が開く。パラパラッと爆薬の破裂する音がその後に続いた。花宗橋は浮き桟橋の広場へ向かう人で溢れていた。幼い女の児を抱いた若い父親や急いで駆けて行く子供たち、うちわを手に持った若い恋人たちや中年の夫婦……。様々な人が目の前を通り過ぎて行く。奈緒子が彼の姿を認めるとすぐに近づいて来た。

「もう始まったごたるよ。早よう行こう」

頭上の空を蓋う大輪の花火の数が増えていた。たたみかけるように胸に響いてくる花火の音がはやる心をせきたてる。

広場はすでに溢れるような人で埋まっていた。桟橋から見える筑後川の小さな中州に仕掛けられた打上げ台から、

するするするっと微かな光が尾を引いて空へ翔け昇って行くのが見える。それが天に届いたかと思うと、ぱっと開いて、赤や青や黄色の火花が空を彩りながら胸の中まで降りそそいでくる。

それから時の経つのも忘れてしまうほどに、光の乱舞が夜空を幾度もくり返し彩ったあと、やがて待ちに待った華やかなフィナーレとなった。

次々と上がる打上げ音と共に天に達した火花の群れは、目も覚めるような様々な色や形の大輪の花を空いっぱいに咲かせた後、最後にどーんと大きな音で終ると、広場を埋めていた人達も、もっと見続けていたい気持ちと充足感の混じった顔で少しずつ散り始めた。うち続いた花火の硝煙のためか、広場の周辺はうす明るい空気に包まれている。

「華やかな美しいものを見たあとは、何となく寂しいもんよね。でも、時々はこうして打ち上げる場所まで来て、花火を見るともまたよかね」

坂本伯父の家の方へ向かって歩きながら、奈緒子は満ち足りたような口調で言った。

「そうやね。――おれもこげんゆっくりと花火を見たことは初めてやった」

と言いながら、康介は今まで見ていた色彩の饗宴と、その後に訪れた闇の空しさを考えていた。

この夜空を彩る煌きは、次々と追いかけるように繰り出される光の幻影に過ぎない。すぐに光は深い夜の空に吸い込まれるように消えて、残るのはこの暗い闇の空しさだけである。人はこの世の不安と孤独を抱えながら毎日を生きてゆく中で、この一瞬の陶酔に浸るだけで満足するしかないのだろうか。しかしまた、このひと時の感動に身を任せることこそ、人生の歓びなのかも知れない、と康介はそれぞれの家へ帰っていく群集の中で、ゆっくりと歩みを進めながら思うのだった。

坂本木材の工場の周辺は、幾つかの製材工場とその住宅に囲まれているので、前の広い道路には人通りも無く、子供のいない伯父たち二人だけの家はもう灯りも消えていた。隣接した広い工場の片隅に、ひっそりと立っている電柱に付けられた黄色い外灯が、薄暗い足元を照しているだけである。

奈緒子が事務所の隣にある材木置場に入って行くと彼を手招いた。そこは四メートルばかりの下屋（げや）をおろして屋根を葺（ふ）いただけの狭い場所で、壁のない空間には木材が立てかけられていた。置場の両側には厚板が平積みにされていて、中からは表の通りがよく見えるが、外側からは内部が暗くて、人がいるのも気がつかない。立てかけた木材の間から僅かに月明かりが差し込んでいた。

康介は置き場の中に入って行き、一メートルほどの高さの厚板の上段に腰をおろした。奈緒子も同じように横に並

んで座ると、また話し始めた。

康介は将来の話になってくると熱がこもってきて、訥々とした話しぶりではあったが、しだいに雄弁になった。だがもう充分に話したと思っても、彼は自分の言っていることがどれだけ奈緒子に伝わっているのか不安だった。時間はどれだけあってもまだ足りなかった。奈緒子にとってもそれは同じであったに違いない。

「じゃあ、今日はもうこれで」と康介が帰ろうとすると、

「もう帰ると……？　もう少しおってもよかやんね」

と奈緒子は彼を引き止めた。家では、十二時を過ぎても帰って来ない康介を心配して待っている父親が眠れずにいる筈である。彼女の伯母にしてみてもそれは同じことだ。だが、何ということもないとりとめのない話であっても、彼と一緒にいたい奈緒子の気持ちは解るような気がした。

「うちの門限は十一時やから」と彼が何度言っても、このまま去ってしまえば、しばらくは又会えなくなるのが寂しいのか、

「もうちょっとだけ……」とその度に奈緒子は先へ延ばし、なかなか帰そうとしない。

こんなに月のきれいな夜は早く寝てしまうのが惜しい、と奈緒子は言う。一人家にいる時は、部屋の灯りを消して縁側に座り、木々の梢に降りそそぐ月の雫を見ながら、時を忘れてしまうのだ。そう奈緒子が言うのを聞きながら康介は、おれの考えていることと同じだな、とまたあらためて思うのだった。

「もう少しだけよかね」「もうちょっと……」と繰り返すうちにいつのまにか朝の冷気がしのび寄っていた。どこかで一番鶏が鳴いた。周辺の家がまだみな寝静まった夜明け前、ただ一軒だけ灯りのついた近くの豆腐屋の店先で、大豆をつぶす機械の音がし始めた。

「もうすぐ夜が明けるよ」

そう言って立ち上がると康介は、ぼんやりと電柱の蔭に立ちすくんで見送る奈緒子の視線を背中に感じながら、夜明け前の道を家へ向かって歩き出した。

三

彼岸を過ぎて、日差しもやわらかくなり始めた頃、康介は奈緒子を誘って、十キロほど南にある城下町柳河の「川下り」に出かけた。

繁華街から少し東に外れた、掘割に囲まれた三柱神社の広い参道は、人影もなく静かだった。両側に立ち並んだ楠の樹の、繁った葉の間から青い空が見えた。康介たちはいつものように、黙ったまま歩いていた。話し始めれば時間を忘れて話し続けるのに、こうして肩を並べて歩く時は黙ったままでも、ただそれだけで充分だった。参道を社殿の近くまで歩いて、また戻ってくると「川下り」の乗船場に

出た。柳河城趾を中心にして張り巡らされた、掘割の風景を観て回る遊覧船であった。

康介は乗船券を買うと、枝垂れ柳の下をかいくぐって乗船場へ降りた。何艘か並んで繋がれている「ドンコ舟」の中の一艘がこちらへ寄って来る。掘割の中に突き出ている乗り場に横付けになると、康介は船頭の手を借りて舟に乗り移った。奈緒子も続いて乗り込む。

少しでも体を動かせばその度に舟が揺れるので、二人は茣蓙を敷いた舟底にすぐに座ることにした。

もうシーズンを過ぎているせいか乗客は少なかった。中央に座っている彼等から少し離れて、船首の方に中年の夫婦が乗っているだけである。船頭から竹の皮で編んだバッチョ笠を渡されてこれを頭に乗せると、舟は滑るように進み始めた。水紋がひろがり対岸の柳の影が揺れる。国道橋の下を潜ると、ぐっと視界の開けた掘割へ出た。

艫の方に立っている船頭の持った長い竿が立ち上がったと思うと、次第にこの竿が倒れて行くにつれて舟は前方に進んで行く。両岸の石垣や家々は静かに流れるように後ろへ去って行った。数百年の昔から、先人達も家や木や畑をこうして目の前に見ながら、刻々と遠ざかって行くのを見つめて、時の流れを感じたに違いなかった。

「とても静かねえ。――何か、違う時代にタイムスリップしたような気がするよね……」

と奈緒子が動いて行く岸辺の柳を見ながら言った。

康介は黙ったまま前方を見つめながら、公園を歩いている時に奈緒子の言った言葉を、何度も思い返していた。

「あたいにいつも嫌がらせをするあのユキ叔母さんが結婚に反対しよるとよ。うちの両親は、お前がよかと思うなら行きなさい、すべてお前次第、と言うとばってん、ユキ叔母さんはあたいが幸せになろうとすることには必ずいつも反対してくるとよ。あの人はあたいをいじめて楽しみよるとよ」

「そのことなら何も問題はなかよ。そこを出てさえしまえば、ユキ叔母さんからも逃げられるとやろが……。もっともそれはあんたの気持ちが、はっきり決まってからのことばってんね」

と康介は答える。

「でも、ユキ叔母さんの言うことには誰も逆らえんとよ。あたいがもしどれだけ好きになったとしても、結婚するまでにどんな邪魔をされるかわからんし……。そしたらまた、伯父さんやあなたたちに迷惑をかけることになってしまうでしょう?」

舟は大きな欅が枝を広げている下をくぐって進んで行く。何故か両岸の家は、音の無い世界に建っているように見える。人の住んでいない、ただの絵のようだ。

左岸の家の傍に、掘割に降りてくる幾つかの木の段が作

られていて、その突端にしゃがんだ若い女が、洗濯物をすすいでいる。その波紋が円を描いてひろがり、水に映った女の影が揺れていた。

「それにあなたのお母さんのことも、とても心配になってき始めたとよ」

坂本の伯母の話によると、康介の母親はとても口が悪いからお嫁さんは大変だ、と近所の人が言っていた話を奈緒子は聞いたのだった。

「あたいはそんなお母さんについて行けるかどうか、ぜんぜん自信はなかしね」

「それはこのおれにしっかり摑まってさえいてくれれば問題はなかよ。おれがいつもついてるよ。どんな時でもおれはいつも奈緒子の味方やからね」

康介はまた強い調子で言った。

しかし、奈緒子が不安に思うのもまた当然のことだった。彼の母ミツとの間の問題は、彼の一方的な譲歩によって切り抜けられたことが多いのだ。だが、これは彼が奈緒子を守って行く気持ちを失いさえしなければいいことであった。

また、もう一つ気になることがあった。数日前のこと、同じ町内に住んでいた奈緒子のもう一人の叔父が、突然ふらりと出て来ると、彼女の部屋に来て言ったという。

「せっかく進みよる話に水をさすようで悪かばってんね。ユキ叔母さんがえらい反対をしよるらしかやんね。俺も直接に聞いたわけじゃなかばってん、その気持ちは分からんでもなかさい……。その人は足の悪かそうやが、その他には何もなかとやろうね」

叔父が奈緒子を傷つけぬように、遠慮しながらそれでも敢えて言わずにはいられないという気持ちでいることがよく分かった。

「叔父さんにまで心配をかけてごめんね。でも、あたいの目でちゃんと確かめて決めたかとよ。……そいけん、もうしばらく黙って見とってくれんね」

「それは勿論そうするつもりばってん、結婚は人柄とか好き嫌いだけで成立つものじゃなかけんね。家の中の物一つを動かすにしても、男の手が欲しか時もあるし、今はお父さんや若い職人が何人もおらすけんよかろうばってん、将来はそれもどうなるかわからんしね。二人で買い物に出かけても、荷物は全部自分が持つ覚悟でおらんばならんし、子供が出来たらそりゃあまた大変よ。そがんとが何もかんも、あんた一人の肩にかかって来るけんなあ」

養子の叔父が言ったその言葉は、まだ耳の底に残っていると言う。

前方から同じ型の舟が近づいて来る。船頭が竿を持ち直してまっすぐに立てたと思うと、また少しずつこれを倒しながら舟を進めている。酒に酔った乗客の一人が隣の客に何か言いながら笑いかけると、こちらを向いて、

「いよっ、お二人さん！」と手を上げた。

百年以上は経ったと思われる土蔵のナマコ壁が不意に現れ、また遠去かって行く。楠の木立と潅木の茂みが現われたと思うと、先刻笑い合った者達と同じように後ろの方へまた流れて行く。康介はこれ迄に出会っては別れた人のことを思い出していた。人は偶然に出会い、別れる理由があって別れて行くように見えるがそうではなく、天は生涯を通じて寄り添って行く人との出会いのために、人との別れをいつも用意しているのではないか、とふと思ったのだった。

晴れていた空に薄雲が拡がり始めていた。その空の色を映して掘割の色も少しずつ鉛色に変わっていった。

十月になると、この町から対岸の町に向けて架橋中であった筑後大橋が完成した。華々しい開通式が行なわれ、筑後川は歩いて渡れるようになった。

奈緒子は、自分の家の近くに康介が来ることをあまり好まなかった。変な噂が立っても困るからだろうが、大橋が通れるようになってからはもう叔父の家に泊まらなくてもよくなったので、自転車で三十分以上はかかる道を、週に一度は橋を渡って出て来るようになっていた。近くの駅に自転車を預けておいて、七時頃になるといつも跳ね橋の上で待合わせた。そして十時になるとその自転車でまた大橋を渡って家へ帰った。

康介は一度、夕闇の迫る頃に二人で砂利道を歩いている時、突然小さなくぼみに足をとられて前のめりに倒れたことがあった。右の膝をしたたかに打っていた。ここ四、五年、歩行中に転ぶなどなかったことである。いったん靴を脱いで、痛みを怺えながら辛うじて立ち上がると、彼は破れたズボンの膝を気にしながら泥を払って歩き始めた。だが倒れた時には、彼は咄嗟にどうしてよいのか分からず、黙って傍に立っている奈緒子の気持ちを考えると、どんなふうに説明していいのか分からなかった。

彼は男性としての機能も正常であり、何の不安をも感じることはなかった。しかし、これでは奈緒子を幸せにしてやることはできないのではないか、という思いに襲われた。自分はこのまま引き退るべきではないのか。所詮、自分が普通に幸せになるのを求めること自体が間違っているのかもしれない。もしもこのまま、病勢が進行していった場合にはいったいどうなるのか。それを考えると、矢張り彼はもう奈緒子を求めてはいけないのだと強く思った。康介はもう黙りこんで歩き続けるしかなかった。

「何も気にせんでもよかよ」

突然、肩を並べて歩いていた奈緒子が言った。

「あなたの体が少々不自由やったとしても、あたいはそれでよかとよ……。考え方がしっかりして、前向きに生きていくとなら、それで充分じゃなかね」

「ありがとう」康介はそう小さく言うしかなかった。

いつか二人はまた花宗橋の上に来ていた。跳ね橋は上がっていて通れなかった。あたりには人通りもなく、暗い雲が低く垂れこめている。橋のたもとの、木の電柱にとまった傘の下の裸電球が、暗い夜道をぼんやりと照していた。

時が移ればすべては変わるものだ。今日の考えが昨日と同じでなければならないという理由はない。彼女が結婚したいと言ったとしても、康介はそれをまだ全面的に信じることは出来なかった。まして、奈緒子の心がどう変わって行こうと、それは誰も止められないのだ。この世の流れには、人間の意志を越えた何ものかがあるに違いなかった。康介は自分のこれからのすべてを、その何ものかにゆだねる外はないと思った。

奈緒子は、そんなことがあってからも大橋を渡って康介の許を訪れていた。週に一度はこれから行くという電話がかかってくるのだが、どうかするとまだ三日しか経っていないのに、

「今日も、今から行くけんよかね……。そんなら、いつもの所でね」

と言って出て来ることもあった。日が短くなってくると待合わせの時刻が少し早くなった。康介は五時に会社を出ると急いで家に帰り、入浴と食事を手早くすませて、奈緒子の待つ場所へと急いだ。

今日もまた東の空に、白く冷たい光を投げかける大きな月があった。初めて会った時から三ヵ月近くがたっていた。僅かな通勤客が乗り降りするだけのこの小さな駅には人影もなく、まだ明るさの残っている広場で待っていた奈緒子の顔がほんのりと白かった。

康介は黙ったまま歩き出した。すぐ近くに、大橋ができてから廃止となった、筑後川の渡し場があった。僅か一坪という小さな切符売場は、閉ざされたまま荒れ果てていた。三十センチほどの平たいグリ石を一面に並べただけの、なだらかにくだった渡し場を川の方へ降りてみる。もう満潮が近いのか干潟も隠れてしまうほどに水位が上がり、岸辺にうち寄せる波がひたひたと音を立てている。筑後川に架かる長さ五百メートルにも及ぶ鉄橋があり、大きな船がその下を通るたびに、レールのついた大きな橋桁が上がるという国鉄の開閉橋が左手に高くそびえ、夕陽の残照に輝く雲を背景に黒く浮かびあがっていた。これもまた大きな跳ね橋であった。

康介がまた歩き始めると、彼女も黙って肩を並べて寄り添ってくる。赤い煉瓦塀に添った道を少し歩くと、左手にいまはもう使われていない青年学校の校舎があった。その手前に崩れかけた煉瓦塀の裂け目があり、それを潜って中

へ入ってみる。南に面した校舎の壁にもたれると、前方には遮る物もなく、民家の瓦屋根の上に、冴えざえと光る冷たい月が地上を照していた。

康介は彼女の方に向き直ると、初めてその背に手を廻した。彼女の白い顔が、真昼のように明るい夜の中で、月の光を受けて浮かび上がっている。彼は思わず彼女を引き寄せていた。

彼は左手で彼女を抱いたまま、右手でその肩にかかった髪を、飽きることもなくいつまでも撫でていた。彼が背中に垂れ下がった髪をその手で握ると、きっちりと五本の指の中に包まれてしまうのだ。その髪は彼の掌の中で愛撫される度に、さらさらと幽かな音を立てた。

このような状態がいつまで続くのか、康介には分からなかった。しかしまた、このままでいい筈もなかった。彼はいつか来る別れの時をどう迎えるべきかをいつも考えていたと言ってもよかった。

高く昇った月の光は家々の瓦や木立や塀や道路に降りそそぎ、地上のすべてが夜露に濡れていた。乳色の靄が川面にたなびき家々を包んでいて、暗い水面には対岸の小さな灯が幾つも水に映っている。濃い桔梗色の空の中に、すっくと立ち上がった開閉橋の鉄の塔が幻のようにぼんやりと浮き上がって見えた。

「あたいはね……」

奈緒子はゆっくりと彼の耳許で言った。

「これまで迷ったりしとるようなことを言いよったばってんね……。あなたと会って、こうして将来のことを話しよる時はとても楽しいし、これから先もあなたのような人に出会うことはもう恐らく無いと思うとよね。そいけん……」

彼女はそこで一度息をつくように間を置いたあとで、

「そいけん……。あなたと二人で、これからの人生を歩いて行こうと思う。というより、あなたといつも一緒にいたかとよ……」

康介は何か言おうとしたが言葉にはならなかった。

そのとき遠くのほうで、微かにゴーッと地底から響いてくるような音が聞こえ始めた。それは筑後川の鉄橋を渡り始めた列車が刻々と近づいてくる音だった。

レールをゆっくりと刻むその微かな音は、次第に大きくなりながらこちらへ向かってくる。やがていつのまにか鼓膜も破れるほどに膨れ上がった轟音が、こちら側の岸に近い開閉橋の部分を過ぎて、鉄橋を渡り終ったと思うと、目の前の河口の停車駅にいま滑り込もうとしているディーゼルカーの姿があった。

四

空も青く晴れ渡った晩秋の午後、身近かな親族だけの簡

素な結婚式だった。

着慣れないモーニング姿の康介は、数時間も前から落ち着けず、家の中を行ったり来たりしていた。二間続きの広い客間には、すでに宴会の準備が整えられている。親戚から手伝いに来た娘たちが割烹着をつけて、もう早くから台所に集まっていた。式の始まる予定の三時はもうとっくに過ぎていた。

やがて一時間近く遅れて、タクシーに乗った奈緒子と親戚の一行が到着した。これを見ようとして、四、五十人ばかりの近所の主婦や子供達が、玄関の前に集まっていた。

康介が廊下の奥のほうに立っていると、白い角隠しに花嫁衣装を着た奈緒子が、玄関の敷居をまたいで入ってくるのが見えた。康介は、彼女がいま自分の妻になろうとしているのが信じられない気がした。七、八人の親戚がそのあとに続いている。彼は激しい胸の動悸をもて余していた。両親が玄関に出迎え、挨拶をしている声が聞こえる。彼はふと自分の顔が緩みっ放しになっているのではないかと思った。茶の間にある鏡台の前に行ってそれを確かめ、早くどうにかして気を引き締めなければならない、と思っている自分に気がついて苦笑した。

金屏風の前に奈緒子と並んで座ると、仲人の挨拶に続いて固めの盃が始まった。すぐに蔭謡いの声が朗々と部屋にひびき始める。広縁に面した植込みのむこうに、ブロック塀によじ登った子供たちの顔が幾つも並んで見える。康介がまず盃を飲み干すと、奈緒子が続いて盃を取った。お白粉を塗った白い指先が激しく震え、赤い盃がゆらゆらと揺れている。多くの人に見られて緊張している彼女の胸の鼓動が伝わってくる気がした。彼は今にも彼女が盃を取り落としはしないかと気が気ではなかった。

暮れ方から始まった祝宴は夜の更けるまで続いた。奈緒子の従姉妹達の踊りが入り、父の取引先でもあるフスマ屋の辰さんがもろ肌を脱いでの蛸踊りが始まった。開け放った広縁から晩秋の冷たい風がしのび寄り、それと入れ替わるように、宴に酔う華やかな歓声と賑やかな三味の音が夜空に散っていった。

空はどこまでも青く、晩秋のやわらかな午後の日差しが野や山に満ちていた。

収穫の終った稲の束が農家の軒先ほどの高さに野積みにされ、畔ごとに整然と並んだ稲の切株が、白く乾いた土の上に遠く山の裾まで続いている。筑後平野を横切って滔々と流れ下る筑後川を左手に見ながら、二人の乗ったタクシーはこの川の上流にある日田盆地の温泉町に向かって進んでいた。三日間にわたって続いた披露宴のあと、なるべく近いところでという奈緒子の希望で二泊三日の旅行だったが、家を出がけに見送ってくれた佐太郎とミツの安堵した

ような顔を思い浮かべながら、康介は移りゆく窓の景色に目を注いでいた。

車は久留米市から田主丸と吉井の町を過ぎて、山あいの県道を進んでゆく。山間部に入ると急に濃い緑が多くなった。杉の美林の間から垣間見える眼下の渓谷の眺めや、淀んでいる渕の中ほどに佇む白い鳥にも鮮烈な印象を覚えながら、康介はいま生きている歓びを強く感じていた。このタクシーは近くの顔見知りの運転手なので、それが気になって奈緒子とはあまり話も出来ない。つい黙り込んでしまうことの方が多かった。康介は黙ったまま奈緒子の白い手を取った。指先の細いわりには根元のほうが少し膨らんでいる。その裏を返すと、ふっくらとした指の根元に四つの小さなえくぼがあった。明るい陽の光の中で、奈緒子の手を間近かに見たのはこれが初めてであった。

大きな旅館だった。広い庭園の中の長い渡り廊下を歩く。その廊下の東側に止り木のように突き出た幾つかの離れ座敷が造られていて、そのうちのひとつに案内される。それは八畳に次の間のついた数寄屋風の造りだった。

大きな丸い食卓に並べられた料理は食べきれないほどだった。食事が終わると、陶器の大火鉢の向こうに座っている、宿の浴衣に羽織を重ねた奈緒子に康介が言った。

「こちらへ来て、此処に座らんね……」

髪をショートカットにした彼女は、立ち上がって大きな火鉢を回り彼の傍へ来て座ると、黙ったまま体を凭せかけてくる。

「こうして、これからのことを話そう」

康介はその胸に彼女を抱き止めて、ゆっくりと語り始めた。

彼はこれまで大きな望みを持つことはなかった。平凡に生きて、生の終る時が来るまで、人並みに暮らせればそれでいいと思っていた。愛し合える人とささやかな家庭を持ち、子供も何人かいて、普通に育てることができればそれで充分だ。殺伐とした社会の片隅のささやかな幸福、それこそが彼の求めるものだった。苦しい時に、自分を支えてくれる人がいつも傍にいてくれればそれでいいのだ。康介は逆境に育てられ、何度も病気の試練に耐えてきた。だが、そのことを考えれば今のこのひと時は、これまでに想像したこともない至福の時だった。

奈緒子は彼の言葉を黙って聞きながら、頭を彼の胸に埋めていた。初めのうちは、時々笑いながら彼の言葉にも答えていたが、いつのまにかそれはすすり泣きに変っていた。彼は不意に何か胸をつかれるものを感じた。

それは憐みなのか同情なのかそれとも——。しかし、同情ならばいらないと彼は思った。安易な同情はかけて欲しくない。いま彼女の胸中にあるものはいったい何なのか、

彼はそれが知りたかった。

奈緒子と結ばれることで、ここに一つの答えは出た。だがこれですべてが解決したわけではなかった。これからの生活にどう立ち向かって行くのか、多くの問題を抱えての新しい出発であった。そのためにも奈緒子の心の中の真実を知りたいと思うのだ。だが奈緒子は激しく泣き続けるだけである。康介は声をかけることもできないまま、彼女をいつまでもそうして抱き続けているよりほかはなかった。

枕許の行燈風の灯りが、ぼんやりと天井を照していた。部屋はひっそりと静まり返って、どこか遠い所でラジオから流れる音楽が微かに鳴っている。康介は床についた今、やっとこの数日間の周囲に対する気苦労から解放され、自分を取り戻していた。

康介があれこれとひとり思いをめぐらせていると、横に並んだ布団に寝て今まで黙っていた奈緒子が、上を向いたまま呟くように言った。

「もう眠ったとね……?」

彼女もまた同じように眠れないのであろう。

「いや、この二、三日の間に起こったことを思い出しよったったい」

康介はつい先程激しく泣いた奈緒子のことを考えていたのである。どうしても気になって仕方がなかったのだ。

「さっきは、どうしてあげん激しう泣いたと……?」

奈緒子は、彼の胸にもたれて話を聞いていた時に、不思議なほど胸がこみ上げて来たのを思い出しているのか、しばらく黙ったあとに言った。

「悲しかったからじゃあなかと。——また可哀そうに思うて同情したわけでもなかとよ。ただ、式の情景やその後に続いた披露宴で、あなたのお友達の喜んでくれた顔、それに苦しいことの多かったこれまでの家のことなどが頭に浮かんでくるうちに、いつのまにか涙が溢れてきてどうすることもできんやったとよ。——あたいはね……」

と何か言いかけて奈緒子は康介の方を振り向いた。康介は黙って上を向いたままだった。

「あたいは今までずいぶんと辛い思いをしてきたばってん、あなたの方がずっと大きな苦しみに耐えて来たことを考えると、これからは、あなたにもっと幸せになってもらいたかと思うたとよ……。それに、あたいよりも深くあなたを愛せる人は、ほかにはもうおらんと思うたと……。そして何よりも、もうあなたをこれ以上孤独なままに放って置くことはできんと考えるようになったとよ……」

奈緒子はぽつりぽつりと言葉を選びながら話を続けた。

「あなたにめぐり逢えてほんとによかった、と思うたとよ……。そうしたら、周りのみんなに祝福してもらって、今あなたと此処にこうしていることが何故かたまらないほど

幸せに思われて来て……」

奈緒子はそこまで言うと、また胸がつまったのか、言葉が途切れた。

ふと、黄昏の花宗川にかかる跳ね橋の情景が、康介の脳裏に浮かんだ。自転車や、橋を歩いて渡る人たちがゆっくりと橋桁を鳴らしながら通り過ぎる。下流のほうに見える浮き桟橋の船着き場には、積荷を卸した五、六艘の運搬船が、潮が引いて干上がった潟の中に半分埋もれて斜めにかしいでいる。明日の船出を前にして、潮の満ちて来るのを待っているのであろう。跳ね橋の下の水の流れは、狭くなって小さな川のように見えた。

目が覚めると、左手の障子が仄かに明るさを帯びていた。広縁のカーテンの隙間から洩れてくる朝の薄明かりが、細長く縦に映って、障子をほの白く浮き立たせているのだった。

康介が目覚めているのに気づいたのか、奈緒子がそろそろと起き上がって、布団を出て行く。縁側のカーテンを静かに引く音がした。瞼の裏側が急に少し明るくなった。奈緒子が猫間障子を上げて、下半分をガラスにすると、また布団に戻って来た。

「ね、ねッ。見て。朝焼けよ」

まだ目を瞑ったままにしていた康介が薄目をあけると、明けかかった夜のまだ薄明るい空の色が、縁側の硝子戸全体に拡がっている。彼は思わず上体を起こしていた。

昨日は気がつかなかったが、この宿は遠く地平の果てまでも見渡すことのできる、小高い丘の上に建てられていたのである。群青に近い広大な空の色は、東の方へ移っていくにつれて次第にうす碧に変わっていて、山の端の朱鷺色に滲む辺りから始まって東の空いっぱいに、複雑な赤と金色に輝く朝焼け雲があった。

遠くに連なる山々の中腹まで、白い靄が地上を覆っていた。その上のほうに、綿をちぎったような幾重にも重なって横に流れる赤紫の雲の色が、まだ姿を見せない燃えたぎる日輪から放射される光の中で、少しずつ微妙に変化してゆくのだ。その朝焼けの空は、彼が今までに見たこともないほどの鮮やかな彩雲の光景であった。

それは暗い夜の終わりを告げていた。康介は、長い眠りから覚めた広大な日田盆地が、いまにも姿を現そうとしている日輪に、刻々と染まり始めていくのを見つめながら、胸の奥深くまで光が満ちてくるのを感じた。

文芸思潮 創刊

文芸復興をめざして！

私どもアジア文化社は、日本文学の復興をめざし、日本全国および外国に渦巻く日本文学創造のエネルギーを吸収し、それらの営為との交流のうちに、新しい文学運動を展開していきたいと考えています。既成の出版ジャーナリズムだけでない、日本各地の日々の生活のうちに行なわれている文学行為とつながり、その運動を通して、新たな日本の文芸文化を興隆させていきたいと願っています。

この運動の軸として「文芸思潮」を創刊します。

作家の創造エネルギーを十全に発揮できる場を作ることによって、文芸活動の新しい結合を図っていきたいと考えています。

それぞれの作品には、それぞれかけがえのない人生があり、その思いがあります。「文芸思潮」は極力それを尊重し、読者との交流を図りながら文芸運動の渦を広げていきます。埋もれた文芸創造のエネルギーを積極的に世に出し、文学精神を共有し、文芸の営為を永く世に伝え保存する活動を展開していきたいと思っています。それによって日本文学の真の意味での興隆を図っていきたい所存です。どうかよろしく御理解、御協力のほどをお願い申し上げます。

文芸思潮

■創刊号内容■

銀華文学賞発表　井口時男　富岡幸一郎　菊田均　山崎行太郎

文芸評論家・座談会　日本文学の衰退をどうとらえるか——再生は可能か

エッセイ「月の村の中上健次」中上紀

原爆特集　遺言「ノー・モア・ヒロシマ」桑原千代子

「暗闇の中から」

戯曲「核の信託」五十嵐　勉

●●「文芸思潮」の柱は次の7つです。

1★作家の発表の場
2★銀華文学賞による各地からの作品賞揚
3★同人雑誌優秀作の掲載による奨励
4★新しい小説方法の実験の場
5★ノンフィクション作品の掲載
6★現代詩の掲載と奨励
7★インターネットを使った新しい表現と交流の場・作品保存を試みる

「文芸思潮」は本号は季刊で1部1050円（税込A5判／送料別200円／年4回発行）、補助号1部500円（B5判／送料100円／年4回発行）で、年間7000円の定期購読料となります（200円割引）。

※補助号は、各地からの作品をできるだけ多く載せ、交流・勉強の場とするような内容にしていく予定です。

また、本号（4号）のみ、逆に補助号（4号）のみの定期購読も可能です。

定期購読ご希望の方、また単号でも購入ご希望の方は下欄の申込書に御記入の上、FAXまたは郵便でアジア文化社「文芸思潮」購読係までお送りください。メールでもけっこうです。

代金は雑誌が届いてからでけっこうです。

新しい日本文学の興隆をめざすこの運動は、文芸を愛する皆様の御協力なくしては成立しません。私どもの新たな文学運動への企図と熱い思いをお聞き届け下さいましたら幸いです。

どうかよろしく御理解、御協力、御支援のほどをお願い申し上げます。

文芸思潮 スタッフ一同
作家集団「塊」KAI

「文芸思潮」　定期購読／購読申込書

定期購読・購読（単号）を申込みます。　どれかに○をつけてください。　定期購読（本号のみ・補助号のみ・両方）・単号購読

名前	年齢　歳	文学暦　年	申込年月日　年　月　日
筆名	TEL		注文N0.　年　月（　号）から
住所 〒	備考	所属同人誌（もしあれば）	担当・紹介

アジア文化社　「文芸思潮」〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13　TEL&FAX 03-5706-7848　CXP 11456　nifty・ne・jp

きずな

東天満　進

「ちょっと見てもらえないかな。これはなんだろう。北側の六畳の天袋の奥にあったんだけど……」

息子の浩介が、一メートルほどの長さの細長い包みを両手で捧げるようにしてベランダに出てきた。程近い戸塚に別居している浩介と嫁の恵理が月に一、二回、土曜か、日曜に五歳になる孫の雄太を連れてやってくる。その時を利用して、妻の由美子は、夫には無理あるいは危険と判断した力仕事などを頼むようにしている。

「刀らしいけど、母さんも中は見たことないと言うし……」

その時、走り寄ってきた雄太が、包みの端に手をかけて引っ張った。

「僕にも見せてよ」

舞い立った埃が煙のように風に流れた。

「ちょっと待ちなさい」

恵理は、慌てて雄太を引き止めると、急いで持ってきた古新聞をベランダに敷いた。その上に袋包みを横たえて、乾いた雑巾で丁寧に埃を払い落としてゆく。下から紺の地色に白抜きされた唐草模様が現れてくる。秋山清の脳裏に、暗い電灯の下で大風呂敷を縫い合わせてこの上袋を作ってくれた母の姿が浮かんできた。

袋の中身を忘れるはずはなかった。清は、デッキチェアに腰を下ろしたまま、揃えた両膝の上に置いた袋の口紐をほどいた。

中から刀袋が現れた。袋地は錦である。錦とはいうものの、終戦一年前の昭和十九年ごろに作られたものだから、

緑の唐草模様を織り出した萌黄の地に、小さい楕円形に図案化された竜と雲とを交互に等間隔に金糸で織り出しただけの粗末なものにすぎない。その金糸も、輝きを失って黒みがかった茶色に変色してしまっている。

袋の上端を柄頭のところで折り返し、房のついた紫の紐で柄元に巻き締めたのは、昭和二十五年、八十三歳になった祖父から、この刀の弔いを託された時だから、もう五十四年が経っている。あの日から現在までの間に、清は、仕事の都合もあって、二十六回も転居を繰り返した。その間も、この刀袋の包みは持ち歩いた。だが、その間、一度も袋を解いて中身を確かめてみようとしたことはなかった。この公団住宅に入居してからでも三十三年が経過している。転居のための荷造りの折などに袋を目にすると心が波立った。その度に、申しわけのなさと、後ろめたさの混じりあったような感情が、袋を開いてみようとする清の手を引き止めた。そして、使用する度合いのもっとも少ない荷物類の一つとして、いつも天袋や戸棚の一番奥に仕舞いこむことを繰り返してきた。

清は、刀袋を膝の上に載せると、巻き締めた紫の紐を解いて、中から日本海軍の長剣の仕様に改装した刀を取り出した。長剣には、柄頭先端の兜金から鞘の先端の石付きまでの間に様式に従って数個の金具が使われている。その金具類は、六十年に近い年月を手入れ無しにすましたとは思えないほど金色の光沢を保っている。だが、鞘に覆われている内部の鉄の部分には半世紀に余る歳月の間の赤錆が層をなしているに違いない。清は、鮫皮が巻かれている鞘を左の掌に横たえ、刃先を上にし、右手で柄を握り締めた。だが、これから出現するに違いない光景を想像すると、鞘を払うことがためらわれた。

＊

家に伝わる十二本の刀や脇差のうちから、日本海軍の長剣の仕様に改装したこの刀を祖父から贈られたのは、昭和十九年七月に海軍兵学校の夏期休暇で帰省した折のことだった。

祖父は、蔵の中から代々伝わってきた十二本の刀や脇差を運び出してくると、座敷に敷いた帆布の上に並べた。

「重太郎からも、その時がきたら、一番良いのを持たせてくれと頼まれておる。お前が好きなのを持ってゆけ」

清の父の重太郎が病身のこともあって、刀の管理は祖父が受け持っている。

清が細身の軽そうなのを選ぼうとすると、

「これにせい。無銘だが、わしが一番好きな刀じゃ」

祖父は、清がこれを持ってゆくのは当然のことだとでもいうように、自分の正面に置いてある幅広の刀身の頑丈そ

うな一振りを取り上げて手渡してくれた。
「言い伝えによると、元はもっと長かったものを、実戦に使いやすいようにすりあげて短くしたらしい。反りも少なくなっているから長剣にするのにちょうどよいだろう」
清の両手に、ずっしりと刀の重みが伝わってきた。

海軍兵学校第七十四期生のうちの清を含む航空要員約三百名は、卒業四ヶ月前の昭和十九年十二月から、霞ヶ浦海軍練習航空隊で飛行訓練を始めた。卒業式は霞ヶ浦で済ませ、訓練基地を北海道の千歳へ移して六月十三日に練習機教程を終えた。翌十四日から実用機教程に進み、戦闘機専修組は千歳基地で、艦上爆撃機専修組と艦上攻撃機専修組とは美幌基地で、陸上攻撃機専修組と偵察専修組とは女満別基地で、それぞれ訓練を開始した。だが、戦局の逼迫、航空燃料の欠乏、訓練に充当する実用機の不足などのために、実用機教程を継続することが困難になった。この事態に対応するため、七月一日からは、九三式中間練習機(赤トンボ)による特攻訓練組、ロケット戦闘機秋水の搭乗員養成のための特殊機訓練組、地上教育組に分かれて訓練を進めることになった。こうした変動の最中の七月十五日、清たちの海軍少尉任命が発令された。
八月十三日になって、訓練にまわせる燃料がようやく入荷し、女満別基地では同日から飛行訓練を再開した。八月十五日の『終戦の詔勅』の放送があった後も続けられていた飛行訓練も八月十九日をもって打ち切られ、翌日には女満別基地の全航空機のプロペラが取り外された。
一方、飛行訓練と並行する形で進められていた復員業務も八月末にはおおむね終わり、後には飛行学生とその教官のほかには、飛行機や兵器などの米軍への引き渡し要員であるわずかな人々が残っているだけになった。
学生たちは、衣服や身の回りの物品は行李に詰めて女満別駅から手荷物で生家などへ発送した。届くかどうか分からないと受け付けの駅員もたよりなげであったが、それは覚悟のうえのことだった。困ったのは長剣の処置である。やむを得ない場合には処分を任せるという条件で、下宿屋や知人などに預けた者も多かったが、清や野上のように、何とかして持って帰りたいという者も数人いた。野上と清とは兵学校一学年の時に同じ分隊だったが、偵察専修組でまた一緒になった。清は、野上と相談しながら、できるだけ刀と分かりにくいような荷造り方法を工夫した。長剣とほぼ同じ長さに折り畳んだ毛布で周囲を巻き固める。別にシーツで細長い袋を二個作り、急場用に支給された白米を一升ずつ詰める。この長剣と米袋二本をまとめてシーツで包み込んで固く縛り、肩に掛けられるように担い紐を付けた。
女満別基地の教官と飛行学生とが復員の途に就いたのは

九月七日の早朝だった。清は、長剣の包みと弁当などの当座の身の回り品を入れた雑嚢を右肩に掛け、航空関係の図書などを入れた中型のトランクを左手に提げた。
一行は、同日夜、千歳駅に到着し、母基地で一夜を明かした。
翌朝、食事を終えて、久しぶりで千歳組、美幌組のだれかれと挨拶をすますと、後は特にすることもないまま、指揮所の前まで行ってみた。空は晴れ上がっていて、日差しはまだ夏の強さを残しているが、風の気配には紛れも無く秋の到来を告げる涼気が含まれている。東方遙かに連なる夕張山地や日高の山並み、西方に横たわる恵庭岳や樽前山の姿は以前と変わるところはなかったが、広大な飛行場地区には一機の飛行機も、一人の姿も無く、森閑としている。
兵学校二学年の時に同じ分隊だった本多が墜落して殉職したあたりに向かって黙禱を捧げていると、「飛行学生集合!」を告げる叫び声が聞こえてきた。
「明朝、米軍先遣部隊が飛来するということだ。我々は、準備でき次第この基地を出て、第三千歳基地へ移動することになった」
集合した一同に当直学生が告げた。
慌ただしくトラックで運ばれた先は、基地とは名ばかりで、千歳飛行場の北西に当たる小高い丘の中腹に造られた防衛陣地跡である。急造された陣地の半地下式の小屋には照明設備も無く、夜は焚き火の明かりが頼りであった。心ははやっても、青函連絡船に乗船する順番が来るまでは、この山小屋を動くわけにはゆかない。毎食乾パンの生活が始まった。
翌九月九日の昼過ぎ、久しぶりで爆音を耳にした。飛来したのは一機のB29だった。四発の重爆撃機は、銀白色の巨体をまるで戦闘機のように軽々と傾けながら、飛行場の周囲を旋回している
「一〇〇オクタンの飛行ぶりだな」
野上がつぶやいた。悔しさがにじんでいる。
一周を終えたB29は、次第に高度を下げて、眼下に見える滑走路に着陸した。
つい先日まで、日本海軍の北海道における最大の基地であったこの飛行場に、日本の多くの都市を焼き払ったB29に単機で乗り込まれても何の手出しもできない。まるで、戦争に負けるということはこういうことなんだ、と展示して見せつけられているようである。
六日目の十三日になってようやく青函連絡船に乗る順番が来て、山ごもりを引き払った。千歳駅から乗車し、十四日朝には函館に到着した。だが、前夜から雨模様であった天候がいよいよ悪化し、函館一帯には暴風雨が吹き荒れている。埠頭付近は乗船できない復員兵でごったがえしているが、連絡船は出港できないという。

やむなく、飛行学生たちは、付近の国民学校の講堂を借りて一夜を明かした。翌朝になってもまだ風雨は衰えず、出港の見通しが立たない状況が続いている。埠頭まで様子を見にいってきた野上が、米を出せば握り飯を作ってくれる旅館が近くにあることを聞き込んできた。今のうちに弁当を準備しておくことにして一緒に行ってみると、すでに十人余りが並んでいる。台所の竈(かまど)では、五升と三升は炊けそうな二つの大釜が盛んに湯気を噴いている。間に合うかなと心配していると、順送りになっているらしく、米と引き換えにどんどん握り飯を渡している。二人は翌日の分を考えて、五合ずつを出して握り飯に換えた。

連絡船樺太丸に乗り込んだのは、その日の午後三時過ぎだった。飛行学生たちに割り当てられたのは、上甲板から数段降りた元は船倉だったと思われる荒れ果てた大部屋だった。しかし、先客がいた。陸軍の復員兵たちが大きな荷物を所狭しと並べ立てて場所取りをしていて、割り込む余地はなさそうだ。九月中旬の暑気と満員の人いきれで、汗が筋になって背中を流れ落ちるのが分かる。

「甲板へ出ようか」

「俺もそれを考えていたところだ。こんな状態は長くは続けられないぞ」

野上もすぐに賛成して上甲板に上がってみると、人影はまばらだった。海上を吹き渡ってくる涼風が、息が詰まるようであった船底の熱気を忘れさせてくれる。

午後六時過ぎになって、樺太丸はようやく岸壁を離れた。函館山をかすめるようにして飛ぶ雲の流れはまだ速い。上甲板は、いつの間にか、新しい乗船者や暑熱に耐えかねて船室から上がってきた人と荷物で、足の踏み場も無くなっている。函館山の陰を出ると、船は大きく揺れ始めた。風は弱まっていたが、尻屋崎の方から大きなうねりが入ってきており、津軽海峡の中央部付近では白波が立っている。船体がかき分ける波の砕ける音が、時に高く、時に低くなる中で、エンジンの単調な震動が伝わってくる。

突然、その時、ぱっと周囲がまぶしい白光の中に照らし出された。先ほどまで、航海灯の淡い光でその存在だけが分かっていた野上の顔や、甲板上にごろ寝をしている人の姿や無数の荷物が、白日下のように照らし出された。

「何だこれは！　これはいったい何だ！」

「どうしたんだ！　何があったんだ！」

人々は口々に叫びながら、広げた掌でまぶしさを防ぎながら立ち騒いだ。

光の輪は、甲板から煙突へ移動し、次はブリッジを照らした。さらに船首から船尾まで、船体の各部を嘗めるように闇に浮かび上がらせてゆく。

ふっと、また突然、光芒がかき消えて周囲が元の暗さにかえった。すると、彼方の闇の中から、灯火が点滅して発光信号が送られてくる。

「米軍が津軽海峡の哨戒をやっているのかもしれんな」

野上が言う通りだろうと清も思った。

樺太丸は、エンジンを停止して漂泊を始めた。

「ブリッジでは停船命令があったと言っている。アメリカの軍艦だそうだ。臨検があるかもしれんということだ」

慌ただしく帰ってきた隣りの男が、仲間に声高に話している。

「武器の捜索だろう」

「どこか軍刀を隠すところはないか」

信号が終わると、また照射してきた。

「よほど緊急なことでもないかぎり、こんな大きなうねりのある暗夜にボートを降ろして臨検隊を送るなんてことはしないだろう。長剣を沈めるのは、やつらのボートが着いてからでも遅くはあるまい」

「もしも臨検の必要があるのなら、青森に入港してからにした方が安全で、確実にできるはずだからな」

だが、油断はできない。清と野上は、長剣の包みをいつでも投げ込めるように膝の上に抱えたまま、近づいてくるボートはいないかと、目をこらして海上を見張り続けた。そのうちに、船体を船首から船尾へ、船尾から船首へと照射を繰りかえしていた光芒がふっと消えた。海上はまた元の闇に戻った。樺太丸はエンジンを起動して動き始めた。

青森港に到着したのは、夜中の零時過ぎだった。列車の出発は、朝の八時以降ということだが、はっきりしたことは何も分からない。船を下りた人々は、駅前の広場で横になったり、荷物に腰を掛けたりして夜明けを待った。中には、飯盒で飯を炊いている者もいる。

空が白むころになると、北海道へ向かう人々も加わって、青森駅の人込みはますます激しさを加えてきた。下り列車の乗客がもたらすのだろうが、様々な噂話が格別努力をしなくても耳に入ってきた。

「東京や横浜には米軍が進駐して勝手気儘(きまま)にやっており、治安状態が極めて悪い」

「乱暴された婦女子の死体が、裏通りや郊外に無造作に投げ捨てられたままになっている」

「不審な点有りと認められた復員軍人に対しては厳しい取り調べが行なわれており、何人もの将校や憲兵がその場から連行されてゆくのをこの目で見た」

等々の類である。それらは、「東京から帰ってきた人に、今し方聞いたばかりだ」とか、「この目で見た」などという前置きや注釈をつけて真剣な面持ちで語られると、いかにもその通りだろうと思われるものばかりである。

相談の結果、東京以西へ行く者は、裏日本回りに路線を変更して夫々の故郷へ向かうことにした。

清や野上たちが乗り込んだ列車が青森を出発したのは、

九月十六日の昼過ぎだった。始めからひどく混雑した。級友数名も同じ車両に乗ったはずであるが、野上の他は確認できない。一旦は席を確保した野上と清も、幼児と少女を連れて困り果てている母親に席を譲ってからは、再び腰を掛けることはできなかった。二人は、列車が動き始めてから、ようやく見つけた透き間にトランクを割り込ませ、その上に腰を下ろした。

秋田駅に到着すると、またも群衆が列車に殺到してきた。数名が窓から先に荷物を投げ込むと同時に無理矢理に乗り込んでくる。その強引なやり方に憤慨した乗客が「荷物を投げ返せ！」「早く窓を閉めろ！」と怒号して立ち向かう。

ほっとしたのはつかの間で、今度は大きい荷物を背負った一団が、大声で叫びながら、乗降口目掛けて殺到してきた。

乗降口はすでに立ったままの乗客で一杯になっている。将棋倒しになった乗客たちは口々に怒号しながら強引な割り込み客を押し返す。ようやく発車の汽笛が鳴って、列車はまたのろのろと動き始めた。やれよかったと思う半面で、乗り込めなかった人々のことを考えると、清の胸に苦い思いがこみ上げてきた。

夜が明けてみると雨になっていた。列車は順調には走らない。一時間前後も停車している駅がある。用便が一仕事だった。清と野上は、三人を窓から出入りさせて用を足させた。

ようやく列車が富山駅に滑り込んだ時、清は、車窓の風景に思わず息を呑んだ。黒い棒杭のような焼け残りの柱が点々と雨に濡れているほかには何も無かった。これまでにも被災地を通過してきているのだろうが、窓が荷物でふさがれたりしていて、被害状況を目にしたのはこれが初めてだった。福井でも同じような光景を見た。清には、戦士として出ていったにもかかわらず、戦わないままで帰ってゆく我が身が、ひどく申しわけないものに思われてきた。

列車が京都駅のホームに到着したのは午後八時少し前だった。三重県へ帰る野上とはここで別れなければならない。二人は立ち上がると手を固く握りあった。多くの人々が下車した。野上の後ろ姿は、下車が終わらないうちから殺到してくる乗客の群れの陰になって、すぐに見えなくなってしまった。急に淋しさが膨れ上がってきた。

午後九時過ぎに、列車は大阪駅に到着した。これが大阪駅かと疑われるほど、明かりが乏しかった。ほの暗い灯火に照らし出された駅舎の周りのごみ屑を太い雨脚が叩いている。岡山行きの列車の発車時刻を駅員に尋ねると、山陽本線は不通になっていると言って、掲示板の台風情報を指差した。

『九月十七日午後三時現在、熊本付近に上陸した台風のため、九州地方は既に暴風雨となっており、中国、四国地方も風雨がかなり強まりつつある。』

困ったことになったと清は思った。徳島県南部に在る生家に帰るには、大阪港から小松島港へ渡るのが最も便利である。だが、B29によって敷設された機雷のために、大阪湾の航路は閉鎖されたままだ。したがって、故郷へ帰る手段としては、宇野から高松へ渡る方法しか残されていない。

駅の構内は薄汚れた国民服、よれよれの作業服やもんぺ、軍服など、雑多な衣服を身に付けた人々や復員兵でひしめいていた。ほとんどの人が、大きな荷物を背負ったり、提げたりしている。大阪から西へ行こうとする人々は、皆殺気だっている。列車が到着する度に、構内の人の群れが増大し、駅員との口論がもう何度も起きていた。雨脚は強かったが無風に近い状態なので、台風が来るということが信じられないのだ。

事情が分かってくると、「汽車を出せ」と喚いていた人々の怒号も何時しか消えた。行く当ての有る人々は次々に駅から消えていったが、そうでない者は、なお構内を右往左往している。清もその一人だった。

ばたばたしても仕方がない。鉄道の状況は、駅にいれば一番早く分かるはずだ。清は、駅の構内で夜明かしすることに決め、二階への階段の上がり口の脇にある人通りの比較的に少なそうな一角を寝場所に選んだ。雑嚢の中に入れてきた海軍の黒風呂敷を敷き、雑嚢を枕に横になった。トランクは体の右脇に置き、その上に長剣の包みを載せた。動き回っている時には紛れていた体のかゆみが耐えがたいほど高まってきた。熱もあるようだ。みみずばれのようなものができているので、蕁麻疹（じんましん）に違いないと思った。車中で食べた糸を引いていた握り飯か、鰯の缶詰のせいかもしれない。

ぎょっとして清は飛び起きた。背中、腰と、体の背面全体に異様さを感じた。一瞬、何が起こったのか、ここが何処であるのか、見当がつかなかった。何時の間にか眠ってしまっていたようだ。水だ。周囲は暗闇だ。停電したらしい。外では暴風が唸り、がたがたと建物全体を揺すっている。トタン板か何かが吹き飛ばされて、けたたましい金属音を立てながら、遠くなってゆく。豪雨が激しく建物や大地を叩いている。清は、ようやく自分が置かれている状況に目覚めた。暗闇の中で手探りで風呂敷を拾い上げ、水気を絞って畳んだ。右肩に長剣の包みと雑嚢を掛け、左手でトランクを提げた。あちらこちらでうろたえ騒ぐ声がする。大阪駅が水につかっている。しかも、次第に水位が上がってくる。はや足首付近まできている。

「火事だ！　火事だ！」暗闇の中で叫び声がする。ほのかに明るくなっている出入口と思われる方向へ水の中を用心

しながら近寄っていった。これだけの人がどこにいたのかと思われるほど多数の黒い人影が黙々と集まってくる。

先着者の肩越しに外を見ると、二百メートルほど離れたところで大きな火の手が上がって、火の粉が激しく暗闇に吹き飛んでいる。激しい雨脚が手前のバラックの屋根や電柱の黒いシルエットにしぶいている。時々、火のついた板切れやむしろのようなものが、火勢と強風にあおられて吹き飛んでいる。火勢も衰えてきたので元の所に帰ってきてみると、すでに他の人たちに占領されてしまっていた。

適当な場所を探して歩いているうちに、荷物を載せることができるほどのちょっとした張り出しがある窓際の一角が見つかった。そこで明るくなるのを待つことにした。

空が白み始めたころには雨は小降りになってきたが、風はまだ強かった。構内の水も次第に引いていった。どうやら、戦災で破損していた屋根から大量の雨水が流れ込んだのが構内浸水の原因らしかった。

衣服は下着まで濡れてしまっているので、気持が悪くてたまらない。清は、汚れきった洗面所でちょろちょろと水の出る蛇口を見つけて顔や手足を洗い、口をすすぎ、水を飲んでやや生気を取り戻した。昨夜の出水で、枕にしていた雑嚢が水漬けになり、中に入れていた乾パンも水を吸ってふやけてしまった。あまり形が崩れていないのを選び出して一、二枚食べてみたが、さっぱり歯ごたえが無くてまずかった。

長剣の包みはトランクの上に置いていたので、水濡れはまずまず防げたはずである。しかし、トランクには水が入ってしまったに違いない。航空関係の図書や記録類などは水に濡れてしまっているだろう。今更どうするすべも無い。そのままにしておくことにした。

午後になって、不十分ながら衣服が乾いたところで、洗面所で体を拭いて下着を換えた。ついでに、汚れた下着や靴下を水洗いした。熱はひいたようだが、胸や腹のみみずばれを掻き過ぎて、血が滲んでいるところがある。

大阪駅では、結局三晩を過ごした。この間、食事は、駅前で商売を始めている闇の飯屋で雑炊を食べたり、米を握り飯に換えたりして過ごした。

九月二十日午後になって駅員に尋ねてみると、山陽本線の汽車も岡山までは動き始めているという。急いで構内を引き払ってホームに出た。しかし、一向に列車は入ってこない。一人になると用便に困る。折角列の前の方に並んでいたのに、荷物を持って後ろに下がらなければならない。ようやく列車が動き始めても、本数が少ないために、駅から送り出してゆく人数よりも、駅に集まってくる人数の方が遙かに多いようだ。この四日間にわたる不通は、莫大な数の旅客の滞留を招いているのだろう。どっと集まってきた乗客が充満する構内やホームは異様な雰囲気に包まれている。見る者に畏怖心を起こさせるほどの大群集は、列車が入って来る度にどよめきを上げて乗降口に殺到した。順番も何もあったものではない。その状態は夜が更けてもなお続いた。

清がようやく乗り込むことができた時には、もう次の日になっていた。〇一一五発の岡山行列車の車中は、当然のことながら体の向きも変えられないほど混雑していた。立ち通しで一睡もできないまま岡山駅で乗り換え、昼少し前に宇野駅に到着した。だが、ここでも極度の混雑が起きていた。連絡船乗船口前の広場には、何重にも折れ曲がった旅客の列が続いている。その最後尾に近いところに着いた清の耳に、乗船待ちの客の列の長さは四キロだ、いや六キロだ、などというやり取りが聞こえてくる。午後一時発の便に乗れなければ午後五時発の便まで待たなければならないが、夕方の便にも乗船できそうにない。

その時、乗客の列に近づいてきた漁師らしい男が小声で勧誘してまわり始めた。

「高松へ早く渡りたい人はいないかな。このあたりに並んでいる人は明日になってしまうよ。一人十円だ。米なら割安にするよ」

清の前の二人連れの男がぼそぼそと話し合っている。

「十円というのは、なんぼ何でも高過ぎる」

「十円あったら、ちょっと昔なら、百姓家の一軒ぐらいは買えたからの」

しばらくして先ほどの男がまた回ってきた。

「今日は特別に奮発して五円にしとくが乗らないか。宿賃は倍以上かかるよ」

不安がないではなかったが、清は思い切って利用することにした。復員軍人には鉄道は無料にしてくれていたから、随分無駄をしているような気がするし、人を出し抜くようなやり方は気が咎めた。だが、大阪駅での四日間で米は使い果たしていた。今日は、岡山駅と宇野駅で水を飲んだだけで、朝から何も食べていない。ぐずぐずしてはいられない。

七、八名の人々と一緒に男の後に付いて行くと、連絡船から大分離れた岸壁に、小型の漁船が一隻係留されている。既に十名余りの人々が乗っている。清たちが乗り込むと、船足は深く沈んで、舷側すれすれのところまで、海面がきている。長剣を旅の最後のところで海に沈めるような事態になっては困るな、などと心配していたが、幸い、瀬戸内海は漣一つ見えないほど凪いでいた。次第に近づいてくる四国の山並みが、もう見る機会はあるまいと思っていただけに、ひどく懐かしいものに感じられた。約二時間で高松港に到着した。高徳本線のホームへ行くと、徳島行の列車が入っていた。連絡船の到着を待っているのか、車内は閑散としている。清は、青森を出て以来、初めて汽車の座席

に腰を下ろした。
列車は引き続き牟岐線を順調に走って、その日の午後早く阿波富岡駅に到着した。駅前で農機具の製造、販売をしている叔母の家に立ち寄って復員の挨拶を済ませ、一休みさせてもらった。叔母の家を出たのは午後四時半過ぎであった。生家の在る村までは約四キロの道のりがある。村に入るころには夕闇が敗残の身を覆い隠してくれるはずだ。
村への見通しを遮っていた山の鼻を回ると、清の家の含まれている集落の灯も見えてきた。その左端に見える灯が、紛れも無く生家のものだ。清は安堵した。立ち止まって右手のトランクを下ろした。ふと、爆音に明け暮れていた女満別基地のことが脳裏に浮かんできた。空を飛ばなくなってから、まだ一月半ほどしか経っていないのに、それはまるで遠い別世界での出来事だったように思えてくる。
生家の門口に続いている桧の生垣の端まで来た時、夕闇の中を小走りに近づいてくる人影が、「清かえ」と小声で呼び掛けてきた。
「はい、只今かえりました」
母は、「お帰り……」とだけ言って、後は言葉をとぎらせると、清の手からもぎ取るようにしてトランクを引き取った。母は、多分毎日のように、夕食が終わると、門先まで出てきて自分の帰りを待ってくれていたのだろう。
先に立って土間に入った母は、「清が帰ってきましたけん」と叫んだ。
祖父が、父を支えながら、茶の間から上がり框(かまち)まで出てきた。二人は顔じゅうに笑みを湛えて清を見詰めた。
「只今帰りました」
清は、あらためて祖父と父とに向かって頭を下げた。
「ご苦労じゃったのう」
病気をしてから一層無口になった父が、弱々しい声ながら、ねぎらってくれた。
「よう帰ってきた。さあ、上がれ。上がれ。お前の家じゃ」
祖父が促した。母が夕食の準備をしているうちに、清は、包みを解いて長剣を取り出し、父の見守る前で祖父に刀を返した。
「有難うございました。この刀と一緒に、北海道の東の端まで行ってきました」
「まことにご苦労じゃった。この刀は、故郷の土をよう踏むまいと思うとった」
祖父は、両手で受け取った長剣に頭を下げて何事かを念じている。
それからの一時は楽しいものになった。主に祖父と両親の問いに清が答える形で話がはずんだ。続きは明日にしようと話を切り上げた時には、夜半を過ぎていた。

翌日は、主に隣り近所の挨拶まわりに費やした。陸軍へ行った小学校の同級生から四人もの戦死者や戦病死者が出ていることを初めて知って驚いた。そのことがきっかけになって、その夜は、清が不在中の親類、友人、知人などの消息に関することが主な話題になって、就寝したのはやはり夜半近くになってからだった。
誰かが呼んでいる。それに気づきながら、清はまどろみを続けていた。
「清、清、起きてくれ」
目覚めてみると、祖父が枕もとに座って清の肩を揺すっている。驚いて起き上がった。
「疲れているのに気の毒じゃが、手伝ってくれんか」
祖父がささやいた。
何事かと思ったが、急いで身支度をして祖父の後に従った。外はまだ暗く、夜明けの兆しさえ、見えてはいなかった。祖父は提灯に灯をいれると、先に立って井戸端へ行った。
「理由はおいおい話すが、まずは水垢離(みずごり)をとって体を清めてくれ」
祖父は、先に立って着物を脱ぐと、つるべで汲み上げた水を頭からかぶった。清も、祖父にならった。祖父は、手拭から下着まで準備してくれていた。
水垢離が終わると、祖父は、納屋から重みのある袋包みを二つ運び出し、その一つを担ってついてくるようにと指示した。清が、その荷を右肩に担ぎ上げるのを見届けると、祖父は、清の荷より丈は短いがかなり重みのありそうな袋を右肩に担ぎ、左手に提灯を提げた。
「これから前山の岩へ行く」
祖父は、小声で清に告げると、先に立った。
南面している生家の前面に見える山を前山と呼んでいたが、その標高百メートル足らずの尾根の近くに岩が在り、頂きは平になっていて二畳敷きほどの広さがあった。
岩への登り道の途中で一休みした。その頃になってようやく東の空が白み始めた。袋の中身については祖父は何も説明してくれなかったが、袋の形や手触りから、刀、それも家に有る刀の全部であろうと推察した。祖父は、家の刀を前山のどこか、多分岩の近くに隠そうとしているのに違いないと推量した。清も、復員してくる道々、刀の処置をどうするかをあれこれ思案したが、日本占領軍が撤退するまでは地中に埋めて隠しておくのが無難で、場所も前山の岩陰あたりが最も良さそうだと思うようになっていた。
前山の岩に着いて肩の荷を下ろし袋包みを解くと、推察していた通り、中から刀が出てきた。昨夕、清が持ち帰ったばかりの長剣も混じっている。
「これから、うちにあるこの全部の刀を断ち切ってしまお

うと思う」
祖父は、岩の頂きに並べて置いた十二本の刀を見詰めながら静かに言った。
清は、思わず、えっ！ と叫んだまま、祖父の顔を見詰めた。
「近く刀狩りが始まるという噂がある。小松島航空隊にきている豪州軍の土産にするんじゃそうな。お前も帰ってきたことではあるし、なるべく早く処理した方が良いと思ってな」
「それなら、この山の中に隠しておきましょう。世の中も次第に落ち着きを取り戻してくるはずです。占領軍だって何時までもいるはずがありません」
「言い抜けできるはずがない。うちに刀があることや、お前が海軍の将校だったことは村の人は皆知っている。占領軍や警察の耳に入るのを防ぐ手立ては無いものと思わなければなるまい。それに、刀を出せと言われてから切ったのでは当てつけがましくなる」
「これまで、家宝じゃ、ご先祖の魂じゃと、ずいぶん大事にされてきたではありませんか」
「まこと、身を切られるようじゃ……。だが、やむを得まい。刀も、占領軍の土産になるようなことは潔しとはされんじゃろう。ましてや、子孫が難儀する口実に使われるようなことは尚更お望みなさるまい」
呟くような小声だったが、祖父の決意は揺らいではいない。
「お父さんは承知されたんですか」
祖父はしばらく口をつぐんだままだった。
「初めのうちは反対した。だが、刀のことで言いがかりをつけられて清が引っ張られるようなことにでもなったらどうするんだと言ったら、涙を流しながらやむを得んでしょうと言ってくれた」
祖父が刀を切断する決意をしたのは、刀を難癖をつける材料とさせないための用心であることを知って、余計に申しわけなくなってきた。
「それでは、半分ぐらい処分して、大事なものは残すことにしてはどうですか。そうすれば、言いわけが立つではありませんか」
「わしも、最初は同じことを考えた。こういう具合に切断してしまいました、と見本を作ってごまかそうかと考えたこともある。だが、わしには芝居はできん。隠し事をしたり、後ろめたいところがあると、自然に態度に現れるものじゃ。家宝とは言いながら、刀のことで難癖つけられてお前を連れてゆかれては、それこそご先祖に申しわけがたたん。お前を引っ張る口実は露ほども残しておきたくない。そのためには、こちらに少しでも引け目があってはならんのじゃ」

今、世間には、いろいろな噂が流れている。現役将校は全員強制労働に使役されることになるとか、中には、全員去勢されるというのまである。清も、実態を正確に把握できるような情報も知識も持ってはいない。しかし、復員の旅の道々で見聞きしたところを元にして判断したかぎりでは、噂ほどの蛮行が組織的に行なわれているような気配を感じてはいなかった。
「戦死者の頭蓋骨を戦勝記念に持って帰るような連中のすることじゃ。最悪の事態を覚悟して対策を立てておく必要があるだろう」
祖父がそこまで事態を深刻に考えていることに驚いたが、それを考え過ぎと聞き流してしまうことはできないと思った。
「分かってくれ。もし、来世というものがあるのなら、わしが向こうへ行った時に、ご先祖様にお詫びすることにするけん」
祖父は、自分が担いできた袋から、小型の鉄床と鉄鎚、それに柄の付いた鏨を取り出した。岩の頂きの座りの良い所に鉄床を据えると、祖父は、東の紀伊水道から昇り始めたばかりの太陽へ向かって手を合わせ、祈りを捧げた。
「さあ、始めよう。これからだ」
祖父は、自分自身を鼓舞するかのようにそう言うと、昨夜、返したばかりの長剣を取り上げて清に手渡した。一番後に回したい、そうすればそのうちに祖父の気持が変わるかもしれない、と思っている清の心中を見通したかのようである。
清は、祖父から指示された通り、鞘を払って両手で柄元を握ると、刀身を鉄床の上に横たえた。刀身は、明け渡ったばかりの青空を映して澄んだ光を放っている。昨日のうちに祖父は最後の手入れを刀に施してくれたようだ。
祖父は、左手に持った柄鏨を鍔元から二十五センチほどのところの刀身に当てた。
「ゆくぞ。しっかり持っていろよ」
祖父は、振りかぶった右手の鉄鎚に力を込めて振り下ろした。
清は、思わず目をつむった。鋼鉄と鋼鉄とが激しく噛み合う金属音が響き渡った。祖父がこの岩を切断場所に選んでくれてよかったと思った。もし、生家の庭でやっていたら、音は隣近所にまで届いたに違いない。
清は、恐る恐る目を開いた。刀身を見ると何の傷痕もついていない。信じられない思いがした。［やめてくれ！］という叫びが喉を出る一瞬前に祖父ははや第二撃を振り下ろした。今度の打撃は前よりもはるかに強力だった。だが依然として刀身に変化はない。清は感嘆した。今やめれば、何でもなかったことになる。止めようと思って祖父の顔を見上げた瞬間、第三撃が振り下ろされた。祖父の瞼から飛

び散ったしずくが、柄元を握りしめている清の拳を濡らした。

清は、ようやく祖父の決意を乱すようなことはすまいと決心した。そして、目をつむることなく刀の最後を見届けることにしようと腹を決めた。

第三撃が加えられると、鏨が当てられている付近の刀身に薄い曇りが生じて輝きが失われた。四撃、五撃、六撃と打撃が続くにつれて曇りが広がると共に、かすかだった打撃跡が刀身を横切ってくっきりと残る傷痕となってきた。打撃回数が増えるにつれて、溝は次第に深さを増してゆく。祖父から言われて刀身を裏返した。裏面から更なる打撃を数回加えると、遂に刀身は二つに分かれた。

祖父は、鎚と鏨を置くと、大きく息をついて岩の上に座り込んだ。懐から取り出した手拭を顔に当てたまま、長い間額の汗を拭う仕草を続けていた。二つに切断された日本刀は、優美さと精悍さを失って、もはやいびつな切断面をさらす鉄屑と変わるところはなかった。

次の刀の切断には、清が鎚を振るった。二人で役目を交替しながら十二本の刀の切断を終えたのは、午前十時に近かった。

祖父は、長剣の刀装だけは元のまま残した。切断した刀身の先端部も用意した白布に包んで他の断片と別にした。祖父は何も言わなかったが、長剣も切断したことを示す確かな証拠を残したいのであろうと推量した。

刀身の切断片は袋に入れて清が担ぎ、鍔などの刀装類と鉄床などは祖父が担いで先に立った。山を下りる祖父の足取りは、登ってきた時のような確かさを失っているように感じられた。清は、祖父が受けたに違いない打撃の大きさが気掛かりだった。

戦後五年ほど経って祖父が八十三歳を迎えた時、長剣以外の刀の断片は前山の岩の麓に埋めたと教えてくれた。祖父はいざという時に切断したことを証明することができるようにその後も切断片を保管していたようだ。

「長剣は、江田島、霞ヶ浦、千歳、女満別とお前と行動を共にしてきた。だから、お前の手で葬ってあげてくれ」

と袋にいれたまま手渡してくれた。だが、いざとなるとためらいが生まれて実行を先送りすることが続いた。だが、刀を大切にしているかというと、そうではない。刀袋を目にすると、刀の生命を断ってしまった時のことを思い出す。それが辛いから、できるだけ奥の方にしまいこんで、目につきにくくする。結局、無関心に埃の中に放置し続けていたのと変わるところはない。

＊

長い年月にわたる怠慢の積み重ねが、今日、無惨な刀の姿を家族に見せつける羽目になってしまった。半世紀にも及ぶ年月の錆の層の分厚さを想像すると、いたたまれない気持がする。清は、まるで、老い衰えた自分の裸体を人前にさらすのに似た羞恥を感じている。

清は、息を止め、両の手に力を込めて鞘を払った。固く錆び付いていると思ったのに、刀身は抵抗感なく抜けた。だが、悲鳴や驚きの声が同時に上がって、切断された刀身の異様さが一同を驚かせた。

「どうしたんですか、これは……」

浩介は、あっけにとられた様子で、視線を刀と、清との双方へ往き来させている。

「全然知らなかったわ、こんなになってるなんて……」

由美子もあっけにとられている。

恵理も、両の掌を頬に当てたまま、眼を見張っている。

清自身も唖然とした。想像していた状態とはまるで違う。錆がまったくと言ってよいほど認められない。僅かに鍔元近くに小指の先ほどの曇りが目にとまるだけだ。刀身は、鋼鉄の輝きを維持して冴えた冷たい光を放っている。切断面にも少しの錆も無い。保管場所が湿気の少ない公団住宅の四階の天袋であったためかもしれない。だが、四階でも、台所用品や文房具などの中には、注意をしていても錆びてしまうものもある。

「そういうことなら、この刀のお弔いをしなければいけませんね」

刀の歴史について清の説明を聞き終えると、浩介がしみじみとした口調で言った。

「いや、お弔いはやめましょう。このままの方がいい。その方がひいおじいちゃんのお気持が正確に伝わってくるような気がする。いいでしょう」

息子の言葉は、胸にこたえたが不快ではなかった。浩介の方が自分よりも正確に祖父の気持を理解してくれているように思えてきた。

「まかせるよ」

清は、刀身を鞘に納めて浩介に手渡した。

受け取った浩介は、あらためて先端部のない長剣を抜き放って秋空にかざした。それを見た雄太が「すごいねえ」と、まるで大人のような口調で嘆声を洩らした。

いびつな切断面をさらす刀身は、醜さの表徴ではなくて、乱戦の激闘を切り抜けてきた太刀の面影を彷彿とさせているように清は感じた。

オネスト！

小沢　恭

「お前、わいらと違うて学あるやろが、戦争が終わったちゆうのはどういうこっちゃ、言うてみい！」上官からの関西弁が最下級二等兵の僕に浴びせられた。

（なんだ、そんなことが尋常小学校卒程度のお前らでは判らないのか）

「終戦とは判りやすく言いますと、えーつまり日本が降参したということであります」質問に僕は明快に答を示してやった。途端にそいつはヤクザに豹変した。

「なんやとっ！日本が負けるわけないやろが！どアホ奴がっ！お前はほんでも日本軍人かっ！参ったんはアメリカやろが！ほいで戦争が終わったのやないけぇ！」

罵詈とビンタを食らった。更にその後が悪かった。取り巻きの古兵らに号令した。

「おい！。このドアホ奴、皆でいてまえ！」

もともと私刑が公認なのが軍隊だ。それが命令となると弱肉の見本の僕はふくろ叩きにされた。顔はふくろうのように腫れ上がり前歯が一本欠けた。

昭和二十年八月ごろ、北シナ（現中国北部地方）は蒸し暑い日が続いていた。僕の部隊は形ばかりの討伐作戦で田舎廻りをしていた。無線の故障もあって外部との接触が途絶え袋を被らされた猫になっていた。そこへ突如終戦の噂が独り歩きして伝えられたのだ。

日ならずしてシナ全土の日本軍隊は在留邦人も併せてそれぞれ最寄りの港に集められることになった。部隊も汽車不在の鉄道に沿って長旅の行軍を続け、たどり着いた処が北シナの塘沽港だった。それまで塘沽なんて名さえ知らなかった。判ったのは、ここに上陸してきた米軍海兵隊が旧日本紡績の倉庫を俄か捕虜収容所に仕立てて、旧日本軍人を抛り込んでいたということだった。

敗戦後……捕虜収容所に落ち着いて何ケ月か経った。晩い秋の風が心寂しく吹き荒れていた。消えたはずの大日本帝国陸軍の軍隊生活と軍律がまた甦っていた。何ひとつ情報らしいものは伝わらないまま僕はここでも制裁れ続けた。ただ宿舎清掃、食事手配、洗濯、汚物廃棄など、動いている間はやられずに済んだ。

「田代！お前、すぐ将校室へ来いっと！」兵士用の厠（便所）で使役についていた僕に命令？が伝えられた。上官が馬の骨であってもその命令は絶対であり、僕の答は、常に「諾」であらねばならなかった。

（戦争は敗戦った。負けたんだ。だから軍隊もなくなったんだ。上官なんていないんだぞ）意識は囁いていた。が（早く行かんと制裁れるぞ）の声が僕のいじけきった脳を支配していた。

「わっかりました！」清掃道具を抛り捨て駈けた。廊下は暗く長く僕の気は重たい。

「田代二等兵、参りました」将校室に入ると、のらりくらりと雑巾掛けしていた当番兵が大げさに鼻を押さえた。先刻まで肥担桶を担いでいたんだ。手を洗ったくらいでは服と身体に沁み込んだ臭気は抜けないのだろう。

殴られる覚悟をしていた僕だったが、後は八木（元）少尉殿一人なのを見て心が緩んだ。八木さんは兵から叩き上げた部隊最年長の職業軍人だった。徴兵された初年兵でアゴだけ達者だった僕は「文句じゃ」と古兵どもの格好の餌食になっていた。殴り倒され血だらけでのびていた僕を見て諭してくれたのが八木さんだった。

「お前な、軍隊ちゅうところは何ごとも辛抱やど。軍隊はな、鬼も居るが仏も居るんや。それにな、生きとればまたええことあるしのぉ……」

信仰を持たぬ僕だったが仏様が庇ってくれたと感じた。それから僕の面の皮も厚くなり、馬糞入りの味噌汁を飲んでも生き延びてこれた。

「お前、上海に永いことといたんやし、英語も相当いけるのやろ」

人事係だった八木さんさんは僕の履歴を覚えている。

「多少ならであります」

偏狭なお上は英語を敵性語と認定し使用を禁じていた。

「そう遠慮せんでもええよ」八木さんは目を細めた。

（英語がなんで出てくるのだろう？）僕は掠めた疑問を噛み殺した。

「今居る塘沽はな、天津、北京を結ぶ北シナ最大の港やそうや。ここの米軍がな、日本の兵隊と在留邦人の内地送還

を始めてるんやて」京都弁が続いた。八木さんはなにか本部で仕入れてきたらしい。米軍と旧日本軍との折衝を言葉の壁が大きく阻んでいる。それで米軍が英語の話せる日本人を求めているのだと。

「お前な、通訳の募集に行ってこいや。オレな、大隊本部で言われたんや。誰かええの居らへんかって。学校卒た将校は何ぼでも居るというたかてアホばかしや。誰も英語ようしゃべれんし字ぃかて読めへん。お前、アメリカの学校卒てるのやし、オレな、お前しかないと思うたんや」

「そんな……自分はアメリカの学校など卒ていないであります」

何故話がそのように飛躍でいったのだろう？僕は八木さんの下にいて帰国の時を待っていたい、と断りを入れたのだが。

――英国人が創り上げた上海租界は、数十ケ国の人種、八百万人がブチまけられた玩具の箱だった。異種の風習と文化と猥雑、外国人の優越感とシナ人の劣等感が溶け合っていた。

父は若き日、上海に渡って事業の成功を得ていた。その上海に僕は生まれ育ち、幼いころは英国系の幼稚園で英、米人に囲まれ、家庭ではシナの阿媽（女中）を使い不自由を知らずに二十年育った。だから僕にとっての上海は人の恐れる魔都ではなく故郷でしかない。だが祖国日本は軍国主義に支配され、満州、上海、シナ事変と戦争は広がり続け、大国の驕りに負け、ついに世界を相手にしてしまった。

内地に渡り大学に進学したが、そこで見たものは言論、行動、思想などの締め付けに脅える無力な国民の姿だった。さらに食料、物資の統制で国民は日々飢えに喘いでいた。海ひとつ超えた上海には自由と全てがあった。危険を侵して幾度となく帰省した。

厚い天津絨毯が敷かれた部屋に、ジャズが響き、薫り高いコーヒーが滾っていた。

僕の好みのアメリカ煙草、キャメルはマホガニーの棚に梱包で積まれていた。高級煙草は英国製のウエストミンスター、スリーキャッスルで占められていた英領植民地上海だ。

「アキラ！お前ようそんな臭いアメ煙草ばかり吸うなぁ」

悪友にからかわれても、

「るせぇんだよ」顎をしゃくった。ベージュの駱駝が箱に浮んだキャメル、そのヴァージニア葉混の煙は僕にはたまらなかった。それは僕にとって上海の香りそのものだった。

この頃、内地でも上海でも殆どの日本の成、壮年男子は町から姿を消していた。健やかさと精力を持て余した身体を国立大の金ボタンに包んだ僕は、寄ってくる女の子には手を出してやるのが嗜みだと思い上がっていた。

僕は休暇を勝手に延長し遊び続けた。それは必然的に教練の課程をサボリ続けたことになった。この自らがつくり出した錆が僕の運命を大きく左右することになるとは思いもしなかった。学校に配属された将校は僕の成績簿の軍人適性欄に、将校絶対不適と殴り書きして唾を吐き棄てていたに違いない。なぜなら学友の殆どは陸、海軍将校に飛び級の恩典に浴して入隊していったのに、僕にはなにひとつよい報せは届いてこなかったのだから――

「お前の履歴書な、本部にええかげんに書いて出して来たんや。ほれになぁ。ここに居ったらいつ還れるか判らへんやろ」八木さんは溜め息をついた。

「英語はとにかく……」それよりも僕は頭の痛い心配をしていた。

「自分は拾った雑誌を読もうとしたのでありますが、日本語も判らなくなっているのであります」

僕は痴呆症になったのかと苦にしていた。

「何でや？字ぃ忘れたと言うんか？」

「いいえ、字は読めるのであります。が、意味が頭にはいらないのであります」

「ハッハッ、それで本が読めんと言うんか？」八木さんは嬉しそうだった。

「読めても何が書いてあるかが解らないのであります。頭を叩かれすぎてアホになっていると思うのであります」

「ハハッ、そらぁ別におかしないで」八木さんはまだ笑っていた。

「なぜでありますか？」

「そらぁ軍隊ボケちゅうんや。誰でも皆一度はなるんや。こいつは治りにくいでぇ」

「はぁ？治らないのでありますか？」僕は不安になった。

「治ることは治るのやが、ただ、ちょっと特別な薬が要るわなぁ」

「なんという薬でありますか？」

「ひにち薬という奴ちゃで」

八木さんは自分のしゃれに身体を揺すり粗末な木箱の上に置いていた肘を滑らせた。床に紙箱が落ち写真がこぼれた。軍装の八木さんと女性、女の子が中に挟まれている。女性は奥さんだろう。出陣を前にした暖かい家庭が滲んでいた。

「娘なんや」写真を拾い上げて呟いた。苦笑いのまなざしは父親の目でしかなかった。

「でもわしなぁ。お前がうまいことやってくれたら故郷に帰れるかいなぁと。ここに居たかて、いつ還れるか判らへんやろ。国を出てもう八年や。わしも帰りたいでぇ。田代！頼むわ」八木さんは声を落とした。

僕にはどうなるのかさっぱり判らない。でも八木さんの

頼みとなれば断り切れない。僕にも今は引き揚げた父の居る日本への帰心が湧きあがってきた。

「自分は何をすればよいのでありますか？」

「明日、試験が向こうであるんやて」アゴの先は占領軍兵舎の方角を指していた。

「自分は試験に自信もありませんし、そんな所に行っただけでも古兵殿に怒られるだけだと考えるのでありますが？」それが一番苦になっていた。

「大事ないよ。大隊長殿も諒解しておられるんや」渡されたのは隣接する米軍兵舎内の試験場の図面だった。筆記具持参と註がある。

（筆記具なんて……そんなもの何処にあるんだ？）僕は目で笑ったら、八木さんは黙って手を差し出した。その手のひらにちびた鉛筆が載せられていた。

（このオレが英語の試験か？）とにかく一瞬であっても束縛されることなく一人で外に出られるなんて夢のような話に戸惑っていた。

米軍発行の外出証を米軍歩哨に示し、鉄条網に囲まれた収容所を出た。振り返ると元は倉庫だった建物は内も外観も暗く汚い。

表は晩秋の陽に公孫樹が眩いほど明るかった。僕は初めて娑婆の空気がどれだけおいしいものか判った。塘沽の町は遠くに霞んでいたが、大通りは星条旗と米軍兵が溢れていた。白人、黒人の兵士が相乗りしたジープという名の小型自動車が珍しい。見たこともない装甲車、運搬車などの多彩な機動力が町をうずめていた。

目的の米軍の基地は向かいの高台にあった。兵舎の入り口にも自動小銃を抱えた米軍歩哨が立っていた。門柱の隅に元日本人小学校の名札がまだ架けられている。ここは元日本人学校だったんだ。先立って元日本将校殿の一団が入っていった。受験に来たのだろう。階級章を毟られても元軍隊での階級は軍服、靴、帽など外見の良し悪しで判断できる。薄汚い軍服の僕は下級兵士だとすぐ判っただろうが、将校の後ろに付いてすたすたと歩いたからか米軍歩哨は別に注意を払おうともしない。彼らは降服した日本軍は猫よりも温和しく鼠より臆病なのを知っているらしい。

試験場に校舎の一部が宛てられていた。表に【EXAMINATION ROOM しけんば】と書かれた紙が張られている。ちょっと変だが、これは米軍所属の日系二世の手になる【試験場】の意であろう。

入り口付近に立ち停まった僕は「邪魔だっ！どかんかっ！」と怒鳴られ殴られた。見たこともない将校服の男だった。慌てて敬礼して裏へ隠れた。横窓から覗くと試験場には三十人ほど入ったようだ。みな厚手のサージ服の元将校どもばかりだ。互いに敬礼したり挨拶したりしている。兵隊は一人もいない。僕は自分の汚い兵隊服が恥ずかしく思えた。僕は冬近い今でも着たきりの半袖夏服だった。薄くなった生地は絽のように透いている。匂いを嗅げば臭いだろう。そんな乞食兵士が試験を受けに来るはずがないのだ。やはりここは僕の来るところではなかった。

「頼むで」といわれた八木さんに申し訳ないが『お前はっ！舐めとるんか！』と拳を振り上げた鬼の古兵らを思うと足が萎えた。それに部屋に入れば将校らに場違いだとド突かれて摘まみ出されるのがオチだろう。外に将校の姿が消えていた。僕はまた入り口付近に来てうろうろしていた。

入り口の扉が閉められた。もう中では用紙が配られている。

（これでいいんだ）と割り切れた。逃げるなら早い方がいい。が、皆、試験場に残って居るのに僕一人だけどうやってここから出よう？全部一緒なら歩哨も通すだろうが。無意識に『将校に試験を止められた』などという浅ましい嘘と言い訳を考えていた。

入隊前、日本の軍隊は戦友愛で築かれた皇軍であると教えられていたが、軍隊に放り込まれた僕の理解した限りでは、ただの武器を備えた暴力集団だった。

娑婆ではありきたりの人間を、容易に人殺しにさせ、その逆に命を棄てさせるにはリンチも一つの手段だったかもしれない。生命の不安、命令の徹底、抑圧された生活、蓄積されたストレスの解決に、虐めが自然発生したのかもしれない。しかし対象にされた下級兵士はたまったものではない。

与えられたものは生命を維持するだけの貧弱な食事と、員数という名の割り当て備品だけだった。それらの破損、紛失には血と涙で償わされた。逃れるには、嘘をつくか泥棒するしかなかった。僕にとっては、どちらも命がけの必要悪だった。そして上下の差別には天と地の隔たりがあった。

（早く戻らないといかん！）焦っても、ここは日本ではない、シナの港、米軍基地の内だ。僕のいる場所はいやでもあの収容所しかない。あたりを見回しても散在している米軍兵士らは僕の存在に無関心だ。建物、廊下の蔭を縫って横走りに動いた。二十二歳の若さが蟹か、忍者のように素早く軽快に動いたつもりだったのだが……。

僕の体は浮き上がり身動きが取れなくなっていた。つまずいたのではない。

「ダン　ムー」――動くな！　後ろから低い声が響いた。

顔をずらして振り向くと、団扇のような手とド太い腕が僕の首筋をつかんでいた。腕の主を見上げると巨大な身体を米軍服に包んだ黒人兵士だった。顰めた眉が不審な奴だと詰っているようだ。怯えきった僕の眼は焦点が定まらな

い。
「オウ、ヘルプミイ！」僕の口は咄嗟に英語を口走っていた。いや、英語には間違いなかったが、それは僕が子供の頃しゃべったアメリカの幼児言葉だった。標準の英語が浮んでこなかった。
「タスケテオクレヨ」また俗語の英語を吐き出してしまった。反射的に黒人兵士の口が半開きになっていた。が、眼を僕に据えたまま一言も発しない。
（判らないのかな？）昨日までの敵に怖くなった僕は、
「ボカァ何もしていないぜ。ボカァね、帰らなきゃいけないんだからネ！」無意識にスラングを連発して哀願した。口は酸素が欠けた魚のように喘いだ。
兵士の力が少し弱くなった。手を首からそっと離してくれたので僕はそのまま身体の向きを変えた。顔が見えなかった。僕の頭は彼の顎の下にあった。上海で大柄な外人には慣れていたはずの僕も（こいつは化け物だ）と瞬間的に背筋が冷えた。
「お前は英語を喋れるのか？」上から黒人特有のかすれた声が落ちてきた。
（化け物が口を開いた。僕の言葉をきいていたんだ！）
「少しだったら話せます」この兵士には少なくとも悪意は感じられなかったから、僕は落ち着いてきた。
「お前は将校でもないのに、なぜ英語が判るのか？」彼は眼を僕の軍帽から軍靴まで走らせている。僕が将校ではなく、下級兵士だとすぐ解ったのだろう。まるで将校だけが英語を理解できると思っているかの口ぶりだ。
（兵士はみな英語が判らないと思っているのか？）とも訊けなかった。
「なぜって、僕は英語なら前から知っているんです」
「なぜだ？」
「私は上海で英国の幼稚園にいましたから」思いつくまま告げた。
「お前は一体何者なんだ？」また質問が浴びせられた。
（まだ僕を怪しい野郎だ、と思っているんだな？ヤバイ！）僕はキオツケの姿勢をとって敬礼した。卑屈といわれてもこれが暴力予防の特効薬だと経験が僕に教えている。
「私は陸軍二等兵、いいえ、元二等兵で、名前はアキラ・タシロであります。怪しいものではない、のであります。U・S・A将校、殿」僕はサーの敬称を使った。
自分が捕まえた日本兵から「将校殿！」と呼ばれた黒人の顔に戸惑いの色が浮かんだ。
「お前はなぜここにいるのだ？まさか試験に来たのではないだろう？」
「いいえ、です、いや、はい、です。試験を受けにきた、いや受けて来いと言われて来たのであります」文法が乱れている。しばらく英語を話したことがなかった。言葉は使

わないと消えていくのかと焦った。
「ではなぜ試験場に入らずに逃げていくのかね？」言葉が少し優しくなっていた。だが（何か悪いことをしにきたのではないのか？）と疑わしそうな目付きが咎めている。
「いいえ、逃げたのではありません。私ははじめから試験には興味を持っていないのであります」僕は直立不動の姿勢で標準英語（キングズ・イングリッシュ）に戻っていた。疎めた首を伸ばし「将校殿！」を加えた。僕は敬語を連発した。
「まぁ落ち着けよ！」黒人兵士はおし留めるように両手を拡げて僕に坐れと示した。しかし彼自身はうろうろして坐ろうともしない。
（落ち着くのは貴方のほうですよ）僕も言いたかった。
僕はあらためて彼の巨体を見上げた。身長は二メートルをはるかに超えている。それを支える靴は五十センチほど。黒い顔の中に目と歯だけがやけに白い。その眸の中に平和な温かさを感じた僕の両肩から力が抜けた。いや身体の力が抜けた。
「お前はまだ若いな。その顔のあざと傷はなんだ？　なにか悪いことをして殴られたのか？　それにお前は汚いし臭いな。着ている服は夏服ではないのか？」彼の質問が変った。
垢がこびりついた首筋、継ぎ接ぎで汗と脂の染み込んだ服、物乞い同然の僕の風采を見て、笑いをこらえているようだ。
（好きで汚くしているわけじゃない。自分だって嫌になっているのに、返事が出来るか）
悔しくて黙り込んだ僕を見て、彼は椅子を引きずり出し向かい合うように座った。二百キロ近い体重に椅子は悲鳴を上げた。
「オレは悪いことを訊いたようだな。オレはお前が言うような将校ではない。上級曹長ハンクと言うのだ」分厚い唇が語った。幾筋かの（横くの字）が刻まれた腕章を叩いて、下士官でも上級なのだぞと誇らしげに示した。
僕にも判っていた。傍らを通る米兵達の殆どが彼に敬礼していたから。
「ではなぜお前は試験を受けようとしなかったのかね？」まだ訊いてくる。
「私は階級の低い兵士であります。その私がもし試験に受かり通訳になったとしても、私の言うことを誰も聴くわけがないのであります。まして命令することなど、とてもできはしないのであります。恐らく私は命令する前に殴り殺されてしまうでしょう」
僕はゆっくり発音した。その間に脳の奥に永く蔵い込んでいた英語を模索していた。次第に豊富になった語彙は明確に発音され、ハンクを魂消させたようだ。逆にハンクは

黙り込んでしまった。彼の沈黙を諒解と受け取った僕は饒舌になった。

「私は元々臆病な人間であります。それでも戦場に赴くのは国民の義務であり運命だからと諦めていたのであります。日本の軍隊は狂信的に階級差別が厳しく、下級兵士には毎日が殺されるほどの制裁戦争が続けられたのであります。自殺したものも少なくなかった……のであります」

座ってもなお、山のように聳えるハンクを見上げたが真剣な顔で聴いてくれていた。

「その私でも負けるはずがないと聞かされていた自分の国の敗戦を知って悲しく思えたのであります。それでいて、もう殴られずにすむ、これでよかったのかと矛盾した心に動転しているのであります。戦いで命を捨てるのなら兵士でも軍人である以上諦めるのでありますが、戦いが終わった今になると、もう昔の階級差別で私刑（リンチ）されたくはないのであります」

試験から逃げた理由を演説してやった。野蛮な敵と信じこんでいた日本兵が率直に英語で語ったことで、これまでの日本兵に対する偏見が少し薄れてきたはずだ。

「日本軍隊は階級差別が激しくリンチもひどいと言うが、それはアメリカでもどこの国の軍隊でも同じだよ。オレ達黒人はその上、人種差別さえも味わっているのさ。それよりもオレに判らないことがある。日本が負けて戦争は終わったのは確かなことなのだよ。それなのになぜ軍にまだ階級があると言うのだね？」

（これは駄目だ！彼には僕の告げたことがまるで理解されていない）

「オレと彼が数万の日本軍の中から探していたのはお前のような兵士だったんだ！お前はオレが見つけたんだ」

なにか勘違いしているのか、ハンクが場違いなことを口走った。

「オレと彼って？誰のことですか？私には貴方の言うことが判らないのであります」

「お前には、判らなくてもよいのだ」

「よくはないのであります。繰り返します。私がここで働かされ、上官に命令するようなことになればどんな制裁が待ち受けているか、貴方には判って頂けないのでありますか？」

言い知れぬ恐怖を感じて僕は口を閉ざした。

（どうしたらこの男を説き伏せることが……）眼を遠くに走らせた僕にすばらしい智慧が閃いた。悪戯小僧のような微笑が浮かんだ。

「ハンク曹長殿！」あらたまって告げた。

「何だ？」

「ご覧ください。あちらの試験はもう終わったようであります」

試験場の窓越しにペンを止めている将校達が見えていた。

「そうだよ。試験はもう終わったのだよ」

「残念ですが私は試験を受けそこねたようであります。ですからもう帰ってもよろしいのでありますか？」安堵した顔になって伺いをたてた。

「お前はそんなに慌てて帰らなくてもよい。試験のことなど心配しなくてもよいのだ」

ハンクも悪戯小僧のように真っ白な歯を見せた。

「もう合格者は決めた、いや決まったのだよ」

「何のことでありますか？私には貴方の言うことが判らないのであります」

「実はな、主任試験官はこのオレなのだよ」ハンクは人差し指を曲げ、自分の壁のような胸板をトントン叩いた。

「はぁ？」僕はまた混乱してきた。

「もっともオレは先にそれを言うのを忘れていたがね」ハンクが弁解らしいものを加えた。

「ご冗談でしょう。あなたは先刻からずっとここにいたではありませんか」

「説明を加えておこう。オレ達は沖縄から転じた海兵隊なのだ。地域の最高責任者はスミス中佐である。彼は北支の日本軍捕虜、在留民百万を本国送還せよとの命を受けた。輸送手段はランディング・シップ・タンク、略してLST（エルエスティ）だ。この船は敵前上陸用に製（つく）られたもので上陸には鋼板が倒れて開き戦車を押し出す。武装兵員なら千五百人は運べる。だが毎週二隻がやっとだ。あとの手配は予測もつかない。そこへ送還される日本人が列車で毎日運ばれてくる。宿舎も不足する。建設、輸送の使役には人が足りない。日本人には言葉が通じない。わが軍には日系二世もいるが彼等は日本語を話せても読み書きはほとんど駄目なのだ。とにかくオレ達は困っているのだ。で、米日間の通訳、翻訳者を日本軍捕虜の中から募集することにしたのだ」

船や宿舎の話は初めてだが、他は八木さんに聞かされていたので別に驚かない。

「よい方法を選ばれたと思います。何万という軍隊がいるので十分可能でしょう」

僕はあの暗い倉庫の群れに密集した日本軍隊と将校たちを思い浮かべていた。

「オレたちもそれが名案に思ったのだが、うまくいかないのだ」

ハンクは可笑しいのか笑い出し、「なぜだかお前に判るかね？」と質問に変わった。

「自分にはさっぱり解らないのであります」

「それはな、募集に応じてくる奴は将校ばかりなのだ。なに、彼等は外見で判る。昨日までオレ達の命を狙った日本の将校どもを好かぬのは士官学校（ウエストポイント）出のエリート、スミス中佐もオレも変らないのさ。オレと彼とは硫黄島から共に戦

ってきた。二人の間には年も階級も肌の色の違いもないんだ。それでオレが『こればかりはいかにスミス中佐殿でも無理でしょうな』と皮肉ってやった。するとスミスが『お前はオレよりよく世間を知っているからな、これからお前がやってくれ。それが早く決まればオレはますますお前を気に入るだろうぜ！』と弱音を吐いた。『冗談じゃない！中佐殿が決められないものをなんでオレが……』するとスミスが命令口調に変った。『エー…気を付け！地区司令官であるスミス海兵隊中佐は、ハンク海兵隊上級曹長を募集の主任試験官に任命する！これは命令である！』オレだって、クソジャップの、オウ、ソリー、日本将校の奴等と仕事ができるかって。と言っても万が一、兵隊の中で頭と性質のいい奴が見つかろうもんなら隊長殿も喜ぶだろうしオレも鼻が高いというものだが」ハンクはぼやきをいれたが僕は嫌な予感がしてきた。

「オレは問題を試験場に置いて来ていたが、成績なんて関係ないのさ、将校なら必ず中佐殿がペケだ。今日も来ていたのは元将校どもばかりだろう。オレも頭が痛いが、試験官となれば威厳ある存在で軽々しく現れるものではないのだ。オレは後から悠々と教室に入って行くことにした。で、オレは廊下の隅で腰をおろし試験場に眼だけ走らせていたのさ。そこへ現れたのがお前だったというわけさ」

椅子が軋んだ。ハンクが巨体を起したのだ。思わず僕も釣られたように立ち上がった。

ハンクは人差し指を伸ばして僕に向けた。

「主任試験官であるハンク上級曹長はここにお前、アキラ・タシロが米軍の試験に合格したことを宣する！」

僕がハンクに腕を執られるようにして連れて行かれた広間は米軍の本部だった。何十人かの米軍兵たちが机を並べていた。それぞれタイプを打ちペンや受話器を手にしている。奥には星条旗が棹を砲弾の薬莢に挿して飾られていた。旗の前の大きなデスクに年若い将校が座っていた。

「スミス中佐殿である」

ハンクに告げられる前に僕は雰囲気で察知していた。僕はここでも直立不動の姿勢をくずしていなかった。

ハンクは中佐に向かって敬語を交えてはいたが、両足を開いた緩やかな姿勢で僕を連れてきた経緯を報告していた。中佐といえば上級曹長でさえ問題にならない神様なのに、ハンクの無礼を咎めるでもなく微笑みながら頷いている。

「この兵を見つけてきたのは自分であります。あとは中佐殿から直接に聞いてください」腰に手を当て反り返った。（上官に対し態度のデカイ部下だな。これが日本軍隊なら袋叩きの半殺しだぞ。でも誰がこのデカい奴を叩けるのだろ？）問答を聴いていた僕に余裕が少しあった。

中佐は明るい笑顔を僕に向けた。短く揃えられた金髪、透き通った碧眼は穏やかで知性を湛えているようだった。

僕は一揖して目を伏せた。乱雑なデスクの上に駱駝が描かれた煙草の箱が無造作に放り出されている。スミスの指に軽く挿まれた駱駝からは、ゆるやかに紫煙が流れている。懐かしいヴァージニア葉の甘い香りだった。

（オレが昔喫んでいたキャメルだ！）引き据えられた僕はその煙を無意識に吸い込んで大きく息をはいていた。なつかしい上海の郷愁がそこにあった。

中佐の目は手元に引き出された書類に注がれていた。八木さんが認めた僕の履歴書らしい。横の英語は二世がいい加減に書き添えたのだろう。

「お前は国立の大学を卒業しているというのに、なぜ将校に成らなかったのかね？」スミスはいきなり早口の英語で訊ねてきた。

「私は将校にならなかったのではありません。本心は将校に成りたかったのであります。だから学生時代、海軍にも陸軍にも志望したのであります。しかし成れなかったので、徴兵された後も懲りずに志願したのであります。それでも成れなかったのであります」

「なぜ成れなかったのだね？」スミスの表情は少し穏やかになっていた。

「多分私の性質が悪いと認定されて将校試験に落とされたのだと思うのであります。それから私は軍隊も将校も嫌いになったのであります。私はそのようにケチでダメな人間であります。それからその経歴書は私が書いたものではありません。以上間違いありません」

僕は直立の姿勢をとり中佐の襟に光る銀色の徽章に吸い込まれながら淡々と告げた。スミスは年齢、卒業校、兵になるまでの経歴などを改めて訊ねた。

上海で生まれ、相次ぐ戦争に親しい外国の友と皆別れ、大戦に故郷を捨てた後、大学を卒た。直ぐ兵に徴られ北シナ（現中国）で部隊は田舎廻りをしていた、という僕の履歴は単純過ぎたか。後ろでハンク曹長は園児の入園に付き添った父親のように目を据えていた。

質問を止めてスミスは突然僕に語りかけた。

「オレにもな、故郷にお前の年くらいの弟がおるのだ。オレが太平洋戦線に発つとき『なんで殺し合いなんかするんだ！』と泣いていた。だがな、戦争はな、お互いに国のためには仕方がないんだ。お前にはこれまでに見た日本将校達の卑屈さに隠れた傲慢さがまるでない。裕福な家庭、自由を謳歌していた学生。急激に墜ちた軍隊生活に自分を見失っているようだが、まだ正直な人間らしさは残されている」

スミスが出し抜けに立ち上がった。左手が前にさし出された。僕は殴られるのかと無意識に後ずさっていた。が、スミスのその手はデスクのキャメルの箱を掴んでいた。空

いた右手の親指で箱の底をピンと弾くと、タバコが一本だけ器用に箱から飛び出した。

僕の前にそのタバコの箱が突き出された。僕はスミスの目を見てタバコを見た。僕には判らない。スミスがまた箱を突き出す。タバコは箱から飛び出したままだ。同じことを繰り返している。一体どうなっているのだ。思わず振り返るとハンクが親指を立てて顎を縦に振っていた。（ゴウ！ゴウ！）口笛でも吹くように唇が尖っていた。

（タバコをとれ！中佐殿がお前を気にいっているのだぞ）と言っているように見えた。

僕は礼を言って恐る恐るキャメルを手に取った。カチッと軽快な音が鳴って火が差し出された。それは中佐殿の掌に載ったジポーのライターだった。この下級兵士の、自分に対して、だった。

僕はキャメルを咥えてその煙を胸一杯吸い込んだ。

あ・ぁ・ぁ・あの懐かしい上海の香りがふくらんで来る。

「どうだね？アキラ！やってくれるかね？」

アメリカ将校の一言が胸に突き刺さった。なんだ。たかが煙草一本くらいで。なぜだろう。ジーンと胸が熱くなってきた。鼻の奥に突き上げてくる。

（あっ！オレはどうしたんだ？こんなところで……みっともないことはしたくないな。オレは、オレはいくら殴られても泣いたことはなかったのに。涙を見せるなんてそんな恥ずかしいことを……オレは絶対にそんな男ではないんだ）

僕は唇を噛みしめ上を向き、横を向き、また上を向いた。火のついたキャメルが手元で震えていた。時が止まっていた。

「どうだい？やってくれんかね？」またスミスが首を傾げて柔らかく訊ねた。

「ハイ！」掠れた声が自然に出た。

スミスはハンクを振り向き、右腕を曲げ親指を立てた。

「決まったぜ！」と笑って告げた。ハンクも笑って頷いていた。スミスは一言加えてくれた。

「タシロに危害を加えないよう全日本軍に通達しておけ」

現金な僕は落ち着いてきた。遠く立ち並ぶ将校に目をやって「あの人達は？」と呟いた。

「オレもお前のように正直に言おう。オレは日本の将校は皆嫌いなのだよ」スミスは吐き棄てた口を大きく開けて笑い出した。と、横からハンクが要らぬ口を挟んだ。

「ここに居る兵隊共はな、日本だろうがアメリカだろうが誰も将校を好きな奴はいねぇんだぜ。嘘じゃないぜ」

スミス中佐はしばらくハンク曹長を睨んでいたが、一息すると二人は声を併せたように笑い出した。割れるような笑い声だった。

柱時計のメロディが五時を告げた。部屋の兵達が立ち上がって一斉に星条旗に向かい敬礼をしたと思うと、急にバラバラになってスミスのデスクの前を囲んだ。命令がなくとも彼等は業務を終えることができるのだなと理解することができた。

集まった兵たちが笑い出した。聞き耳を立てていたのだろう。笑いが伝わっていった。部屋中の兵がどっと声をあげた。「オレたちゃあ、将校なんて大嫌いさぁ。嘘じゃないぜ」兵たちの割れるような合唱に変わって行った。

作家集団「塊」KAIメンバー

●飯田　章
一九三五　東京生まれ
七四「迪子とその夫」で群像新人賞受賞
「あしたの熱に身もほそり」「電線」「向島へ」「墓案内人」など多数

●五十嵐勉
一九四九　山梨県生まれ
七九『流謫の島』で群像新人長編小説賞受賞
『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』（健友館文学賞）「ノンチャン、NONGCHAN」、『微笑みの国タイ』など

●河林　満
一九五〇　福島県生まれ
中上健次に師事
九〇「渇水」文学界新人賞受賞・芥川賞候補
他に「穀雨」「黒い水」「年譜」「海からの光」など

●八覚正大
一九五二　東京生まれ
九二「十二階」で新潮新人賞受賞
ルポ『夜行の時計』・「父のフレーム」「カウンター」など

●大高雅博
一九五四　石川県生まれ
八〇「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

●小沢美智恵
一九五四　茨城県生まれ
九三「妹たち」で川又新人賞受賞
九五評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

●小浜清志
一九五〇　沖縄県由布島生まれ
八七作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める。
八八「風の河」で第66回文学界新人賞。
「消える島」および「後生橋」で芥川賞候補。

銀華文学賞特別賞

午前の死

三紀村　艸（そう）

［光と影の記憶］

二十三歳の僕は、五十歳の男のように未来を見切っていた。

乾いた意識は、生きることはなにほどのこともないと告げてはいたが、炎天下の夏の暑さがあきらめ静まり返って平衡を保っている僕の精神を、次第に撹拌し苛立たせた。

突き上げるような衝動を身体の内部で予感するが、それは予感のまま線香花火のように消え去る。

狂気は、ときおり、なんの前触れもなく姿を現わし、脳髄から跳び出そうと屈伸をしていたが、日常の空気を吸い込むたびに圧しつぶされ、退却した。

突堤はどこまでも続いているように思われた。

空から間断なく降りしきる光は、海面との狭間で乱反射し、そのため沖は白光を放って見えなかった。

風はなく、海は平静をよそおっている。

雲は水平線の上でうなだれ、押し黙っていた。

時間は、いつか停止していて、動き出すそぶりもなかった。

突堤の先端まで歩く。子供がひとり釣り糸を垂れている。

「なにか、釣れるのかい？」

小さな丸まった背中に声をかけ、下をのぞき込む。

「餌がついていないよ」

振り返り白い歯を見せて男の子が笑う。

僕は曖昧な笑みを浮かべ、細い肩に手を置いた。

「お兄ちゃん、どこから来たの？」

「うん？　海の向こうだよ。ほら、うっすらと陸地が見えるだろ、あそこにある街から来たんだよ」

「ふ～ん。人がたくさん住んでいるところだよね」

「ああ、男も女もいっぱいいて、みんなお面をかぶって歩いている」

「お面？　アハハハッ」

小学校四年になる男の子は、身体をよじらせて笑った。

沈んだ糸の先は見えない。波が小さく砕け、白い泡が咲いて崩れた。

太陽が、白色から赤に変わっていく。やがて、ただれて、雲間に隠れた。

民宿の二階の部屋に戻ると、仰向けに寝転がった。隣の部屋から高校野球の試合が終わったのか、サイレンの音が高く押し出すように鳴りひびき、やがて獣の低いうなりに変わると、静まった。けばだった畳の上で、火照った身体を持て余し、ごろりと一回転させる。両手両足を大きくひろげて大の字になる。眼を閉じると、突堤で釣り糸を垂れている男の子の姿が浮かんだ。

陽が落ち、薄暗くなった部屋の明かりを点ける。階下で人の声がする。突如女の悲鳴があがり、「早く救急車を呼べ！」と男の殺気だった声が聞こえた。なにごとかと階段を駆け降りる。主人夫婦が走り出していた。

「大変だ！　子供が海に落ちた！」

老人が叫ぶ。僕は下駄をつっかけ玄関を走り出る。

波の音が聞こえる……砂浜に打ちあげられた無数の藻……粘りつく風。

暗闇の向こうから次々と押し寄せる波……砂浜でしぶきをあげ、その勢いで競りあがる海水。

黒く固まった人の群れ……子供の名前を呼び続ける母親の声。

立ちあがった黒い人の群れは、小さな身体を担ぐと石段を上がって行く。

救急車のサイレンの音……点滅し独楽のように回転する赤い炎。

［窓もない暗い六畳一間の長屋で、母と僕、そして入退院を繰り返す父、家族三人は川の字になって、昼を過ぎても薄い敷き布団に横たわっていた。暑苦しさは感じなかった。そんなエネルギーもなかった。丸一日半なにも食べていなかった。僕は起きあがり台所の水を飲むと外へ出た。隣の家の前の朝顔が、紫色の花を咲かせている。太陽は中天にあり、降りそそぐ灼熱の光は肌にしみ入り、じわっと干からびた内臓を熱した。視神経は麻痺して、眼に映る建物や大人たちは、陽炎のように揺らめいて見えた。汗は吹き出ず、油のようなものがぬらぬらと皮膚の上を覆っていた。

僕は日盛りのなかを歩く。暑さが気持ちよかった。いや暑さを感じているのではない、頭の芯がぼうっとして気持ちよいのだ。大きな屋敷の白い壁に背をもたせ座り込む。脂汗が流れてきた。空を見あげた。真っ青な空。そして、意識が遠のいていった。

僕は赤い電球の下で横たわっていた。眼を開けると、大人たちが僕の顔をのぞき込んでいる。「可哀想に……」誰か女の人が言った。親戚のおばさんだ。空腹のため手がぶるぶると震え、歯がガチガチと鳴った。眼の前の温かい茶碗の飯を、震えながら呑み込んだ。「僕は死んでいたんだね」おばさんに言った。おばさんは涙を流しながら顔を左右に振り続けていた]

風が強かった。

砂塵が舞いあがり、散弾のように僕の顔を打つ。

透きとおった大気のため、はるか陸地を見通せた。その陸地を背景に、白いフェリーボートが現れる。陽を浴びてきらめく船体は、次第に大きさを増し、やがて、埠頭に接岸した。

海面が泡立ち、ひときわ高く汽笛が鳴る。白い航路を生み出しながら、フェリーボートは埠頭から遠ざかる。

七日間の夏休みのうち、五日間を小さな島でひとり過ごした僕は、また街に戻る。

*

光が錯乱していた。影は僕の足元で踊り狂っている。喉が渇き、僕は野犬のように舌を突き出して歩く。信号機の黄色がせわしげに瞬きを繰り返す。その黄色に向かって僕は全速力で走り出す。眼の中で光がはじけ、一瞬前方が闇になる。肩で大きく息をする。光は静まったが、空気はじりじりと僕の腕や顔を熱する。

扉を開ける。吊り下げられた鐘が鳴る。

ウエートレスが近づいてくる。白いミニスカート。目尻に皺を寄せている。

アイスコーヒーに氷が融け、汚らしく薄茶色になった中に数個の小さな欠片が浮き沈みしている。僕は唇を突き出し、ストローをくわえて吸う。グラスの底に、四個の透明な欠片が身を寄せ合ってしんとしている。

カタカタ鳴るクーラーの音。窓からの光が二の腕を焦がす。煙草を吸う。紫煙はゆらゆらと僕の頭上を越え、背後へ流れる。首をめぐらして周囲を見る。静物画のように貼り付いたウエートレスと客たち。固まっている。

扉近くのテーブルに、文庫本を片手に頭をかしげ考え込んでいる髪の長い女の子がいる。製造課の白井まりもだ。僕は立ちあがって行き、彼女の手から文庫本を取りあげた。

「哲学ノート、三木清?」

驚いたまりもが僕をにらみつける。大きな瞳に強い光がみなぎり、立ちあがるなり僕の手から文庫本をひったくると腰を揺らしてレジへ行った。

「ねえ、難しい本を読んでいるんだね」

まりもの背中がこわばり、そびやかした肩に力が入っている。腰まである長い髪が、歩調と呼応して揺れている。まるで巫女のようだ。

「失礼な人ねッ、あなたは」

「白井まりも。北海道の生まれかい?」

まりもが失笑する。八重歯がキラリと光る。

高台にある公園は街を見渡せた。

ベンチに座った僕とまりもの間に、彼女の大きな紙袋が境界線のように立ちはだかっている。霞んだ高層ビルの上に、入道雲が光をはらんでため息をついている。まりもは両手を膝の上に置き、澄んだ眼差しで一点を見つめている。

沈黙がひろがる。だが、居心地の悪い沈黙ではない。僕は白井まりもの横顔を見つめ、彼女は僕と同じ種類に属する人間だと悟った。突然、まりもが振り向き、僕の眼の奥をのぞき込んで、困ったように笑った。

K駅のホームは七時からの三十分、電車が停まるたびに若い男女であふれかえった。狭い階段は人で埋まり、木造の駅舎は傾いだように見える。がらんとした商店街を通り抜け、国道を渡る数百人の群れは、長蛇の列となって歩き続ける。原色の派手な衣服は乳白色の風景のなかで、場違いなほどに鮮やかだ。

僕はS電機のテレビ製造工場の資材課で働いている。工場へは電車に乗らず、毎朝六時に起き、十キロの距離を一時間かけて走って通っている。一、二、三、一、二、三と小さく二回息を吸って大きく吐き、そのリズムで身体を前屈みに前へ前へと進む。下半身から立ち昇ってくる疲労は身体の隅々にまで浸透していくが、ある一定時間が過ぎると、霧が晴れたように身体が軽くなる。僕はなにも考えずにだだっ広い国道をひた走りに走る。そして国道から市道に入り右へ曲がると、畑の真ん中に白い建物が三棟、朝日を浴びてきらきらと輝いている。

製造棟の一部は工事中のため白いテントシートで覆われている。トタン屋根の手狭な簡易の更衣室は、ごったがえす人の甲高い声で騒がしい。八時になると、各棟の壁面に取り付けられたスピーカーからラジオ体操の音楽が流れ出す。慌てて更衣室を出る作業員たち。五百人が軟体動物のように身体をくねらせ、青い空の下で飛び跳ね、汗が飛び散り、灰色の作業服から白い腹が覗く。

体操が終わると各班ごとに朝礼が行なわれる。黒いアスファルトの道から立ち昇る熱気、休めの足を右に左に置き

換え、うつむいたり空を見あげたり、小さくため息をついて班長の話が終わるのを待つ。暑さにうんざりしている班員たちを尻目に、班長はますます声を張りあげ訓辞を述べる。解散の号令とともにぞろぞろと各自の持ち場につく。始業のサイレンが鳴り、リフトがゆっくりと二階の製造課へS字型を描いて昇っていく。僕ら資材課は出庫の準備をし、テレビの各部品をリフトに乗せ、基盤などの重量あるものはベルトコンベアと昇降機を使って上に上げるのだ。

午前の作業の終了を告げるサイレンの音で、三百人を収容できる食堂はまたたくまにいっぱいになる。食事を終えると、次々とL字型に並んだ三棟の工場の前の運動場に人が集まり、ソフトボールやバレーボールが始まる。

運動場の端、金網に沿って作られた熱い芝生の上で、半袖を肩口までまくりあげ煙草を吸っている三人の長髪の男たちが、背中にびっしりと汗をにじませ懸命にボールを追っかけている女たちをからかっている。

資材課の薄暗い部品置場の真ん中を走っているベルトコンベアの上では、丸太のように縦に並んで三、四人の男たちが昼寝をしている。夏はひんやりして気持ちがよいのだ。午後の始業のサイレンが鳴っても、気持ちよさのあまり熟睡して起き出さない者がいる。小太りの赤ら顔の班長は、舌打ちしてベルトコンベアのスイッチを押す。突然動き出したベルトに驚き、慌てた作業員たちは転がるようにコンクリートの床の上に降り立つ。その滑稽な格好を見て、班長はさも愉快そうに腹を抱えて笑うのだった。

四百人中三百人が女性を占める製造課の平均年齢は十九歳である。そのなかには十六歳で同棲しているというませた少女もいた。

二十一歳の白井まりもは、十数本ある製造ラインのひとつをまかされている。部品の不足、休暇者の代替要員の確保など、ラインを止めることなくスムーズに流れるよう管理をするのだ。

食堂でまりもを見かけた。背中を丸め、下を向いて歩いている。僕は近寄っていき、彼女の肩を叩いた。

その日の夜、僕はT駅から吐き出され呑まれる大量の乗降客に注意を払いながら、彼女を待った。まりもは、きっちり三十分遅れて改札口に姿を現わした。

「哲学ノート、読んでるかい？」

まりもはハイヒールの爪先で小石を蹴りながらうなずく。生暖かい風が、ビルのネオンを映した川面に吹きつけると、暗いしじまのなかでほのかに化粧の香りがした。

「わたしのお父さん、小説家なの。売れない小説家」

「へえ、カッコいいじゃない」

「ちっとも。貧乏暮らしで母さん年中ぼやいているわ」

石段を上がって道路へ出る。信号が赤から青に変わり、一斉に車がエンジンをふかす。丸い光の輪が次々とまりも

の白い顔を浮かびあがらせ、やがて闇に沈む。

空は奇妙に明るく白く横たわっていた。まりもは絡めていた腕を離し、少し遅れて歩いてくる。立ち止まり振り返ると、まりもは敷石の線の上を伝うように歩き、両腕を広げてバランスをとっている。線からはみだして、まりもは笑いながら走ってくる。ハイヒールの音がビルの谷間に響いてこだまする。

僕は初めて他人を、ひとりの女を好きになれるかも知れないと思った。

*

街のさまざまな片隅では言葉が立ち竦んでいた。失意や希望が風に吹かれ、街角に転がり込んでとぐろを巻いている。陽が落ちて夜がやってくると、ネオンに引き寄せられた冗舌が鎌首をもたげる。

歩道橋の上から見る銀杏並木は、黒々と重たい。螺旋階段を降りる。運動靴がキュッと鳴る。

僕は半年ぶりに定時制高校時代の友人らがたむろする喫茶店に行った。

薄暗い店内の片隅に男と女が五人。コーヒーカップの固い響き。

「時間と空間は絶対的なものではなく、相対的なものなんだ。空間がなければ、時間もない」と男Aがアインシュタインを真似て言った。

「時間など存在しない。太陽が昇り沈むだけさ」男Bが言う。

「時間がなければ、老化もしないのかしら？」

うつむいていた女Cが顔を上げた。

「始めも終わりもない。ただ、現在が死滅していくだけさ」男Dがぶっきらぼうに言った。「でも、時間がないと進化はどうやって説明するの？」

女Eのハスキーな声を聞きながら、僕は独り硝子の向こうの街並みを見ていた。

物体が影絵のように音もなくうごめいている。老人が歩いている。子供が転ぶ。女が立ち止まる。疾走する車。くっきりと夜空に浮かぶ信号。赤、黄、緑。

もう一人の僕が、老成した顔で窓の外からのぞき見をしている。知ったふうなことを言う若造ども。独りでいるより、仲間といたほうが楽しい？　それは自分を見つめなくてすむからだ。時間は存在しない？　そうではないだろう。時間は外部にあるのではなく、自己の体内にあるのだ。

突然、笑い声があがった。暇なのだろう、マスターが横に立っていた。ビールが運ばれてくる。三本、四本、小さなテーブルがいっぱいになる。空き瓶が増えるにつれ、頭の中がもやってくる。くるくると空回りするフィルム。絞

られた光源が白い布の上で丸い輪を浮かびあがらせる。その輪の中から三年前の二十歳の僕が近づいてくる。

不況のまっただなか、慌ただしく行き交う勤め人たちの疲れの混じった険しい表情を一瞥しながら、僕は数枚の履歴書を持ってビルからビルへと渡り歩いた。が、治りかけていた吃音障害がぶり返し、ほとんどの面接は短時間に終わった。

対人関係恐怖症、他人の感情の動きに対して病的なほど敏感になり、相手の顔色ばかりを見ていた。極度の緊張症は、見知らぬ他人や複数の人間の前では全身が小刻みに震え、唾液は干上がり、上唇の裏側の粘膜と歯茎がひっついた。口を大きく開けられず、しゃべるたびに粘膜のはがれる嫌な音がした。息苦しさで呼吸困難におちいり、ぜいぜいと肩で息をした。しゃべろうとすればするほど言葉はつっかえ口ごもった。手足から汗がじっとりとにじみ出し、ぬるぬると気持ち悪かった。

発語する意欲をなくし、僕は次第にしゃべることを放棄していった。口を閉ざし無理に話すことをしなくなってから、僕は闊達になった。風景として見る人間たちは、やさしく善意に満ち満ちていた。僕の頭蓋骨のなかでは、閉じ込められた言葉が次から次へと生まれ、妄想の世界を構築していった。

精神とはなんと不思議だろう。大脳のなかで織りなす無数の意識の河。一方が塞き止められると他方へ伸び、そこからさらに新たな支流が発生し、意識はどこまでも増え伸び続ける。その膨大な量の意識の河の流れに僕の鉛のような自我が溺れ、助けを求めて叫んでいる。

「この世のものとは思えない青い空……。十二歳の僕は、あるひとりの少年と護岸工事中の運河にいた。

蛇行しながら運河は遠く細く、霞の彼方へ流れている。野焼きの煙があちこちで狼煙(のろし)のように挙がる。工事中の急な斜面を滑って降りる。河岸を進むにしたがってコンクリートで固められた道幅は狭くなり、泥の臭いが鼻をついた。積まれた石垣は次第に高く直角にそびえだす。石垣のところどころに排水のための竹筒が埋め込まれてあり、それを足場にしながら石垣をよじ登る。下から押し上げる少年。登りきった僕は道にひざまずいて少年に手を差しのべる。見あげる少年の黒い顔に汗が光っている。僕は少年の手を握りしめ引っ張り上げる。が、ふと記憶の底から埃が舞いあがり、僕の眼の前に黄色い畳が忽然と現われた……

庭の見える二階の八畳部屋。僕と母は、再び入院した父の友人が住む大きな屋敷の一室を借り寝泊まりをしていた。僕が十一歳のときだ。その家には僕と同い年の男の子がいた。少年と僕は、学校から帰ってくると庭でキャッチボールをしたり、部屋でテレビゲームやトランプをして遊んだ。

少年の母親は、なぜか彼のそばを片時も離れない。まるで僕から災厄のかかるのを防ぐためだと言わんばかりに。そして、その汚らしいものを見るような視線が、ときどき僕の額に突き刺さる。僕は知らん顔をしているが、どうしても身体が震え、赤面してしまう。子供心にも置かれている状況はわかっていた。次第に卑屈になっていく自分を、僕はうとましい小動物を見るような眼で、僕自身を冷酷に観察していた。

十歳のとき、白い壁に背をもたせて気を失った夏の日から、僕は重度の吃音症に陥った。しゃべるとき畳を手の平で叩かなければ最初の言葉が出なかった。それは日を追うごとにますます酷くなり、渾身の力を込めて畳を叩いたときだけ言葉を発することが出来た。喉の奥に詰まっている重苦しい空気の蓋を、畳を叩く反動で押し出し、つっかえがとれた喉頭から、ようやく言葉を発することが出来るのだ。手のひらの痛さと神経的な疲れ、自分でも滑稽だと思いつつ、叩く畳からうっすらと埃が舞い上がるのを眺めていた。

少年は笑いを押し殺し、意地の悪い目付きで僕に話しかけ無理にしゃべらせようとしている。固く口を閉ざした僕の眼の前で、彼は畳を叩き、「アッ、アウッー」と僕の口真似をする。真っ赤になった僕の顔を見て、彼は面白がって何度も繰り返した。横から少年の母親が、「そんなことをしていたら、しまいにあなたも口が利けなくなりますよ」と僕をちらっと蔑むように見て注意した。

『違う！　ぼくは口が利ける。お、思うように言葉が出ないだけだッ』

心のなかで抗議し叫んだそのときから僕は、少年とその母親にもの悲しい憎悪と吐き気のような殺意を覚えたのだった。

『お前なんか、死ね！』電撃のような言葉が僕の身体を貫いた。少年の安心しきった顔。僕の手から力が抜ける。五本の指をまっすぐに伸ばした。ぬるっと手が離れていく。瞬間、少年は反り返り頭から落ちていった。埃をかぶったコンクリートの上で彼は一回転すると、濁った河の中へ吸い込まれていった。僕は立ちあがり走った。「お前が悪いんだ！」叫びながらどこまでも走り続けた」

僕は人間との関係を忌み嫌った。関係は物質だけでたくさんだ。他人から遠ざかるにつれて、彼らは僕の視界から消えていったが、日常のなかでは影のように周りをうろついていた。その亡霊が、のっぺらぼうな得体の知れない恐怖そのものとなり、僕は極度の被害妄想に陥った。いつも僕は身構えていた。神経がすり減りくたくたになった。アパートに帰り、僕は厳重に戸締まりをすると、ほっと独りの喜びを噛み締めた。街へ出るとき、僕はカッターナイフ

をズボンのポケットに忍ばせた。自分の身は自分で守らなければならない。ビルの壁ぎわ、エレベーターの中。敵に背中を向けてはならない。駅では細心の注意を払う。ホームから遠く離れて電車を待つ。

僕の聴覚はどんどん鋭敏になり、針の落ちる音も聞き逃さない。僕はたえず耳を澄ましていた。音はいたるところで、限りなく鼓膜を圧倒した。その強大な音のなかにひそむ小さな音、それが僕を怯えさせる。猿のような僕、したり顔の大人たち。飽き飽きした。たえず意識を張り巡らしている僕自身でさえ僕のことがわからないのに、どうして他人が僕のことを理解できるのだ。

僕は鎧をまとう。筋肉の鎧だ。黙々と一年間バーベルを挙げ続けた。僕は筋肉と、無表情の仮面を手に入れた。他人の怒りや悲しみに心を動かさぬこと。共鳴しすぎる僕の神経を太くして響かさぬこと。そして、河原の小石のようにひっそりと転がっているのだ。

*

京都へ向かう快速電車が走り出した。まりもは身体を固まらせて座っている。見ないでも気配で僕にはわかる。正面を見つめ、自分の思いのなかに降り立ち、ただひたすら一点に凝縮していこうとしているのだ。回転する独楽のように、周りの夾雑物を振り払い、静かに澄んだ真空地点に意識を置こうとしている。

電車が走るにつれ、窓の外の風景は色彩を変えていく。まりもがふっと息を吐く。身体の固さが消え、穏やかな顔で僕の横顔を盗み見、窓の外へ眼をやる。空席だらけの車内には、僕らふたりの呼吸する音だけが規則正しく聞こえてくる。

静まり返った車内、飛び退る木々や建物。どこへ行くのだろう?と、ふといぶかしく思った。京都だ、京都へ行くのだった。沈黙が心をなごませる。この静かで穏やかにたゆたっている時間と空間を乗せて、電車は走りに走る。また、どこへ行くのだろうと思った。

月に一度、僕とまりもは平日の日に休暇をとって京都に行く。一日かけて寺を見て歩く。まりもには寺が似合っていた。姿かたちが、巫女のような長い髪のせいもあるが、まりもの精神のありようが寺に似合っているのだ。長身のためか少し前屈みに修業僧のように歩くまりもの姿が、風景にまじわり融け込んでいく。糠のような雨、眼を凝らさないと雨は見えない。まりもの黒い髪が雨に濡れて光っている。

「ちょっと、早く歩きすぎだよ」

僕はまりもの髪をつかんで引っ張る。まりもは止まらずにずんずん歩く。長い髪が水平になり、僕とまりもの間で

帯のように横たわっている。まりもは痛さを期待しているかのようにますます先を歩き続ける。僕の手にまりもの重さが伝わってくる。黒々とした髪がぴ～んと張って、まりもの頭がのけぞる。僕は怖くなって手を離す。まりもは立ち止まり振り返る。眼の白い部分がキラリと光る。

まりもはたいてい伏し目がちだ。強く閉じた唇に、意志の強さをかいま見せる。ときおり、突拍子もなく陽気になり、頬を染め、声が一オクターブほどうわずり冗舌になる。そんなときのまりもは要注意だ。必ずそのあと、反動でかたくななまでに無口になり、最後は帰ると言い出す。まりもの身体のなかには躁鬱という病が棲んでいるのだ。自分でもどうすることも出来ないでいる。沈みきって独りでどんどん落ち込んでいく。

まりもはなぜかあまり笑わない。身体全体に漂わせている緊張感が笑いを縛るのか、あるいは笑うことで自分を見失い、笑いのあとにくるしっぺ返しが、不幸を招来するとでも思っているのだろうか。

竹林のなかの細い道を歩く。

静かだ。

竹の一本一本がまっすぐに伸び、暗い雨空を槍のように突き刺そうとしている。

「ちょっと、待って」まりもが道端に屈み込んだ。

「どうしたの?」僕が近づくと、「こんなところに……」とまりもが指を差す。指の向こうに三十センチほどの古ぼけた板が立っている。墨の字は薄く消えかかり、「――の墓」と読める。まりもは眼をつむり合掌すると、すぐに立ちあがり、背を丸めて歩き始める。竹林は次第に切れ、左手に白い壁が瓦をのせて先へと続いていた。

湿った黒い土。

まりもは静かに歩く。足音がしない。

広い道路を渡る。砂利道に出る。

疎水の流れに遡って歩く。

寺の門をくぐる。紅葉がきれいだ。

雨に濡れた小犬が尻尾を振って、まりものスカートに飛びかかる。まりもは悲鳴をあげ、半回転する。住職に呼ばれた小犬はまりもから離れる。

寺から寺を歩く。

静まり返った風景。

灰色の空……

*

秋の終わりを告げるような風がどこからともなくやってきて、街並みを掃いた。冷たい道路にうずくまっていた紙屑は、煽られ、仕方なく坂道を転がっていった。風は反転すると、アパートの窓から見える小さな木立を揺るがした。

階下で電話の呼び出し音が鳴っている。管理人の声がした。僕は階段を駆け降りる。

「お父さんが死んだの！　自分から死んじゃったの！」

まりもが電話口で泣き叫んだ。

まりもの父はダンプカーとぶつかり即死した。

肌寒い早朝、近くに住む老人が見ていた。信号が青から黄色に変わると、まりもの父はゆっくりと歩き出した。広い横断歩道の真ん中で、まりもの父はなにかを考えるかのように空を見あげ立ち止まった。十一月の薄い光が、その姿を浮かびあがらせ、静寂が息を凝らしていた。突如、地の底から躍りあがるようにダンプカーが迫った。まりもの父は、ちらっと顔をダンプカーに向けた。「避けようと思えば避けられていた」と老人は言った。だが、まりもの父はその場から動こうともせず、じっと立っていた。そして、あろうことか迫ってくるダンプカーのほうへ、一歩踏み出したのだ。「あれは自分からダンプカーに当たりに行ったのだ！」老人は声を震わせて、何度も言ったそうだ。

四か月のうちに、僕の近くでふたりの人間が死んだ。ひとりは子供で、ひとりは大人だ。

一週間が経った日曜日、僕はまりもを訪ねたが、家の周りをぐるぐる歩いただけで帰ってきた。

まりもの父がなぜ自殺をしたのか、僕にはわからない。小説家からだろうか？　そうではないだろう。四十五年間生きてきた男にとって、自分から人生を終わらせるということは、なにを意味するのだろう。これ以上生きていても仕方がないと思ったのだろうか。日常の繰り返しが、反吐が出るほどに鼻についたからなのか。

一度だけ、まりもの父親と会ったことがある。

駅前の喫茶店でまりもと逢っていたとき、ひょっこりと父親が店に入ってきた。白髪で、背が高く、驚くほど痩せていた。ヘビースモーカーらしく、ひっきりなしに煙草を吸っていた。僕の歳を訊いて、二十三だと答えると、「そうか、生まれてまだ二十三年か」と大量の煙を鼻から出した。まりもと同じように口数が少なかった。だいぶ時間が経って、まりもの父が重い口を開いた。

「まりもはねえ、小さいころから感受性の人一倍強い子で……あれはまりもが五歳のときだった。私と家内、まりもの三人で近くの川へ遊びに行ったときだ。川辺には丈の高い雑草が生い茂り、汀（みぎわ）がわかりにくく、私が草をかき分け川沿いに進むと、うしろから家内が『あなた気をつけて、川に落ちて死んでしまいますよ』と声をかけてきた。私は大丈夫だと言いながら、なお前へ進んだ。そのとき、『パパ駄目！　死んじゃう』と、まりもが怯えたように泣き叫んだのだ。まりもの切迫した声に驚き、私は草むらから離れるとまりものそばへ近寄り、『大丈夫だよ、パパはそんな簡単に死なないよ』と頭を撫でた。まりもは気が静まったのか、『パパ、危ないですよ』と大人びた口調で私の顔を見あげた。五歳の子供に死の意味などわかるはずもない、母親の言葉をまねて言ったのだと思った。しかしあとで考えてみると、どうもまりもは、死の意味を先天的に理解しているのではないかと思った。あの差し迫った叫び声は、とても母親の口まねで言ったものだとは思えない。死がもたらす欠落感の恐怖が言葉のなかに込められていたと、私は今でも思っている」

まりもの父は、遠く過ぎ去った日の、川のほとりの情景をまのあたりにしているように、眼を細めて宙を見つめていた。

まりもはその話を初めて聞いたのか、「そんな……」とつぶやくと、僕のほうを見て顔を赤くした。

「君、四十にして惑わずという言葉、知っているね」

父親はまりもを無視して僕に言った。

「あれは、四十になったら人生を迷わなくなるという意味だと思うだろう。違うね、本当の意味は四十になったら大いに迷うから、心を空虚にしてやり過ごせということだよ。四十歳というのは中途半端な年齢でね、過去と未来の狭間に立ってどちらへも動けない。そしていま立っている場所はなんなのか、そもそも出発点が間違っていたのでは、と考えるのだよ。その覚醒は辛いね。今まで生きてきた全てを否定したくなる……」

僕は急にしゃべり出した四十五歳の男の顔を、あらためて眺めた。その僕の表情を見て、まりもの父は突然笑い出し、伝票をつかむと出て行った。

「変なことを言うお父さんだわ……」

まりもは父親のうしろ姿を見送って、そうつぶやいた。

*

日常のなかを、僕は低空飛行を続けていた。

まりもと水曜日の夜と土曜日に逢う以外、僕は仕事が終わるとまっすぐアパートに帰った。もともと人付き合いの苦手な僕は変わり者で通っていたし、必要なことのほか誰とも話をせずどこへも行かなかった。夜は耳栓をして独り静かに本を読んだり、ぼんやり壁や窓硝子を見つめて物思いにふけった。

まりもと逢えない日曜日、僕はアパートの近くの公園で一日を過ごす。その公園は三つの角を持っていたので、近隣の人たちから三角公園と呼ばれていた。

僕はいつもの決まったベンチに座ると、蘇鉄の木を見あげたり、砂場で遊ぶ子供らの様子を飽かずに眺めた。背中から聞こえてくるJRの電車の発着音以外、公園はひっそりとしていた。遊動円木やブランコは初冬の陽射しを受けてじっとしている。長い髪を波打たせ、公園の入り口のす

ぐ横にある公衆電話に、女子学生が駆け込んだ。数分後、赤い手帳を片手に、今にも泣き出しそうな顔で電話ボックスから出てくると、小走りに駅のほうへ向かった。

公園の周りには八台の車が違法駐車している。四角いコンクリート柱の上で、時計の針が左へ左へ少しずつ移動していく。眼の前を数羽の鳩が歩いている。一羽、二羽、三羽……、全部で十四羽の鳩だ。一羽の鳩が小さく飛び立つと、続いて二羽の鳩が飛び立ち、左横にある鉄棒の下をよちよちと歩いていた。

僕の足元で煙草の吸殻が十二本になった。時計の針の進行とあいまって、空虚な気持ちに重さが加わり、じりっじりっと落ち込んでいく。やがて胃液で意識が融け始め、僕の大脳は空っぽになった。子供を叱る母親の声で、僕の大脳に再び血液が流れ始める。消したはずの吸殻の一本が、かすかに煙を上げ、しぶとく燃えていた。

三角形の底辺の部分が大学の裏門と隣接していて、学生たちは車の多い道路を通らずに公園の中を道がわりに通る。その学生たちを見ながら、いつも僕は一体なんのために生きているのだろうと、自問自答を繰り返していた。

「あなたって、奇妙な生き物ね」と、まりもは僕に言ったことがある。「そうかも知れない。けれど、君だって」僕は苦笑いした。まりもは、そんな僕の言い方がよほど可笑しかったのか、声を立てて笑った。

今はいない資材課の主任は、僕を会議室に呼び、「君の存在を示せ」と言った。存在を示せ？　どういうことだ？百八十センチの長身で顔はキツネのように細かった。主任は、「ゾンザイ」とは言わず、「ゾンザイ、ゾンザイ」と言った。老けて見えたが二十八歳だった。中学を出てすぐこの工場へ就職したと言うから、十三年間勤めて主任になったわけだ。奥さんは製造課の人で、歌手の小林幸子に似ていた。主任は奥さんのことを、さっちゃん、さっちゃんと呼んでいた。資材課の何人かと新婚家庭というのを見せてもらったことがある。寝室の大きなベッドと花柄のカバーが印象的だった。その幸せそうだった主任が、結婚してから四か月目に、スナックの女と駆け落ちをして姿をくらました。さっちゃんは長い間工場を休んでいたが、自殺をしそこなって入院しているという噂だった。それにしても、人間とはよくわからない生き物だと思った。

公園には誰もいなくなり、冷たい風が吹き始めた。僕はいつも行く中華料理店へ入った。焼き飯とラーメンを注文する。焼き飯を食べていたとき、急に鼻血が出た。僕は食べるのを中断して上を向いていた。周りの客がいぶかしげに見たり、くすくす忍び笑いをしているのを横目で見ながら、なぜこんなときに鼻血が出るのか？　と僕はとまどい無性に腹が立った。ウエートレスが気づいてティッシュペーパーを持ってきてくれた。僕はティッシュを二枚抜き取り、左の鼻の穴に突っ込んで焼き飯の続きを食べた。……鼻血は、なぜいつも片方の鼻孔からしか出ないのか？　僕は冷めたラーメンを半分ほど残し店を出た。

*

まりもと僕のことが資材課で噂になり始めた。ベルトコンベアの横で、長髪の三人の男たちが顔を突き合わせて話をしている。僕を見るとうすら笑いを浮かべた。僕は知らぬ顔で通り過ぎた。

「あいつ、あの女と付き合っているんだって。二年前のこと、誰か教えてやれよ」

古顔の男の声が僕の耳に入った。

昼前のことだった。僕は製造課への出庫を早く終え、トラックから運び込まれた新たな部品を入庫していた。部品を各棚へ収めていく。一年前に入った二十二歳の男は、眼鏡を光らせながら出庫を続けている。ようやく終わったのか、男が僕のそばへ近づいてきた。「あんた、製造課の白井っていう女と付き合っているのか」男は僕の顔を下からのぞき込むようにして言った。「あの女の、二年前のこと教えてやろうか。――、――。なっ」と耳元でささやいていやらしく笑った。「それがどうした、お前になんの関係がある」僕は低くうめくように言うと男をにらんだ。「なんだと！」突然男に肩を突かれよろめいた。僕は咄嗟に体勢を立て直し身構えた。「やるのか！」男は眼鏡を棚の上に置くと、いきなり殴ってきた。僕は上体をひねり男の拳をかわした。にらみ合ったとき、身体中の血液という血液が大脳に流れ込み、頭が割れんばかりにうずいた。頭髪が逆立ち、僕は全身を震わせた。長髪の男は口をゆがめて笑っている。男が一歩、二歩前に出てきた。僕は右の拳に全体重をかけて、男の鼻頭へ打ち込んだ。「うっ」と男はうめき、よたよたっとうしろへよろけると部品棚へ背中をぶつけた。鼻のあたりを手で覆っている。指の間から血が流れていた。男は手についた血を見て呆然としている。二発、三発立て続けに男の顔を殴った。驚くほど大量の血が鼻から吹き出し、男の口から顎を真っ赤に染めた。男はうずくまり両手で顔を押さえている。その指の間から血があふれ、コンクリートの床に流れ落ちた。僕はなおうずくまった男の頭部へ拳を打ち込んだ。すさまじい怒りが僕の身体の奥底で爆発し、そしてその熱波は怒涛の勢いで脳内をかけめぐり、僕は憎悪の鬼と化して男を殴り続けた。

「やめろ！　それ以上殴ると死んでしまうぞ」

誰かが僕の背中で叫んでいた。背後から両腕を羽交い締めにされた。騒ぎを聞き駆けつけた二、三人の男たちが間に割って入った。長髪の男は抱きかかえられ、医務室へ運ばれて行った。

「こんなに大量の血を見たのは初めてだ。あいつ、よほど血の気が多い奴だ」
コンクリートの床に流れている血を見て同僚が言った。
赤ら顔の班長に呼ばれた。「あまり、無茶をするな」班長は呆れたように首を振ると、僕の顔を不思議そうな眼で眺めていた。
雨の上がった空は、灰色の雲が幾重にも重なり、どんよりと蔀屈していた。旗を下ろされた銀色のポールが二本、暗い空に突き刺さっている。ところどころに雨水が、へこんだコンクリートの上で鈍い光を放っていた。
僕とまりもは、その水溜まりを避けながらコカコーラの赤いベンチに座った。生臭い風が林立するビルの向こう、霞んだ山々の頂上から吹きつけてくる。
「わたしたち……」
まりもは風で顔を覆う髪を、片手で払いのけながら言った。
「わたしたち、出会うのが遅すぎたのよ。あと、二年早く会っていればよかったのに」
「なぜ、そんなことを言う?」
僕はやりきれない腹立たしさでまりもに言った。また自分ひとりで考え、思い詰めていると思った。
木馬もコーヒーカップも停止していて、黄と白の色はくすんで見えた。まりもは僕と別れたいのだろうか?
「わたし、あなたが考えているような女ではないわ」
僕は黙っていた。デパートの従業員が僕らのほうを見て通り過ぎた。僕は二年前のまりもを知らない。それはどうだっていいことだ。まりもが工場内の何人かの男と、性交渉があったとしてもだ。僕はまりもに、なにかひとこと言ってやればよかったのかも知れない。けれど、僕は黙っていた。どう言ってよいかわからなかったからだ。
「あなた、きっとわたしから離れていくわ。でもいいの、わたしが悪いのだから」
鈍い軋む音を立てて木馬が回り出した。沈んでは浮きあがり、スピードを上げていく。
[夜更けの繁華街を僕はさまよっていた。二十一歳のときだった。欲望の質を色にしたら、こうだと言わんばかりに赤や黄のネオンがギラギラと輝いていた。人が絶えるまで、その店の前を行ったり来たりしていた。人が絶えた隙を見て、僕は早足で店の中へ入った。
「いらっしゃいませ」受付の男が言った。「ご指名は?」
僕は首を横に振った。待合室では数人の客が週刊誌を読んだりテレビを見て順番を待っていた。係の男が番号札と茶を持ってきた。僕は顔を上げずにうつむいたまま番号札を受け取った。順番がきて僕の番号が呼ばれた。エレベーターの中で女が待っていた。扉が閉まった。ぎこちなく立っている僕を見て女は、「初めて?」と言った。二十五、六ぐらいの歳だろうか、僕はうなずいた。ふっと女の顔に笑みが浮かんだ。が、すぐに消え、真面目な表情で僕を見つめた。そのあとも、僕は何度かその店へ行った]

まりもがベンチから立ちあがり、うなだれて歩いて行くのを僕は慌てて追っかけると、まりもの腕をつかんだ。まりもは泣いていた。
港の見える公園に行く。海は荒れていた。風は細い喉元から絞り出すように嗚咽していた。
数時間、僕とまりもは船を見つめていた。
身体が冷えきって、僕とまりもは武者震いをするかのように震え出した。
公園を出る。雨が降り出してきた。まりもの小さな傘のなかで、濡れる肩。光の欠片すらない暗い空。暗闇のなかほどから白い大粒の雨が滝のように落ちてくる。アスファルトの路面にはじけ、ズボンの裾が重く濡れそぼる。まりもは立ち止まり僕を見つめる。「もう、帰らないと……。バスの時間が」口をすぼめて言う。水しぶきを上げて駅までの数十メートルを走る。まりもが声を上げる。肩で大きく息をつくまりも。湿っぽい空気が身体にまとわりつき、僕は身震いをする。明るい構内にうごめく人の群れ。僕とまりもは、このなかでは場違いな闖入者のように思われた。階段を駆け降りるまりも。途中で突然振り返り、眼を見開いて僕のほうを見る。「早く、行くんだ!」僕は喉の奥でまりもに叫んだ。長い髪が一瞬ひるがえり、まりもの姿が消えた。

*

僕はやさしさを表現するすべを知らない。まりもの悲しみを受け止めてやり、僕が半分加担してもよいのだ。心はそう思っても言葉や身体は反対の行動をとる。まりもは僕にとって唯一、他人ではない他人なのだ。自分と他人との間の人間、原初の記憶を共有している他人、そんな気がするのだ。
まりもには、遠いふるさとの匂いがあった。まりもは幼児期の癖をそのまま引き継いで大きくなったようだ。しぐさのひとつひとつが、幼いころのまりもをほうふつとさせた。
暖かくなれば旅行に行こうと、僕はまりもに提案した。僕の話をまりもは嬉しそうに聞いていた。その顔がまぶたから離れない。
朝、いつものように僕は工場まで走った。更衣室から出ると、融けた雪でアスファルトの道が濡れていた。製造棟

の工事中の白いテントシートが、風ではためきめくれている。ラジオ体操の時間が近づき、ぽつぽつと更衣室から人が出てきた。突如、細い悲鳴が聞こえた。その声のほうを見る。工事中の白いテントシートから、灰色の物体が落下していく。それはゆっくりと半回転して、黒いアスファルトの路面に叩きつけられた。長い髪が孔雀の羽根のようにひろがった。近くにいた作業員たちが駆けつける。まりもはよろけながら立ちあがると、白い製造棟の壁に両手をついた。そして壁を伝うように、少しずつ歩いた。だが、数歩も行かないうちに、崩れるようにその場に倒れ込んだ。僕は走った。まりもを抱え起こす。まりもは青ざめた顔をして、眼を閉じたままだ。僕はまりもを抱きすくめる。まりものあたたかな身体の温もりが、僕の身体に伝わり、僕の口から言葉にならない叫びがほとばしり出た。

サイレンの音。救急車が工場の裏門から入ってきた。まりもは担架に乗せられ、車内に運び込まれる。扉が閉められ車が走り出す。僕は追いかける。サイレンの音。まりもを乗せた車は、スピードを上げる。僕はそのうしろを走る。

「まりも！」僕は叫び、車に手をかける。濡れたアスファルトに滑り僕は転ぶ。立ちあがり追いかける。雪が舞っている。灰色の空が回っている。救急車はどんどんスピードを上げ、僕から離れる。工場を出て行く。次第に遠く小さくなる……

僕とまりもの関係を、なんと呼べばいいのだろう？　恋人同士、そう恋人と呼んでさしつかえない。性的なものが介在しない純粋無垢な恋人同士。それにしても、まりもは僕のどこを気に入っていたのだろう。若さもなく、現在から未来を黒く塗りつぶそうとする僕の生き方。まりもは、まりも自身も気づかない無意識の奥底のどこかで、僕の病の正体を悟っていたのかも知れない。

僕らの交際は結局、暑い夏に始まり冬のさなかに突然に途切れた。まりもの不慮の事故死によって。ラジオ体操に遅れまいと、二階の製造棟の工事中の階段を降りようとして……

「まりも、ラジオ体操なんてどうだっていいんだ」

生真面目なまりも。なぜ、まりもは死んでいったのだろうか？　なぜ、二十一歳の若さで……

僕は、まりもにさよならと言うべきか。だが死んでいった者に対して、さよならとはなんと意味のない言葉だろう。生き残った者には思い出が残り、死んでいった者はなにも持ってゆけない。まりもの生は中断されたまま、消滅してしまった。過去も未来も置き捨てて、現在という時空の一瞬の裂け目に呑み込まれ、どこかへ行ってしまった。

「あなた、わたしの死を望んでいたでしょう」

まりもの声が、降りしきる雪の空から落ちてきた。

まりもが亡くなってから一か月後に、僕は工場を辞めた。二月の底冷えのする日、細い畑道を歩いた。いま、白い建物の中では、リフトやベルトコンベアが部品を運んでいるのだろう。正面から吹きつけてくる風に、僕は立ち止まり顔をそむけた。まりもの姿が、抜けるような青空に浮かんだ。しかしはっきりとした輪郭で像は結ばず、白い顔のなかに大きな瞳だけが光って見えた。僕は工場に背を向けると、もう立ち止まり振り返ることをせず、駅への道を急いだ。

＊

――一冊の大学ノートに遺された息子の手記は、ここで終わっている。

息子は、白井まりもが亡くなった一年後の同じ冬の日の朝に、独りアパートの殺風景な部屋で死んでいた。

息子は白井まりもの事故死を契機に工場を辞め、新しく生まれ変わろうとしていたのだが、しかし彼は、生き延びることを選ばず死を選んだ。それも、餓死という彼にふさわしいやり方で。

十二歳のとき、ひとりの少年を水死させたときから、彼の死への伏線はあったのかも知れない。それにしても、息子の周囲にはあまりにも死が充満していた。肉体を鍛えることによって、彼は再生を試みたが、皮肉にもその肉体を削ぐことにより、死に至った。息子はなんのために、この世に生まれてきたのか？　少年期、辛い環境のただなかに住まわせた息子に対して、私は自責の念で気も狂わんばかりだ。だが、彼の死に顔は、その私の思いを峻拒している。孤絶感を漂わせた彼の肉体は、誰の同情からも遠く隔って虚空にそそり立っている。

ノートの最後に、彼の詩を認めたので、次に掲げる。

ある朝
独りの少女が転落した
アスファルトの路面に赤い血が流れ
ラジオ体操が凍りつく
ぼくの吃音と青い吐息が冬に触れ
朝が融け出す
無数の朝の死骸は運河にうねり
河口へ……
午前は死んだか？
工場の門扉をひらき
悪意の照り返す午後のただなかへ
ぼくは走り出る！